
久坂玄瑞伝

しげはる

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

久坂玄瑞伝

【Nコード】

N6595C

【作者名】

しげはる

【あらすじ】

幕末、激動の時代に命がけの戦いを挑んだ長州藩士、久坂玄瑞。「草莽が、変革の主役である」と説いた師の教えに強く影響を受けた彼は草莽たちによる「攘夷」実現を目指し、思想戦を繰り広げていく。

幕末期到来（1）

日本最後の乱世となる幕末期……

その動乱の時代に生きる人々の物語……

「幕末期到来」

国は江戸を中心に藩と言う小規模な政治組織を統括する幕府という存在によって治められていた。本州の西国に位置する長州藩。現在の山口県一体がそれにあたり、その頃庁舎を置いていたのは現在の萩市であった。市の北、日本海に面した場所に一つ城の後が残っている。

萩城（指月城）は今でこそ城壁だけの静かな庭となっているが、当時は立派な造りの城が建っており城下町もにぎやかに栄えていた。話はその城下町より少し南に下る平安古の方へと移る。

2

幕府の権威が次第に弱まってきた頃、萩のある医家に一人の青年が住まっていた。彼の名は久坂玄瑞といった。この頃の彼はまだ町の秀才な学生に過ぎなかった……。その日久坂は何時もの様に明倫館での講義を済ませ帰宅する所であった。いつも歩いている平安古の細い路地から、音が小さく聞こえてくる。

（なんだろう……？）

久坂は音を逃すまいと耳を澄まし、遂には足を止めてしまう。彼は日頃から些細な事でも興味深く囚われてしまう所があった。

ここでも例外なく僅かな関心抱かせたこの音に囚われてしまったようだ。

晋作あたりが聞いたら「ほっときゃいいのに……」とぼやかれてしまうだろう。

そんな台詞を吐くであろう男との出会いはまだ先のことだが……。音のする方向へ近づくにつれ、その正体が明かなものとなってくる。どうやらこれは……。詩のようだ……。声は低く落ち着いているところから間違いなく男性のものと思われる。更に関心が強くなる。しかし、近づいてよく詩を聞いてみるにこの詩は時勢を歌っている様に聞こえる。

久坂はこの声の主を知ろうと、門戸を叩いてみた。

「御免ください。主殿は居られませんか？」

先程まで続いていた詩歌はパタと止み、一瞬の沈黙が訪れる。

久坂はそれでもこの家の主と思しき人に話を聞きたくて話を聞いて欲しくてもう一度声をかけた。

「私はこの辺りの医家に居る久坂と言うものです。どうか居られるならばお返事頂けませんか。」

久坂の声は、詩吟でも久坂流と言われ後まで残るほど有名で兎に角深く澄んだ声色である。

2回目の呼びかけに又も沈黙が訪れる。

もう駄目かなと流石に諦めの表情を見せた久坂は、1歩後退し立ち去ろうとした。

その時、彼の直ぐ後ろ……。つまり家屋から人の声が響いたのである。

「申し訳ない。貴方の声が余りに深く澄み切って居られたので何処ぞの貴人様かと思いました。見ての通りあばら家故、どの様に出迎えたものかと思ひあぐね……。いや、失礼致しました。」

突然背後から掛けられた声に正直驚き心の臓の脈拍が上がっていた久坂は、慌てて声のした方へ振り返った。

背後の人物は背格好は小さいが、割と均整の取れた容貌の持ち主であつた。

ただ、その男の存在を外見より遙かに大きく感じさせているものがある。男の切れ長な黒瞳の・・・僅かに憂いを帯びてはいるが、その奥にある強固な意志の深さであつた・・・

久坂はその強い目から目が離せないでいた。そんな彼には一向に気付かない屋敷の主と思しき男は、口元にかすかながら笑みを湛えてこういった。

「宜しければ・・・久坂殿。無礼のお詫びに拙宅で茶の湯でも如何ですか？」

その思いがけない台詞に、ぼんやりしていた久坂ははっと意識を男の声に引き戻した。

「え・・・、よ・宜しいのですか？私の様なものが・・・貴方の詩吟を手繰って来ただけの・・・」

「いやいや、お恥ずかしい。アレは私が暇つぶしに作った詩歌に過ぎません。ささ、どうぞ」

アレコレ言い訳を並べながらも久坂は結局男の進めるままに室内へ通された。

門を潜り抜け、玄関から部屋へと通される。

通る先々で様々な書物に出くわす。

この男、本当に興味深い。これだけの書物に囲まれてはいるがその全ては自分達と同じ学者になるための学術書に過ぎない。でも確か

に詩歌から聞こえた歌は・・・そんな学術の本では生み出せぬ大きな言葉であった。

「さ、こちらへどうぞ。久坂殿の事は実は前々から知っておりまして。町の秀才と評判高いですからね。」

男は穏やかな口調で話す。

「それは・・・恐縮です。私の名をご存知とは。・・・・・・そういえば・・・まだ貴方の御名前を伺っていなかったですね・・・」

久坂は先程から引っかかっていた、男の名前を聞いてみた。

「ああ、これは失礼した。私は山県源太郎と申す者です。」

「では、山県殿・・・早速で申し訳ないが少しお尋ねしたき事が御座いますが・・・宜しいですか？」

「ええ、構いませんよ。」

山県は静かに願い出る久坂の申し出に快く応じてやると、次に来る言葉を待った。

「・・・私が本日こちらへお伺いしたのは、先程吟じられていた詩歌の内容を詳しくお話いただきたかったからに他なりません。」

久坂は山県に先程の詩歌の事を聞きたかった事を隠さず話す。

「私は城下で今まであの様な詩歌を吟じられる方を見たことがない・・・」

「……だからこの変わり者の詩吟に関心抱かれたのですな？」

山県は突然の訪問理由に顔色一つ変えず、むしろうつすら笑みすら浮かべてそう言葉を繋げた。

「い、いえ！ 変わり者などとは！ 山県殿は何故あの様な詩を？」

慌てる久坂に笑みを浮かべていた山県は何故と問われて急に真面目な表情に変わる。

「久坂殿、君は今の世をどう思われる？ 私が歌っていた詩歌から何か感じましたか？」

彼は突然の問いかけに先程聞こえてきた詩歌の意味を手繰ろうとしていた。

「まるで……余り表立って高らかに言えませぬが……まるで今の幕府の政を否定する様に聞こえました。」

久坂は声を潜めて静かに告げた。

「そう。今の幕藩体制では、この国は西欧諸国に食いつぶされてしまっただろう。今立ち上がらねば、取り返しかぬ事になろう。」

「しかし、立ち上がると言っても……どの様にして？」

久坂は山県へもっとうしろしい事を返す。

「うむ。今一番革命に必要なのは個々の意思を強く持つことか。少なくとも今の幕府や藩に頼っていたのでは何も変えられせん。」

「・・・・・・・・。」

「私はたった一人でも戦う覚悟がある。あの詩歌はそれを歌ったものだよ・・・・」

「・・・・・・・・。。。」

それを聞いた久坂は暫く畳に視線を落として考え込んだ。

（随分大きな思想ではあるが。しかし、やらねば何も起こせない・・
・山県殿の言う事も道理・・・）

「山県殿・・・確かに貴方のおっしゃる通り、今の政治体制では世の流れは良い方へは動かない気がします。誰かが起点となって動かさねば何も変化はない。」

「・・・・・・・・お解かりいただけましたか。」

「ただ学業に打ち込むも良いが、私も今ここから自身の改革を行い果ては日本の革命に繋げたく存じます。」

「ならば、まずは人を集めねばなりませんな。貴方は一人で動いてはならない・・・・。」

「はい、その様に致します。山県先生、本日はお教えいただき有難う御座いました。」

「ふふふ、久坂殿私は先生などと呼ばれるほど立派な事は言っていないですよ。」

ヒラヒラとおどける様に手を振り相貌崩し山県はそう言った。

この日、2人が出会い話したことがやがて国を大きく動かす事になるとはまだ知る由もない・・・・・・。

[illegible]

※敢えて国境をわかりやすくする為「藩」という名称を用いております。

神風連.com／蛤NET掲載作品

http://www.wshinpure.com/

幕末期到来（2）

久坂はその日話した事を一人自室に籠って思い出していた。

山県の詩吟から始まり、そこで聞いた時代の変化・・・・

それらを考えていると、ただ勉強にのみ明け暮れていた自身を小さいものだと感じてしまう。山県という人間の名は知らずとも、なかなか学に長けた人物がいる事は、月性（周防の僧）より何度か聞いてはいたが、突然に伺いたてる

訳にも行かず、また久坂自身にも学に対する自負があった為かなかなかその機会を持たなかった。

だが、今回その声を聞き彼の中にある志を僅かに垣間見たことで山県という人に対する尊敬の念を持つようになり、自分の中の思想に対して一つ確実に変化をもたらすのであった。

一暫く経ったある時、久坂は兄の友人に薦められ九州へ旅していた。久留米藩にいる和田逸平という詩文に長けた人物がいる。まずは彼を訪ね詩を持ち合わせ共に良く論じた。久留米をでて更に南、肥後熊本藩へと遠路足を運ぶと彼は宮部鼎蔵に面会した。宮部は詩人人気取りでおごりを持っていた久坂に

対して最初に罵倒を浴びせた人物である。

宮部鼎蔵を訪ね、一室にて対談を始めた。その時おもむろに宮部はこう言った。

「・・・吉田と言う人物を知っているか？」

口調は随分尊大でいくら年が離れている大人とはいえ先の旅路で幾度も丁重な扱いを受けていた久坂にとってはムツとする所があった。

「知っております・・・。」

少しムツとした口調になってしまう。

「其の方は彼を訪ねた事はあるか。」

「牢に繋がれているとは聞いておりますが、直接面会したことはありません」

宮部はそれ以上は聞かず、二人の間に少しの沈黙が訪れる。

沈黙を破る様に久坂は今までに書き記した試作を静かに宮部へ差し出した。先程からの宮部の態度に小僧扱いされているのだろうと思ひ込み多少の立ちを持っていた彼はそれでも読んで自身の評価を認めさせようと少なからず考えたようであった。

宮部は厳しい表情のまま静かに冊子を受け取ると黙々それに目を通し始めた。

その間久坂は、宮部が目を通すのをじっと見つめ、今度こそと自身を持って彼の反応を伺った。

一通り目を通していた宮部はいきなり冊子をパタと閉じると立ち上がって厳しい顔を更に険しいものに変えこう言い放った。

「其の方はこの様な暢気な詩文を作る為にここへ旅してきたのか！
全く持ってつまらぬ事だ！」

突然の怒声に久坂は先程までの苛立ちも何もかも忘れただ唾然として宮部を見上げていた。そんな彼を気にも留めず宮部は続ける。

「久坂玄瑞といったな。其の方、今世の中で何が起こっているのか知っているか。」

自分の兄や知人達が何が為にこちらへ旅せよと言ったのか解って居るか？この様な詩作に耽り自身を満足させるだけの一介の詩人と語る様な暇は無い。早々に帰られよ。」

思っても居ない痛烈な言葉に反論は愚か視線を変える事すら出来ず。ただ、怒りの熱を持って宮部が退出していく後姿を見送る事しか今の彼には出来なかった。

今までの自分の才能に対する自負も何もかも一気に叩き落されてずっしりと重たいものが圧し掛かった感覚に襲われる。屈辱を一瞬にして味わった彼は無性に腹立たしく思っていた。しかし、それは罵倒を浴びせた宮部に対してではなく今までの自身の驕りに対するものである。

（僕は今まで何をして来たのだ。山県先生に出会って解ったような気になって・・・結局何一つ解っちゃいなかった・・・宮部先生のおっしゃる通りなんと僕は愚か者であろうか・・・）

若い彼はひたすらに悔いていた。

情けなくて仕様が無い。このまま去れと言われるがまま立ち去るのが辛い。

久坂はせめて何か一つでも今の思いを詩歌に乗せて書き残しここを辞そうと、荷の中から矢立（筆記具）を取り出し七律を記した。詩帖から今書いたそれだけを破り取ると、文机の上に静かに置く。

来り訪づる熊城奇士の庵

海防の大儀遂に如何

・・・・・・

・（略）

そうして立ち上がりいざ去ろうとした時、宮部が現れた。

部屋の中程まで入っていると、机の上に何か紙切れが置いてある。

宮部はそれを目ざとく見つけ、少し腰をかがめて手に取ると繁々と眺めた。久坂はそんな宮部の様子をただじっと立ち見守っていた。

「ふむ・・・なかなかやりおるな・・・。」

宮部はポツリとそう呟いた。

「久坂殿、先程は失礼致した。長藩より来る秀才が如何程か、是非その志と才覚の程推し量ってみたかったのだ。誠失礼した。」

先程とは代わって丁重に詫びる男に流石の久坂も驚いてしまった。

「宮部先生。私の如き若輩にそんなもったいない事です。どうぞ面をお上げください。」

「む。しかし、貴殿も気分害されたであろう。宜しければもう少し時勢を方ってはいかれませぬか？」

宮部のこの言葉と真摯な面持ちに久坂は是非にと深く頷いた。

「・・・・・・異国の船が清国を取り巻き、阿片なぞ怪しげな薬物を用いて国内治安を大いに乱して居るとの事。隣接する我が国にも最近になって黒船が行き来するようになった

そうではないか！これに幕府はどうしたものかと手を拱いて居るそうな。我等が立ち上がらねば国家は崩壊する。」

宮部は熱意を持ってそう目の前の若者に訴えかける。

（黒船・・・？清国の様になるだ！？ここは神国だから大丈夫だと大人たちは言うが。この人や山県先生のおっしゃることが真ならば捨て置けぬ一大事ではないか！）

久坂は宮部の言葉を心の中で反復し目まぐるしい時代の変化と信じがたい現実を突然教えられ少しばかり眩暈を覚えた。

「では、宮部先生我々は・・・いや、私はどうすれば宜しいのですか？」

半ば錯乱状態にある頭を抱えながら、久坂は必死に宮部の答えを求めた。

宮部がそんな久坂の問いにゆっくり口を開こうとした時、襖の外側から静かに人の気配がした。宮部はそれを敏感に感じ取り、発せようとした声を抑えそちらへ意識をむける。

暫くして室の前で気配が止まるとそこから小さな声が聞こえてきた。

「宮部先生、お薄をお持ちいたしました。入っても宜しいですか？」

声はしっとりして如何にも品のある青年の様であった。

「どうぞ、お入りなさい。」

宮部がそれに返し落ち着いた静かな声で応答すると、少しの間の後

幕末期到来（3）

静かに入ってきた青年に二人は会話を止める。

襖を開け何か茶器を盆に載せゆっくりとした足取りで丁度二人の間に座る様な格好になる。そこで、手にしていた茶器一式を広げ、普通より大きく深い器にお抹茶を一掬い茶さじで移し、座した所よりさほど離れていない位置にある

釜より熱い湯を汲み上げ先の器に注ぎ込む。久坂は、その青年の一連の動作の見事さに思わず感嘆する。

そんな彼の視線に気付いているのか居ないのか青年はさっさと手早く茶せんで溶くと、これまた見事な手つきで宮部、久坂兩人にお薄の茶器と茶菓子差し出した。

甘い菓子を頂戴し、点てられた茶をゆっくり喉へ注ぎ心身ともに先程の高揚から解き放たれ落ち着きを取り戻す。

「結構なお手前で・・・」

決まった挨拶を軽く交わし終わると、宮部は早速今度は落ち着いた口調で向き直る。

「久坂君、少し落ち着いたな。」

ふっと笑みを浮かべて言う宮部は一瞬父の様な優しく強い印象を得られる。

「ええ、本当に見事な・・・。宮部先生、あの方は茶の湯でも教え

ておられるのですか？」

先程からの青年の慣れた技に感心しつつも、久坂は青年の腕の逞しい事に少し疑問を持っていた。だから、冗談半分宮部に茶の師かと問うたのである。

「ははは、いやいやあれは違う。のお河上君や。まあ折角じゃし紹介でもしておこうかな？」

宮部は親しげに片付けを終え控えている青年、河上に話しかける。

「はい。私は先も先生がおっしゃったが、河上彦斎と申します。城内で茶坊主として努めております。」

「成る程、貴方は剣術でもして居られるのですか？随分お強そうな・・・」

河上は久坂の言いたい所が解ったので苦笑いしながら返答する。

「ははは、これは目ざといことで・・・。少しばかり剣に感心ありましたので、仕事の合間に裏庭で修業しております。」

青年二人の会話を楽しそうに聞いていた宮部は河上に一つののみ事をする。

「河上君。すまないが、書斎の棚にある地図を持ってきてくれませんか。」

「はい。宮部先生、その・・・私も後からお話に加わっても宜しいですか？」

此処へ来る途中の廊下で先程の久坂との対話が聞こえたのだろう。国情に感心高くなっていた河上は是非にと宮部にそう願ひ出た。宮部は河上の師でもある。

弟子の様な彼の学や時勢への関心は歓迎すべき事であり申し出を断る理由もなかったので直ぐ良しと答えてやった。

「有難う御座います、では直ぐ持ってまいります。」

嬉しげに廊下へ消えていく河上を見送ると、宮部は再び久坂の方を向いた。

「どうかな、久坂君。長州へ帰ったら一度でもいい、吉田寅次郎松陰・・・彼に会ってはくれんか？」

「・・・・・・そうですね。私も戻って機を見計らって松本村を訪ねてみようかと思っております。」

久坂がやや俯きながらそう答える様に宮部は満足して大きく笑顔で頷いた。

それからまた数時間、久坂と宮部、河上は今の幕府の政治外交に対する討論を繰り返し、今後どうするべきか・・・自分達は一体どの様に動いていくのか、夜が更ける頃までしっかりと話し合った。

その晩は遅いと言う事もあり、宮部邸で一夜を明かす事になり彼の人生の上で山県（後の大楽）に次いで、宮部・河上との今回の交流は久坂が描く大きな思想の原点となるのである。

幕末期到来（4）

肥後の夜が明け、久坂は何時も通りに目覚める。

何時もと少し違うのは、自身に新たな同志と呼べる存在が出来た事。久坂はふっと笑み横を見る。

そういえば昨晩は宮部と廊下で別れてから、河上の部屋で寝る寸前まで彼と論に興じたな、と隣の寝具でまだ静かに寝ている河上を見る。

歳は久坂より上だが、その容姿は彼より遥かに小さく色白くどちらかというと女性的で、言ってしまうと優男である。

茶を嗜む一方、密かに鍛え上げた剣術も相当なモノになってきているらしく、これはかなり大きな人物になるだろうと久坂は若いながら隣に寝る同志をそう評した。

やがて河上も起き上がり、宮部や久坂と共に朝餉の席を囲む。

久しぶりに一人ではない朝の時間を過ごした久坂は、沢山の論と得た知識を土産に肥後藩から長州へ帰藩するのであった。

長州へと長旅から帰った久坂に一通の手紙が届いた。

差出人には”吉田寅次郎松陰”と書かれている。相当力が籠っているのだろう・・・書は随分くしゃくしゃになっていた。

「吉田寅次郎松陰・・・・・・・・宮部先生のおっしゃっていたあの吉田殿か？」

久坂は早速封を解くと、奥の間・・・書斎に入り机に向かって座る

と手紙を広げ始める。

（あの捕吏に捕らえられている男が一体私に何のようだろう？）

逸る気持ちを抑えつつ、じつくりと文面に書かれた字を追う。内容の理解をしていくにつれ久坂の表情は次第に険しくなっていく。

内容はごくごく当たり前の挨拶に始まり、文頭はまずまず一般的な内容が記されている。

問題は、中程からの文章が明らかに九州への旅やこれまでの秀才と歌われた自身を否定する様などころである。

その上、自身が作り書き送った詩歌に対して、軽鋭だの時勢を知らぬだの厳しい言葉ばかりが並べてありこれには流石の久坂も絶句した。

実はこれは松陰が久坂を試す為に書き送ったもので、本気で罵倒するものではない。

しかし、若い久坂にはそんな隠れた松陰の意図など読む余裕は無かった。だからこそ兎に角苛立ち彼にこの後に続く様な返信を綴ったのである。

「ふ……ふっふふ、吉田殿は全く何を考えておいでなのか。宮部先生も何故こんな浅い男を紹介など……」

不気味な位どんよりした空気の中、久坂は苛立ちのままに返書を書き始めた。

……米使を寸断にして諸外国に日ノ本の武威を見せるべきではないでしょうか。

貴方の仰るとおり、私は一医生であり国家の大計を論じる事は分相応な事では

無い。しかし、私は終生医生として過ごすのではないかと怏々悩む事あっても他

者に語ることは出来ませんでした。此度は貴方が豪傑の士と聞いたからこそ書

を示したのだ。

・・・先日、宮部先生が貴方を称賛し豪傑なりと評したのもいざこうして見ると、みな誤りだったのかと思われて仕様が無い。

・・・以上憤激の余り、可の様な撃案致しました。

怒りのままに書き殴る半面、久坂はこれの人づてではなく直接叩きつけてきたいと思うようになっていた。あれ程自尊心を痛めつけた吉田松陰なる人物がいかなる男か・・・どうしても知る必要があった。

久坂は書き終えた手紙を荒々しく封して握り締めると身支度整えて松陰の手紙にある”松本村”という場所へ大またで歩いていった。細い路地を歩いていくと、以前語り合った山県と通路の角で出くわ

した。

「あ！これは山県先生、こんにちは。」

先程の苛立つ気持ちを押さえ込んで、久坂は打って変わっての丁寧な声でそう言った。

「ああ、久坂君か。随分慌ててどうかしたのかな？」

対する山県は、流石にその態度が何時もと若干違っている事に気が付きあえてこう返すのであった。

「え？あ、そうですか？実は小用で松本まで行く事になりました・・・」

「ふふふ、そうか。まあ何事も慌てず冷静にな・・・」

意味ありげな笑みを返し目の前から少しずつ、自分の来た道へと歩き去っていく山県の姿が小さくなるのを見ていたが、当初の目的を思い出しましたせと歩き

始めるのであった。

一旦は立ち去った山県もつと歩みを止め、久坂の後姿を振り返るとやや哀れむ様な目でその消えゆく様を見届ける。

（全く、松陰殿も人の悪い。さっさと認めてやればよいものを・・・もつとも久坂君がこれしきの事で萎えるとは思わぬが・・・）

ふっと苦笑しながら山県は帰途についた。

一方の久坂、あぜ道を足早に歩いていくとだんだんと民家が多くなり、景色は明るくなってくる。

やがて、緑の大木に覆われた静かな屋敷が姿を現すと一度そこから少しばかり離れた松ノ木の下で少し乱れた呼吸を整え、今度はゆっくりと歩いて門戸へと近づいていった。

久坂はここで運命とも言える人々との新たな出会いを迎えるのである。

幕末期到来(5)

門戸に立つと、久坂は大きな声で家人を訪ねた。

「御免ください。どなたかいらっしゃいませぬか！」

久坂の声は通りが良く、尚且つ美声であるから聞こえぬ筈がない。しかし、その声を発してから暫くしても家人と思しき人影は見当たらずぬしその存在の気配そのものが全くと言っていいほどないのである。

これには流石の久坂も首を傾げた。・・・それもその筈。人が居る事を証明する要素がいくらかこの家にはあるからだ。

玄関の戸は開きっぱなしになっており、庭の草木に先程撒いたと思われる水がまだ乾く事無くに葉の先から滴っている。

居留守か。それとも家人が居眠りでもして居るのか・・・折角松陰に対しての返書を自ら運んできたというのに・・・何れにせよ気分の良いものではない。

久坂が落胆してそこから立ち去ろうとした時、背後からサクサクつと砂地を蹴る音がした。

（・・・！？なんだ・・・・・・やっぱり人が居るんじゃないか・・・）

少しムツとしたが、それを表情に出さぬよう努めて冷静な顔を作り後ろを振り返った。振り返った久坂が目にしたのは、一人の娘の姿であった。

彼女は久坂の姿を認めるや、

「申し訳ありません。すっかりお待たせしてしまいました。宜しければご用件お聞かせ願いますか？」

娘は丁重に待たせたことを詫びると、久坂に遠慮がちに訪ねる。

「いえ・・・とんでもない。私は久坂玄瑞と申します。実は吉田松陰殿より一通封書を頂きましたので、本日は返信を届けに伺った次第です。」

久坂は内心松陰の書簡の事もあってか、口調に少なからず苛立ちを滲ませていたが娘は氣にして居ないのか、氣付いて居ないのかただ頷いて彼の言葉を聞いていた。

「・・・そうでしたか。」

娘はそう呟いて、改めて突然の訪問者の姿を上目遣いに（久坂との背丈の差が有る為）眺めた。

「ああ、刀を佩いた坊主頭じゃ変に思われても致し方ないですな。これでも藩医の卵でして、決して怪しいものでは・・・」

自身の容姿を危ぶまれているのかと思ひ慌てる彼を見て思わず娘はふふと笑った。

「まあ、御免なさい。そんな怪しいだなんて・・・ふふ、余り珍しいお客様でしたからつい・・・。」

久坂は、ふと娘を見やる。

美人とは言えぬが、言葉を聞けば聡明さが伺えあどけない清らかな少女と見て取れる。娘の応対から見ても、ちゃんと躰と学を覚えた武家の娘に相応するものが伺える。

「あの、失礼ですが・・・杉家（松陰の実家の姓）の方でしょうか？」

「あら、私とした事が。失礼致しました。如何にも私、松陰の末妹で文と申します。」

娘は文と言った。後に久坂の妻となる人である。

勿論この時彼等は共に夫婦になるなど想像もしなかった。しかし、久坂にとつて文だけが運命の出会いではない。これからこの今は少なからず憎しと思っている、吉田松陰が終生の師となろうと言う事すら予想だにしないのである。

「兄は今幽閉の身。本来ならば会えぬのでしょうが・・・久坂様ならば。兄も会うかと思えます。今伺って・・・」

文が言い終えるより先に久坂がその言葉を遮り、彼女の手を持参した封書を預ける。

「いえ、突然の訪問ですので。それは失礼になりました、此度はこれだけお渡し願いますか？」

「しかし・・・」

「また少し落ち着いた頃を見計らってお伺いいたします。申し訳ないがこれにて失礼致します」

そういつて久坂は一礼するとその場を足早に立ち去った。
残された文はそれを暫く見送ると、思いたった様に松陰のいる幽閉
室へ消えていった。

幕末期到来（6）

やった。言いたい事は全て書き込んできた。あとは松陰自身がこれにどう答えてくるか……。それを待つばかりだ。

久坂は、松陰が手紙を読んで感嘆するであろう様を想像し、意気揚々と帰宅の途についた。

一方、手紙を預かった文はいそいそと兄の居る一室へ足を運んでいた。

「寅兄様、文に御座います。兄様へ手紙を言付っておりますが。如何致しますか？」

小さな声でそっと中の人へ問いかける。

暫くすると内側からカタカタと音がし、やがてスーッと襖が開かれた。

「僕に手紙？はて、誰からだろう。」

何も知らぬと言いた気なその口調とは裏腹にその表情は実に嬉しうである。松陰自身、本気で問うているのではない。

その手紙を誰が置いて行ったものかよく承知しての言葉だった。

「まあ、寅兄様ったら……。ふふ、先程久坂玄瑞様とおっしゃるお方がいらしたのですよ。」

「ほう。久坂君か……。お文、お前から見て彼はどんな男じゃった？」

機嫌の良い表情を崩さぬまま、松陰は妹に訊ねた。そう聞かれて文は暫し目を天井へ向け考える様な顔をしていたが、直ぐまた松陰の方へ視線を下ろすところ述べた。

「そうねえ、最初は可笑しな人だと思いましたよ。だってお坊様が刀を佩いてるようにしか見えなくて。」

「ほう……………」

「何も言って無いのに”怪しいものではありません”だなんて……ふふふ、本当に可笑しな方だったわ。でも、凄く真面目な方だとも思いましたよ。」

「ははは、成る程、確かに頭を丸めた武士姿は見たことも無いだろうからなあ。」

「でも、兄様。折角ここまでいらっしゃったのに、お会い成らなくて残念ですわね。」

文はそう付け加えて静かに席を立った。

松陰は彼女が去ってから、ゆっくりと封書を解き始めた。

台所へ戻り、片付けの作業を再開しようとしていた文はまたもや、一人の客らしい人物の来訪を迎える事になっていた。

自宅へと帰った久坂は、羽織袴を脱ぎ楽な着物姿に戻ると、書斎へ入り再び机に向かい筆を取る。今度は松陰ではなく、自身に律する詩を書く為である。

刻一刻時間は経っていく。書きながらもやはり松陰の返書が来るかどうか・・・気になって仕様が無い。久坂は詩を書き上げると、ふと外の景色に目を移した。

今日は本当に忙しく、そして慌しく過ごしたものだなど、落ちる木の葉を眺めつつと溜息吐いた。

（宮部先生・・・吉田松陰とは先生達が称賛するに値する人物なのでしょうか。私には未だ解りかねます）

久坂にとっての最初の松陰像は師ではなく、論に限っては敵対する一勢力に他ならなかった。まさか後の自身の生涯に深く影響する事になるとは全く予見できぬ事であった・・・・・・。

翌朝、久坂は山県の屋敷を訪れる事にした。

（この頃、山県源太郎は大楽家の養子として入る為、姓を以後「大^{だい}楽^{らく}」と改める）

「先生はご在宅でしょうか？」

家人に尋ねたが、どうやら彼は何処かへ明け方から出ていて居ないらしい。久坂は非常に残念だったが諦めて自分も同じ様に散歩にでも出かけようと小高い山道をゆっくり登っていった。

暫く登って行くと、向こう側から小さな人影が見える。久坂は眇め（軽斜視）の目を細くして人物を見ようとした。先程不在と聞いた大楽源太郎その人である。

久坂は彼の姿を認め、嬉しそうに近づいていった。大楽も久坂の姿に気付くと少し微笑んで彼の方へ歩を早めた。

「大楽先生！こちらに居られるとは。実は先程そちらへ伺った所でして……。」

「それは悪かったな。天気がいいし、何か良い詩作が浮かばんものかと思い、散策をしていた所だ。」

「先生もですか？実は私もこんな天候の良い日に室内では勿体無いと思い、お誘いしよう思うて居たんですよ。」

「はは、考える事は皆同じだな。それより、この山の中腹に小さな庭が造られていて眺めは絶景だぞ？行って見るかい？」

「是非に。大楽先生の詩作もご披露願いたいものですな。」

「ああ、もう”先生”はお止めなさい。堅苦しくて如何。」

「……それでは、先生……と、大楽さんの仰る通りにしましょう。」

苦笑い交じりに言う大楽に、久坂は嬉しそうに頷いた。この兩人は共にこの後も親友として交流を持っていくのである。

久坂、大楽の二人は小高い山を再び、今度は連れ立って話を弾ませながらゆっくり登って行くのであった。

幕末期到来（7）

二人は話を進めながら、先程大楽が言った絶景の地へと到達する。ここは萩城下まで見渡せる正に展望の庭。久坂は初めて自分の住まう大地を見下ろし感慨深くその場に立ち尽くしていた。

「久坂君はそういえば初めてここへ来るのだったな。どうかな？」

「はい。本当にこれ程の景色を一望出切る所があるなんて感激しております。」

「萩城下も下を歩いている時は大きく偉大にさえ思えるものだ。しかし、こうして広い視野で見据えた時の頼りなさは堪らぬだろう。」

久坂は大楽の言わんとしている所がおよそ検討ついた。

彼は既に宮部鼎蔵と対談している。その前には大楽自身とも……だからこそ、この絶景から伺える

小さな故郷を何に例えているのかも理解できるのだ。

「今我々に足りぬのはこの絶景そのものだろう。幕府だの藩だの……そんなものに固執している時ではないというのに。」

「大楽さん……。それは私も感じます。幕府も藩も結局は保身しか考えては居ない。」

「久坂君はそういえば松本村へ行くと行っていたな。どうであった

「？」

大楽はそれを憂い考えているもう一人の人物を思い出しつと久坂に尋ねた。

「え？ ああ、吉田松陰殿ですか。私はまだあの人物に正直理解ができません。宮部先生が何故あれ程薦めるのか・・・」

半ば愚痴とも言える久坂の苦言を黙って大楽は聞いていたが、徐に口を開いた。

「彼は口先だけの論者ではないからな。なんというか、見かけによらず派手な御仁だ。およそ常人では理解できんだろう。」

大楽は一度だけ松陰なる人物と対座した事がある。その時の彼の論から察した松陰像である。

「空念仏の攘夷を嫌い、自身が常に先駆けになろうというところがある。君ならば多少なり話に合う所が在るとは思ったが。」

「私はあのように人の志を否定する人物を好くは思いません。ただ、もう少し彼とは論じようと思っておりますが。」

松陰を認める様な話し方の大楽に、何処か子供が親を取られて嫉妬するかの如く反撥をする。久坂は、益々松陰との論戦に熱意を向けるようになる。

「さあ、論は一時休戦にしよう。ふふふ、実は少々酒なぞ用意して

きたんだが、一献どうかね？」

涼しく心地よい風が吹く中二人は絶景の中、フサフサした芝に腰下ろし、酒を嗜む。

「大楽さん、酒の肴に詩歌など如何です？」

「よし、では互いに幾つか出し合おうじゃないか。」

両人共、この幕末期に多くの詩を詠んでいる。何れも美しく世情を憂い志に燃える志士の詩が殆どである。

彼等の残した数々の詩は今も良く賞賛を受ける傑出したものである。久坂・大楽はそれぞれの詩に酒に酔いつつもこの絶景を時間をしかと心に焼き付け自身の志の一部へ据えようとしていた。

詩歌の宴は日が暮れる頃まで続き、二人は詩を歌ったり時には時勢を論じたり談笑に興じたり・・・・・・

動乱の時代の一時の安らぎを共に味わった。絶景を見下ろしながら、いよいよお開きにしようという時、久坂は酔って赤らんだ顔のまま大楽に向き直り、

「大楽さん、またこの様に今後も語って行きたいものですね。」

と、真摯に彼に告げた。互いに世を憂い変革願うものとして親友として真実認識した時であった。

「それは私とて願っても無いこと。・・・・・・しかし、今宵はよく飲んだな。久坂君がよければ何時なりとも。」

大樂は天狗の様に赤くなっている若い久坂の顔をみて笑いながらもすっかり約した。

彼もまた久坂を無二の親友であると思ったのだろう。何時もより明るい口調で話をしながら連れ立って山を下っていくのだった。

久坂の方が大樂より8つか歳が下である。兄分の気持ちで大樂は酔った久坂を家へ、肩を支えながら運んでから彼は屋敷を出て行った。家へ帰り、その酔いのまま着物を面倒そうに脱ぎ捨てて久坂はごろんと敷いておいた布団に横たわる。

今日のことか未だ夢の様にぼんやりと浮かんでは実に満足そうに、彼はそのまま眠りについた・・・・・・

幕末期到来（8）

久々に酔いが回り、起き出したのは何時もより随分遅く既に陽は正午近くに昇ってきていた。

「ううん。昨日はちと飲みすぎたかな。こんなに遅くまで眠りこけるとは・・・いかな・・・。」

大きく伸びをして、井戸の冷水で顔を洗いふと門の前に立てかけている木箱を見ると、一通の封書らしきものが見える。

（さては松陰から何か言って来たか？）

久坂は井戸から急ぎ足で木箱へ近づき、内に引つかかっている封書を手に取るとまた今度は室内へ大股で入っていった。

封の裏を見ると、間違いない。吉田寅次郎松陰の見慣れた字で銘打っている。

（今度こそ認める様な内容が書かれているだろう・・・）

久坂は机に向かい封を急いで解くと、書かれている文字を食い入るように見た。

そこに書かれていたのは彼の思いを見事に裏切る様な文章であった。手紙は以前来た返書より一層厳しいものであり、彼の信念そのものを全く否定するようなものであった。そして、若い久坂にとって一番堪えたのは英米人を寸断して・・・

この言葉に対して松陰は、

「貴殿の志の程は良く解った。ならば、その旨直ちに実行にうつして御覧なさい。」

というものであった。こればかりは実際そう簡単にできる物ではない。松陰は論だけでは何も成せぬ事を良く知ってこう言って来ているのだ。

流石の久坂もこれには狼狽した。これをどう切り返したものか。命が惜しいのではないが、実行するだけの同志も情報も今の自分はその持ち合わせていない。

どうしたらいいのか……。そう思い悩む彼の元に誰か、人物が訪ねてきた。

「玄瑞はおるか？俺じゃ、中谷じゃが開けてくれぬか。」

ドンドンと戸を叩くその声の主は確かに久坂のよく知る人物のものである。

久坂は急いで玄関へ歩いていくと、玄関の戸に大きな影が見え扉を開けると嬉しそうな顔が覗いていた。

「おお、玄瑞久しぶりじゃ。変わりないか？」

親しみを込めて近寄る知人にふっと笑みを漏らしながら久坂は室内へ彼を通すと、これまでにあった人々の対話と松陰からの封書の事を一通り話した。中谷は頷きながら聞いていたが、徐に口を開いて、

「玄瑞はそれで？吉田松陰にそう言われて、これからどうしようと思ふとるのだ？」

「それは・・・私にはどうしていいのか解りません。けれど、今でなくとも必ず彼に送った志は果たして見せます。」

俯きそう述べる年下のこの男に、中谷はふむと一言だけ発しそれからは黙してしまった。

どれだけそうしていたろうか・・・新たな訪問者が彼の家を訪れる音が玄関の戸を叩く音によって知らされる事になる。久坂は中谷を客間に待たせたまま、思い足取りで玄関へ向かった。戸を開けると兄・玄機の知人土屋師が立っていた。

「土屋先生、ようお越しくできました。して、今日は如何なる事で？」

久坂は二人目の突然の訪問に驚きながらも大事な客人を奥へと通す事にした。

「おお、中谷君も来ていたのか。」

「ありゃ、これは土屋先生。お久しぶりです。いや、私はコレが参っている頃だなと思い・・・」

「そりゃあ奇遇だ。私も同じ理由だよ。」

はははと笑いながら話す二人の前に久坂は訳解らぬまま座る事にする。

「あの、それで今日は・・・」

「おお、そうじゃった。玄瑞、松陰との論争如何に進みよるか？」

中谷が面白そうに訊ねてくる。

「こりゃ正亮、全て私が話すから控えておりなさい。」

土屋師から少し叱るように言われ中谷ははいはいという具合に黙り込んでしまった。

「さて、久坂君。最近寅次郎殿と随分やっておるようだな？その様子からすると返答に詰まったか？」

土屋は全てを察しているかのような口調で久坂をつついてくる。

「土屋先生。仰るとおり、実は何度か吉田殿とは書を交換しておるのですが。全く今回ばかりは返答がうまく見つからず・・・」

「夷荻を寸断してみせるという高言・・・実行してみせよ・・・かね？ははは、そりゃ確かに困ったのお。」

「先生、どうすればよいでしょうか。もはや私には成す術もありません。可と言って今更・・・」

久坂はすっかりしよ氣込んで先程から俯いて上目遣いにこちらを伺っているばかりである。

「ふうむ。久坂君は論で負けを認めたのかね？」

「負けたとは思いたくありません、しかし私自身が未熟であった事は隠しようの無い事実であります。」

「ふふふ、それだけ解っているなら十分。さて、そろそろ種明かし

をしようか？」

土屋師は中谷の方へ振り向くと互いに頷きあって訝しがる久坂の目の前に、松陰の書を差し出した。

「これを良く読んでみなさい。吉田君が私に送ってきた封書だ。」

久坂はその中身を一読すると驚きの余り目を瞠った。

今までの松陰とのやりとりについての全ての理由が見事に書き記され、自身に対する評価も今まで送られてきたものとはかなりの違いがあった。

松陰は久坂に非凡なりとの評を既に持っており、この才を更に開花させる為には煽て称賛するよりも、寧ろ厳しい態度で臨み彼の怒りを文に論に戦わせるほうが良いであろうから、

これからのやりとりをただ両氏には見守っていて欲しい一との事であった。久坂はこの時程、自分が惨めと思ったことはなかった。

松陰を敵とみなし、ものの見事に彼の思惑通りに論じてきたのかと思うと顔から火が出るほど恥ずかしく、自身の浅見さをひたに恥じた。

（こんな自分では何時までたっても攘夷も志も遠のく一方、夢のまた夢となる所であった・・・）

書簡を食い入るように見ている久坂に、土屋・中谷の二人はふふと笑い合いかけていた。

「玄瑞、意地を張るのももう終わりにして気の向いた時にでも彼を訪ねては見んか？」

「松陰はお前の来るのを今か今かと待って居るぞ。」

こうして、久坂の思想にとって一つの転換期が訪れるのであった。

松下村塾（1）

「松下村塾」

あの時依頼、松陰とのやりとりで完全に敗れた久坂は、暫くそのことを恥じ自室に籠ってただ悪戯に日々過ごしていた。
そんな彼の元へ、ある日中谷が再度来た。

「なんだ、玄瑞は。まだ沈んでいるのか？」

「沈んでは居りません。ただ、吉田殿と会うだけの資格が僕にあるのかどうか」

久坂は会ってもっと語りたいと思う反面、今までの書の事で少しでも松陰が不快に思っていないか、兎に角対面する事が不安で仕様が無いのだ。

「なんだ？もしかして怒っているとも思ってるのか？先生はあんな事位じゃ怒りやせん。」

中谷はなんとか彼を立てようと、必死になる。

そんなやりとりが続いていて早くも一時（二時間）が経過した頃、玄関の方へ新たな訪問者が訪れた。

「久坂君はいるかね。」

低いが淡々とした声の主は一昨日に会って対談した大楽のものであった。久坂が一向に部屋から出ない為、代わりに中谷が玄関先へ客人を出迎える事になった。

「おお、確か貴方は久坂の近所の、大楽殿でしたな。」

「如何にも、久坂君は病に召されたのかな？」

「いや、病ではないが……。ま、立ち話もアレだ……。上がってください。」

中谷は大楽を伴って久坂の自室にと足を踏み入れる。そこにはいつもと違って小さくなっている彼が居た。

「久坂君、今日は随分元気が無いじゃないか？」

少し笑いながら大楽が言う。

「……源……大楽さん、吉田殿に対してアレだけの論議をした僕が、今更親しく向き合う事ができましようか？」

久坂は俯いたままそう呟いた。

この言葉に少し溜息吐きながら、大楽と中谷は互いに困った様に顔を合わせた。

暫くどうしたものかと沈黙し、考え込んでいた大楽は徐に立ち上がり、襖を開け外を眺めながら、

「その程度の事で吉田殿が激昂する訳が無い。それよりも早く彼と対面し、君もはやく立ち直ってくれねば成らぬ。攘夷を唱えるにも覇気の無い今の君では誰も付いては来ぬし、今は僅かな時間も無駄には出来ぬご時世。」

「大楽先生。やはり中谷さんと同じ様に言われますか。」

「不満かな？」

大楽がおどけて言う、久坂は顔を上げて今度は手を平つかせながら笑んだ。

「ふふふ、とんでもない。有難う御座います。のんびり悩む様な時間的余裕はもはや無しとせねば成りませぬな。正午過ぎから松本へ伺う決心がやっとなつきましたよ。」

久坂が今まで思っていた悩みをすっかり吹っ切った事を確認すると、大楽はならば結構と満足気にそのまま玄関口から帰っていった。二人で彼を見送った後、中谷も小用があるという事でさっさと外へ出て行ってしまった。久坂は、また一人部屋の中

へ戻ると、先程までとは打って変わって元氣を取り戻し、机に向かい筆を取ると何時もの如く詩作に耽るのであった。

松下村塾（1）（後書き）

久坂玄瑞にとって生涯の師である吉田松陰。

彼との出会いを中心として、様々な盟友を得、成長していく、志士・久坂玄瑞の始まりとも言える節です。

ここからが、本スタートといっても過言ではないかなと思っています。

松下村塾（2）

明くる日、久坂は意を決して松陰の居る松本村へと向かった。

大抵こういう時には、誰か見知ったものと出くわす所であるが、どういふ訳か今日は誰一人として姿を見ることは無かった。田畑あぜ道を抜け、前にも見た風景が眼前に広がる。

やがて、その視界の中に木々に囲まれた広い家屋がうつると、久坂は立ち止まって呼吸の乱れを整えると門戸の前まで急いだ。相変わらず静かな場所である。

玄関はきっちり閉められていたがその扉より少し奥へある、庭の方で以前会ったお文が竹箒を持って庭掃除をする姿が見られた。

久坂は文の姿を確認すると、庭へ近づき、庭手入れに没頭している娘に声をかけた。

「御免ください。久坂ですが。」

よく通る彼の声に、はっと手を止め文は後ろを振り返った。

印象に残っている坊主頭の侍姿を記憶していた文は、ふふと何か思い出したように笑んで、彼の所へ駆け寄った。

「まあ、久坂さん。お久しぶりです、私ったら気付かずに……
・失礼致しました。」

「いや、また突然お邪魔して僕の方こそ申し訳ない。吉田松陰……
兄上殿には会われますか？」

久坂が親しげな口調で文に訊ねると、娘は嬉しそうな顔をした。

「兄はまだ幽閉の身に御座いますが、久坂さんならばお会い致すかと。私、兄に伝えてまいりますわ。さあ、それではどうぞ中へお入りになって待っててくださいな。」

「それは有難い。是非にお伝え願います。」

久坂は文に促されるがままに室内の客間へと足を運ぶ。文は彼を通し、そのまま足早に廊下を渡り兄・松陰の幽閉室へと歩き去った。

松陰の室の前に来ると、文は中の兄に向かい声をかける。

「寅兄様、久坂玄瑞様がお見えます。」

暫く中からの返事は返ってこなかった。文が兄の返事をそのままの座した姿勢で待っていると、返事の変わりに室の襖がそっと開かれた。

そこには目に見えて嬉しそうな表情を浮かべた松陰の姿があった。

「お文や、私も客間に行くから後から茶を運んではくれまいか。」

「はい、兄様。直ぐにお持ちしますわ。」

お文も兄の念願叶って、心底嬉しくまた、安心した様な表情をし、いそいそ台番所へと向かうのであった。

久坂は、松陰を待つ間妙にそわそわして心落ち着かず、始終部屋中に目を泳がせていた。
やがて、静かな足音と共に襖が開かれ中に入ってきた人物を見ると彼の緊張の動悸は極度に高まるのであった。

「久坂君、ようやくお目見えできましたね。」

にこと笑って静かに松陰は話しかける。

「随分長い間、お手間を取らせて申し訳御座いません。僕は自分がどれだけ未熟であるか此度の事で痛感致しました。」

久坂は心底松陰に感服し、自身の未熟さ所の所業をひたに詫びた。
この言葉を聞き、松陰は無言で首を振ると、目の前の若者にこう訊ねた。

「あの書簡の件に、君の非はない。全て承知の上でやり取りを続けた私の方こそ丁重に詫びねば成らない所だ。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

「しかしながら、君の見解・志共に見上げたものだ。これから更に学を深め多くの人材と接していく事で君はもっと大きくなっていくだろう。」

「・・・・・・・・・・松陰先生。僕は日ノ本を狙う輩を掃い戦う・
・攘夷の志は終生変えじと思うております。」

「では、手紙にあった英米人を寸断して・・・というのは本気かね？」

「然り。僕は口先だけの論者にはなりとう御座いませぬ。」

きっぱり述べる久坂に、松陰は満足気に頷く。

暫く対談していると、廊下からパタパタ足音が聞こえてきた。

「失礼します。お茶をお持ちしました。」

「有難う。お入りなさい。」

松陰がそう言った後、部屋の襖が静かに開けられて、先程玄関で会った

お文がお盆を手に現われた。

お文が茶を配り終え、退出するのを確認して久坂は再び松陰との対話に入った。

松下村塾（3）

松陰との面会をして早くも半日過ぎようとしていた。

「ところで久坂君、君は私のことをどの様に見て居ったのかね？」

「はい、僕は実は宮部先生にお会いするまでは失礼ながら先生の事を、ただの狂人であると見ておりました。」

「ふふふ、そうじゃろう。確かに私は狂人です。いや、この時代という歯車を回転させようとするならば・・・この私一人の犠牲で日本を守るのであれば喜んで狂人ともなりましょうぞ。」

久坂は松陰の言葉の中に、志の重さを感じた。

「久坂君は色々な方と面識があるようですね。」

「ええ、兄・玄機の繋がりで・・・数々の著名な方に良くしてもらっております。」

久坂は幼い頃に父母や兄達を失い、天涯孤独の身となっていた。藩医として後を継いだ兄・玄機は、月性らとよく交わり勤皇の志を強く持ち続け、同志達の間では名を馳せた人材だった。玄機自身も仲間を訪れる際、よく弟・玄瑞を同行させるなどしていたため彼も幼い頃より勤皇思想の士との交流を得、強い影響を受けていたのだ。

「玄機殿は実に優れた才をお持ちの方と聞いたが・・・惜しいかな。是非ともお会いしたかったが。」

「・・・・・・・・・・。」

久坂はしんみり遠くを見つめ呟く松陰の姿をただじっと見守っていた。何より兄を評価してくれる事が嬉しかったのだ。

松陰に対する今までの憤怒や軽視は全てこの日を境に洗い落とされ、久坂は純粹な思想を持ち彼の意思を伝え広めていく一人の志士として戦っていく事になるのである。

「先生、僕達はこれからどうすれば宜しいのでしょうか。夷荻は日々国土を侵そうと幕府に理不尽な要求を突きつけています。この大きな時代の流れの中、一体何が出来るのか・・・・・・・・。」

こうしたい、ああしたいという理想は次々と頭に浮かぶのだが、いざ始め何をしようという段になると人間なかなか思うように体も頭も働かぬものである。久坂も例外ではなく、理想と現実の狭間でただ揺れ動いていた。

「久坂君、先程にも言ったが。狂人ともなる他ないだろうね。これから戦うべきは武士ではない、草莽あるのみだ。」

「草莽・・・武士身分で無い民百姓、町人に至るまで全て・・・・・・・・ですか？」

松陰の”草莽”^{そうもう}という言葉に久坂は思わず首傾げた。

この時代の身分階級は士農工商と4段階に分けられていた。武器を取る事を許されたのは士、すなわち武家だけであり農民（百姓）や

町人がそれをする事は原則禁じられていたのである。だから、久坂が首傾げるのも無理は無い。そういう理念を植えつけられていたのだから……。

「そう、この激動の時代を乗り切るには日ノ本の民が丸となり国を建て直し、正しい眼で見通せる政府の樹立が必要なのです。」

「…………幕府に代わるものでありますか……。では長たる方は天上の方で？」

久坂は松陰の台詞を聞いて初めて、”日本の民” ”政府の樹立” という真新しい言葉を覚えた。

「幕府の古く脆い統治下では優れた人材は生み出せぬ。優れた政府の樹立には先程の身分の枠を超えた人材が志をもって望まねばならない。」

その為には全ての権力は無用と考えねばならない。」

「幕府体勢がいかんのであれば……当藩も……でありますか？」

「…………長藩も然り。全ての現状ある権力ではいかんのだ。」

松陰は今まで築き上げてきた武家独特の封建制を完全に否定している。久坂は全ての権力というところにふと疑問を抱いた。

「全てというと……朝廷もですか？」

ゴクリと唾を飲み込んで、質問したことへの回答を待つ。
暫しの静寂の後、松陰はふうと溜息漏らし淡々とした口調で述べる

のである。

「……草莽が屈起するにおいて、恐れながら天子様も求める為政者ではありえぬ。」

久坂はこの言葉を聞いて雷に打たれたかのように体が硬直し、顔もやや青ざめて黙ってしまった。日ノ本のすべての民が神ぞと崇拜する天朝様を全く為政者としてありえぬと断言する松陰にどう言葉を返してよいのか定まらず、目を見開きただ彼を見守る他無かったのである。

「ただ、残念ながら今直ぐに幕藩体制を変革する事は難しい。私は必要とあればいつでも脱藩する覚悟がある。」

「……そんな！先生、脱藩は重大なる罪ですよ。そこまでの御覚悟を……」

脱藩……国抜けともいう。江戸時代これは藩を脱したものの、武家社会においては主君を裏切る恥じるべき行為として重罪として扱われ、脱藩した本人だけではなくその親族知人に至るまで罪を着せられるというものである。

当時の社会は、現代の様に他の都市へ出かける事は簡単ではなく、国暇の許可（藩を一定期間離れる為の許可）を取らねば成らなかった。

例えば長州藩から出て、他藩へ旅をするのにも逐一藩庁の許可承諾

が無ければ捕縛されてしまう。

この時代、藩同士はあくまで隣接する他国という意識のもとにあり、現代の県や町のような感覚とは一切が違っているのである。

そういう理由から松陰の言葉に久坂がうろたえるのも当然といえる。藩を出、危険に身を晒してまで志に徹しようとする松陰の姿勢は終生久坂の脳裏に焼きつき、彼自身の志とこれからの活動に大きな影響を与えるのであった。

松下村塾（4）

久坂が松陰宅を訪れて、変える頃には既に日は落ちていた。

この一日は若い久坂にとって実に刺激的な日であり、自身の志を改めて見つめ直すものであった。

吉田松陰の”草莽屈起論”が何より彼にとって大きな、衝撃的な論であったのは言うまでも無い。

松陰は現状の幕藩政治に従うのでは駄目だ、日ノ本の若者が結束し新たな政府の樹立と故国防衛の為に今決起せねばならぬその為には、わが長州だけでなく、

日ノ本におわす天朝さまですら必要ではないというのだ。

この時代に限らず、戦前までの日本では天子は神であり、松陰のような「新体制に必ずしも王は必要でありえない」考え方は珍しいことである。

現に久坂等志士も幕府に代わる体制として、攘夷の条件として勤皇政治を掲げている。

幕府は日ノ本の土台という意識があったようだが、朝廷はそれともまた違い天上人の様な、特殊な存在崇めるべき貴人という一種の信仰的なものであった。

だから、久坂が酷く衝撃を受けるのも無理からん事なのである。

（確かに、松陰先生の言にも一理ある。決して不可能な選択ではない・・・、しかしこの国を大きく動かす為の力として幕府に成り代わるのはやはり京におわす天子

様以外には考えられん。僕等が志を唱え広めていく為に、大きな信

仰的権力は絶対必要だ………。）

久坂は、家についても何をしていても、松陰の唱えた草莽論について一人自問していた。

”草莽の志士となり日本という一つの国を新たに建立する……”

松陰の言葉……それはやはり彼の人生で大きな変革をむかえるものであり、久坂玄瑞という歴史に残る彼の人物像を形成する一番の要因と云われても可笑しくない事である。

ともかく久坂は今後、草莽という言葉を自己解釈を用いて自身の思想の中枢に据えて行くのだ。何時までも考え耽っていても仕様がなない。この今の状態はまだ机上の

空論に等しく、空念仏の攘夷を唱える者と変わらない。

（まずは動かねば成らぬ……。松陰先生や大楽先生、宮部先生は既に京や江戸へ自ら出向いて行って色々な人物との接触をもっている。僕は彼らほど意思は強くはない、しかしこのまま何もせずに居ていい筈がない。此処

に留まって一時の安寧にまどろんでいては、ただ畳の上で死ぬまで待つだけだ。）

机上で一つ心境を歌った詩を練ろうと思ったが、良い言葉が出てこない。

久坂は暫く考えてから、何か悟った様な面持ちになり、ふっと笑うと徐に筆を動かした。

「今の心境すなわち志の一片を記すのに良い言葉なぞ当て嵌める必要は無いよな。はは、ただ素直に書き出せばよいのに・・・」

自嘲気味に笑いながら、自作の詩歌を書き記し彼特有の良く響く美声で出来立ての詩を口ずさむ。

軽やかな空気の流れに乗せて歌う詩歌は、彼の志そのものでもあり世を憂う心情と自身の身のあり方をしっかり世間に示すものであった。

久坂は詩吟を済ませると、句帖に改めごろんと畳の上に寝転がった。天井の木目に視線を這わせながら、また新しい詩作に耽るのであった・・・。

松下村塾（5）

安政4年、夏・・・

梅雨から蒸し暑い夏の季候へと変化する頃、久坂は松本村・松陰の塾に居た。あの和解の日依頼、彼は毎日と言って言い程ここに通っている。

熱い日差しの照りつける中、畦道を足早に歩きながら、久坂は流れる汗もそのままに、ひたすら松陰の待つ塾を目指していた。

やがて、もう見慣れた木々に囲まれた独特の雰囲気を持つ家屋が姿を現す。

久坂は以前の様に立ち止まって気後れする様な仕草は見せず、その足取り崩す事無く玄関へと歩いていった。

「今日はお文さん居ないのかな？」

何時もなら、庭掃除か台番所の片付けなどして、遅れながらもちゃんと出迎えてくれるのだ。

彼女が居ない日は殆ど無く、訪れた時最初に顔合わせるのが全く当たり前の様になっていたので少しもの足りぬ様な気さえする。

そんな事を考えて居ると、噂に上った人物の快活な声が背後から聞こえてきた。

「あ、久坂さん！いらしていたなんて御免なさい。お出迎え出来ずに・・・さ、兎も角お上がりになって。」

声を掛けてきたのはお文だった。

彼女はどうかやら奥の庭で相変わらず掃除に励んでいたらしい。額に僅かばかり汗が滲んでいた。

久坂は、文の勧めるままに家屋へと移動した。土間上がろうとした時、もう一足明らかに客人と思しき草履が目についた。

久坂はお客かな？ と思いつと文に訪ねる。

「お文さん、今日はこちらでお客様がいらっしゃるのですか？ それでしたら僕は特に急ぐものでも無いのでお暇しますけど？」

遠慮がちに言う久坂を見て、文は少し可笑しそうにこう言った。

「いいえ、お客様はいらっしゃいませんよ。ええ、でも大層愉快な方は先刻からお見えですけれど。ふふっ。」

意味ありげに文は口元を手で押さえ、まるで笑いを堪えるかのような話口調で答えた。

文のそんな姿を訝りながらも、客でない訪問者の存在が気になっていた。

（愉快的な方か・・・）

“愉快的”と聞いて、幾人か周辺で該当しそうな人物を頭に思い描いてみるも、なかなか出てはこない。

色々な人物を浮かべてぼんやりしていると、部屋から松陰とその人物と思しき声が聞こえてきた。

その声は、何処かで聞いた事のある声であった。

「・・・見事だが、一度玄瑞の言を叩いてみると良いですね。」

この落ち着いた声は松陰先生だ。

「・・・・・・・・・・“玄瑞の”ですか。」

あからさまな苛立ちを含めた声、この声・・・・どこか幼い頃に聴いた様な。

久坂が再び記憶を巡らせていると、突然部屋の襖が大きく開かれた。そこには、松陰と痩せて面長の男が立ってこちらを見ていた。

「おや、久坂君ではないですか。」

松陰が親しげな眼差しを向けこちらへ歩み寄ってくる。

松陰よりやや後ろに位置する若い男は久坂の名を聞いた瞬間、先程より鋭い目を自分へ向けてきた。

「・・・・・・・・久坂・・・・・・・・玄瑞。」

男の鋭い眼光に一瞬ビクとしたものの、その衝撃は次の松陰の言葉でかき消される。

「ああ、久坂君。紹介しましょう。彼は藩上士・高杉小忠太殿の嫡子で高杉暢夫（晋作）といえます。」

高杉と聞いて、久坂はあっと思った。

（やはり・・・・何処かで聞いた声だと思ったら。吉松先生の私塾で・・・・・・・・）

彼等二人は、共に吉松淳蔵の私塾で机並べて学を学んだ、いわば同

門同士なのである。もつとも兩人親しかった訳でもなく、たまたま一緒の場所にいま

したという程度であつたが……。

少なくとも特徴的な高杉の容貌をかすかながら記憶していた久坂は、一人かすかに頷き納得していた。

一方の高杉も、やっと幼い記憶がジワリジワリ甦って来たのか、

（確か昔に居たな、眇め坊主で学問の虫が……。）

とこちらも納得した様であつた。

やがて、松陰の開く村塾（第二次）の双壁と成る英傑がここで初めて正式に顔合わせする事になるのであつた。

（※松下村塾は、叔父・玉木文之進が創立し、後に松陰が再興した際、かつて使用した「松下村塾」の表札を再利用したものである）

松下村塾（6）

後に松門双壁と並び称される二人もこの時未だ全くの他人であり、何れ双方助け支えあう知友になろうとは、想像もし得ぬ事であった。

「・・・吉田先生。折角の紹介、申し訳ないが所用の為、今日はお暇します。」

高杉は、沈黙を打ち破り、松陰にそう述べると、後は何も言わずさっさと久坂の前から姿を消した。久坂はただ、引き止めるでもなくその場に

立ち尽くし、彼の去るのを、見守るしかなかった。そんな久坂に最初に声を掛けたのは松陰であった。

「久坂君、今の青年がこの間お話した高杉暢夫ですよ。これからここで君と共に論じ学んで頂くから、共に切磋琢磨し学に努めてください。」

松陰は高杉の去った方から視線動かさず、静かに告げた。

「先生、彼の僕を見る目は、どこか殺気を放つ様な所がありました。が、何かあったのでしょうか？」

久坂は先程の高杉の射るような目が気になっていた。自分は彼に恨まれるような事をしただろうか？全く見当つかぬが……。うーんと頭を抱えながら考え込む久坂に、松陰は可笑しそうな表情を作り、

「大丈夫ですよ。高杉君は人を恨んだりする様な事はない。アレは・
・まあ色々ありますね。」

意味ありげな事をサラリと言い放ち、可笑しそうな顔をこちらへ向ける師を訝るも、取り合えず恨み事でないとわかり、彼はホウツと安心の溜息を漏らした。一つ間をおいて、久坂の後ろに控えていたお文が、

「兄上様、廊下で何時までも立っでは何でしょう。お茶をお持ちしますからお部屋で対談なさいませ。」

と、一言か細い声で告げると自分は足早に台番所へ去っていった。

「ああ、そうでした。久坂君、立ち話も何じゃ。あちらでしっかりお話伺いましょう」

と、彼を促し連れ立って客間へと入っていった。

高杉晋作という稀有な存在は、久坂の脳裏にしかと記憶され、以後の塾での活動に大きな好影響を及ぼす者となるのである。

「久坂君、実は先程の高杉君の事なんですがね。」

そう言って、松陰は彼の書いた詩作を出した。

「これは……。」

「彼の作です。本人にとっても自身のある作の様ですよ。」

高杉作という詩稿は七言絶句「立秋」という。

昨雨炎を洗って涼味新たに

今朝秋立って葉声頻りなり

始めて見る林景の詩意に堪えゆるを

残月依々として影半輪……

一通り詠み終え、顔を上げる。

「なかなかお見事……ですね。」

「ふふ、そうでしょう。荒削りながらも一語一句に才をチラつかせる。彼は実に先の楽しみな人物です。」

「……で、この詩は良いのですが、先程の彼の目は……僕は本当に何か以前失礼でもしたのか。検討つかぬ事では在りますが。」

久坂はこう言っても彼の敵視する様な視線が気になっているよ

うだ。

しかし、松陰はその訳を教えず、ただ双方の反応を楽しそうに見るだけであった。

その理由は後に明かされることになる。

松下村塾（7）

先ほどの高杉の態度が妙に気になる。

何か、敵対すると言うかまるで良い好敵手を見つけたと言わんばかりの表情であった。松陰の言うとおり、確かに殺気立っては居たものの、恨み

などの負の感情は感じ得なかったし、自信も全くその様なことに覚えがない。

とりあえず怨嗟ではない。……だとしたら何なのだろう？ 高杉家は上士であるから、医者坊主と肩並べて学を励むのが気に入らなかつたのだろうか？ でも

それなら昔、幼いとはいえ共に学んだ事もあったし、階級のいざこざがあるならばその頃に事が起こってもおかしくない。何故”今”なのか……

そして、その謎に対しての師の表情が更に謎を深める原因となっていた。

（松陰先生は何か僕等に隠し事をしているのか？）

彼の思考を読み取ったかのように、松陰は、

「久坂君、高杉君は識人です。君と同じく学を磨けば光る優秀なる人材です。今は原石の状態にあります……、貴方も負けていません

よ。これから彼もこちらへ講義にくる事になりましたから、君も頑張るなさい。」

久坂は、嬉しそうに高杉の識才を称賛する師を見て少しばかりむっとした。

「成る程、それはこちらにも負けぬようよく精進致さねばなりませぬな。」

そう言いながらも、僅かに怒気を含んだ久坂の声に可笑しくなったが、結局最後まで松陰は種明かしをせず、談合を終えるとそのまま彼を見送った。

久坂は家に着くと、袴を脱ぎ刀を立てかけて、さっさと書斎に入っていた。

どうやら、高杉との好敵手争いに見事火が付いた様である。

文書を読み漁り、詩作に耽るのだが、何時もと違って穏やかなものではない。

高杉晋作には負けじと少し躍起になっているようだ。

・・・この学の虫と化した彼をある日近隣に住む大楽が訪れてくる。

「大・・・源太さん、お久しぶりです。まあ、お上がりください。」

二人の親交は日々重なり、今では大楽さんから「源太さん」へ親しく呼称も変化している。

奥へ招かれそこで大楽が目にしたのは、山積みになった文献・詩作書物であった。机には久坂らしい強くやや荒い文字で綴られた詩歌が何枚か

書かれてそのままになっていた。

「久坂君、随分派手にやっとなるねえ。」

「ええ、どうにも詩作が上手いかず……。」

「ふうむ、詩作がなあ……。そりゃ詩人としちゃ大事だな。」

大楽は一見穏やかな何時もの久坂の口調の内に僅かな怒りが含まれて居る事を目ざとく察していた。

「本当に、どうしたものと。思いあぐねておりますが、しかし僕は負けるわけにはいかぬのです。」

「負ける??」

誰に?とは敢て加えずに、久坂自身が話すのを待ち促す。

「今日、高杉晋作なる御仁に初対面しました。その時に松陰先生が、彼の識才を大いに称賛され、そこまでは良いのですが……。兎も角、僕はその高杉とどちらが勝るものか正しく競わねばならんです。」

「それで、これだけの書物を……。ふむ、吉田殿がなあ。」

大楽源太郎は、久坂と親しく交わり相互に気安く接する程の仲になっているが、この大楽という人物。松陰が江戸で萩で活動し、名を広めたに對し誰よりもいち早く志士としての思想・活動を開始し、久坂たちが活動するより先に京へ上り多くの人物と接触対談するなど、攘夷運動に至っては彼等の先駆者ともいう

べきである。だから、久坂も大いに敬意をもってまた、詩歌にも優れた大楽を親しく兄の様に思うのである。

「然り。僕は身分なぞでは到底叶いませぬが、せめて詩作の才だけでもと……。」

「ほう、先方の作は見たことは無いが、君をそれ程創作意欲掻き立てさせるものがあるとは……一度拝見してみたいものだな。」

「源太さん……！」

久坂は、好敵手と定めた高杉を評した親友を恨めしげに見つめた。大楽の方はただ、そんな彼を面白そうに苦笑いしながら無言で交すのであった。

この日から久坂・高杉の好敵手としての日々が始まる……。

松下村塾（8）

大楽と談じてから明くる日、久坂は松本村の塾へ行こうと田畑・あぜ道を歩いていった。

いつもの通り、杉家が見えてきたが、今日はいつもと違う空気が流れている事を感じ、

思わず立ち止まる。

杉家の玄関には何時も通りお文がいて、掃除中だったのだろう竹箒を手をしている。

しかし、いつもとは違いもう一人、女の隣にいる人物が目がいった。先日好敵手と認めた高杉晋作その人である。

今一番顔合わせが辛い人物が直ぐそこにいるものだから、どうしたものか考えあぐねていると、どうやらお文が気付いたらしく、

「あ、久坂さん。いらっしゃい、お早いですね。」

と、快活な声を掛けてきた。

当然彼女の隣にいる高杉も彼の存在に気付く。

久坂は心底参ったなという表情で少しばかりうろたえたが観念し、お文に軽く会釈した後、高杉にも一言だけ軽く挨拶した。

「この間もお会いしましたね。高杉殿。」

「・・・・・・ああ、しかし君も熱心だなあ。毎日来とるのか？」

気まずそうに話す久坂とは裏腹に、高杉は親しげに返事を返す。
傍から見れば逆にその親し気な態度の方が怖いのだが・・・・・・。

「ええと・・・高杉殿こそ今日も先生と対談ですか？」

「うん？あゝまあそうじゃな。そういう君だって先生によろじゃろう？」

「ええ。しかし、先約がお在りなら僕は遠慮して・・・。」

しかし、高杉はそう言って退こうとした彼の腕を掴みその場へ留まらせる。

「折角じゃ、君とも論じてみたいし一緒に上がろうではないか。今日は僕達だけじゃない。他にもえっと門人が来とるそうじゃ。」

そうまで言われてはもはや引き返す訳もなく、久坂は高杉の言うまま家屋へと入っていった。

彼等の様子を暫く見つめていたお文は、ふっと少しばかり笑むと、さっさと台番所の方へ歩いていった。

一方家屋へ入った二人は多くの門人の間に入り、早速対談を始めた。

「よし、じゃあこの辺りに座って暫くじゃが話そうか。ま、先生が来る迄じゃが。よかろう？」

「え、ああ。構いせんが。不肖、高杉殿の談についていけますかな？」

「久坂君、高杉殿はやめてくれ。呼び捨てで構わん、先生の教えじゃないか。晋作という字がある。そう呼んでくれ。それから堅苦しい言葉は抜きじゃ。」

豪快に笑いながら、高杉は気さくにそう言った。

その気さくな態度に緊張が解れ、久坂も自然と笑みがこぼれた。

「じゃあ、徐々にという事で。僕の事もお好きなように呼んでください。」

こんな会話から始まり、談じて行くうち互いに”晋作””玄瑞”と、親しみを込めて呼び合えるようになっていくのであった。

多くの門人が待つ中、遂に松陰が部屋に姿を現した。

松下村塾は杉家の一室で最初の講義を始めるのである……。

松下村塾（9）

杉家の狭い家屋での講義には様々な階級の若者達が集まって日々議論を重ねていた。

松陰は身分にとらわれる事なく学問を学びたいものなら誰でも講義を受けられるよう

広く門人を受け入れた。本来なら顔を合わす事すらない武家上士と足軽たちがここでは

対等に扱われ、同じ高さで話しをすることが許されていた。講義に来る者たちは松

陰の姿勢に感服し、塾内での階級的問題は一切起こらなかったのがある。今日の講義は

久坂玄瑞を始め高杉晋作・吉田栄太郎ら後に四天王と呼ばれる大物もこぞって参加して

おり、何時もよりも弁舌大いに盛り上がった。

松陰の教育は、個々の能力や性質に応じた丁寧なもので中には師対しあからさまな反撥

をするものもあったが、彼の辛抱強い教育指導によって改心し、真面目に学問に打ち

込む様になった生徒もいた。また、そんな松陰を支える杉家の人々にも門人達は大いに

敬服し、一層期待に応えようと才の向上に励むのであった。

そんな松陰に感化されつつある久坂・高杉兩人。

自分達の才を引き出す為に互いに好敵手としての認識を持たされた二人は、松陰の思惑

通り文武に競い合いそれぞれの才能を早くも開花させていった。そんな高杉に松陰がまた一つ持ちかける。

「高杉君、以前見せていただいた詩作・・・久坂君には見せてみたかね？彼は詩歌には優れているから是非彼の評も叩いてみるといいでしょう。」

「・・・・・・はあ。」

敬服する師にそう言われて力なく返事を返す高杉であったが、その決して心中はおだやかではなかった。

久坂とのわだかまりは氷解したものの、それはあくまで同志としての関係なわけで、学問に関してのものではない。学においてはやはり彼は好敵手でしかないのである。

一方の久坂も同様に、同志としての親しみは持てても学問に至ってはあくまで競う相手としか見れず、松陰が高杉の才を評価するのを何ともいえぬ気持ちで見守るのであった。

中谷正亮や入江九一などは松陰の互いを競わせて向上させるという教育方針を早くから見抜いていたが、敢て知らぬ振りをし、彼等の学力・思想の向上を見守るのであった。

こうして、若者たちの講義に取り組む中、門人は次々増え狭い杉家では部屋が足らなくなっていた。

ある時、久坂は一つ提案する。

「これだけ門人が増えた事は真良い事です。しかしながら、これだけの人数が母屋に集っては、杉の方々にもご迷惑になろう。」

「確かにその通りじゃが、でもここ以外に集まる場所なぞあるか？」

高杉がすかさず返す。

「以前にも考えた事なんじゃが、この隣の空地に材木を集めてきて講堂を建ててはどうか？ 大きなものは無理じゃろうが、何もないよりはマシじゃろ。」

杉家の隣に講義堂をという久坂の案に、最初は出来るのだろうかと不安がっていた門人達だったが、一人が賛成を唱えると一人、また一人と賛同者は増えていった。

こうして、いよいよ村塾という独立した学問所が誕生していくのである。

松下村塾（10）

杉家の庭に一つ講堂を建てようという久坂の案は直ぐ様実行にうつされ、塾生達はこぞって、木材や工具を持ち寄り昼夜徹して作業に取り掛かった。

「久坂さん、これどこに打ち込めばええですか？」

久坂の隣でトンカチ叩いている寺島が言う。

「ああ、それはその柱の境に打ってくれ。」

朝から快晴で、日差しの照りつける中建造作業は進む。

彼等は、滝汗を流しながらもそれを拭う間も無く、仕事に追われている。手ぬぐいを肩から掛け、着物も膝までたくし上げ皆一様に真っ赤な顔で柱を固定する作業に掛かっている。

この厳しい労働に、普段は上士身分として少し違う空気を纏っており、久坂以外の門人達からは孤立しがちだった高杉が文句一つ言わず黙々と材木に鋸を入れている。その表情は渋々という風ではなく、この作業自体を楽しんでいるかの様だった。

カンカントントン、打ち据える毎に響く軽快なリズムを聞きながら彼等は徐々に新しい建物の輪郭を造っていくのである。

やがて、正午になると松陰の母・滝と、末妹・文が冷たく冷やした茶と、むすびを握って皆が一息入れ休む木陰に現われた。

「さあさ、皆さんお疲れ様ですねえ。一息入れてくださいよ。」

滝は盆に沢山の湯飲みを乗せ、もう一方の手で冷水で冷やした急須を持ち寄って来た。

後から続く文も、大皿に握り飯を沢山盛っている。

「母上、有難う御座います。」

「母上殿、お文さんも・・・何時もすみませぬ。お陰さまでまた精一杯頑張れますよ。」

松陰の言葉に続いて久坂も礼を述べる。それに合わせて、高杉ら門人達も次々と言葉を続ける。

「いえいえ、皆さんが塾の為に頑張ってらっしゃるのだからこの位の事当然ですよ。気遣い無くしっかり休んでくださいね。」

「そうですよ、私達にはこの位しかできませんもの。」

滝と文はそう言って、少し頭を下げるとスッと母屋へ入っていった。それを見届けてから松陰は塾生達に言った。

「さあ、皆さん。ここでゆっくり休んで午後からまた頑張りましたよ！」

「任せてください！僕等全員が力を合わせりゃ講堂も直ぐ完成しますよ。」

「その通りじゃ。皆で頑張りゃ楽勝ですよ！」

松陰の激に、高杉が軽快な口調で鼓舞を取ると、それに賛同して吉田栄太郎、山田顕義らも口々に言いはやした。

久坂は傍で塾生たちの激を聞いて、彼等の結束が少しずつ確かなものになっていく事を感じた。

松陰も普段とは違い門人達をまとめ様と意気込む高杉の姿に、満足気な表情を見せ、久坂と共に笑って頷きあうのであった。

松下村塾（11）

材木を掻き集め、鋸で寸法通りに測り切りながらの地道な作業もや
っと大詰め。

塾の輪郭がしっかりと見え始めてきた時、久坂はふと隣から小さな
呟きが聞こえた様な気がした。

「・・・俺としたことが、こげな作業を楽しんでやりよるとは重傷
じゃ・・・。」

声のする方へ少し視線を運んでみると、そこにはブツブツ愚痴のよ
うな、照れ隠しの台詞を吐きながらも手
を休めず黙々と真剣な面持ちで壁塗りをする高杉の姿があった。

高杉家は上流階級の士族。本人曰くかつて芸州に拠点を置いた大大
名毛利家よりの臣という家柄との事で、
彼自身その事を大いに誇りに思っていた。

そんな上士階級の武家子息が大工作業を手伝っていると言う事がど
うも納得いかぬのか、先程からそ
の手の独白が小さく風に乗って久坂の耳へ入ってくるのである。

（ああ、成る程。こりや確かに晋作には辛いな。今までの武家稽古
などとは豪い違いじゃ・・・。）

その高杉、作業の手を休めた隣人が気になりふとそちらへ視線を移

すと、一人うんうん頷いて何か
納得した表情の久坂がいるではないか。

自分の事を考えているとは露ほども知らず、高杉久坂がサボっているのだと思い込み、

「おい、玄瑞よ疲れたんか？頷いて何か考える振りして・・・実はサボっとるんじゃないじゃろうな？」

と、隣人を茶化すのであった。突然の誤解発言に思わず慌てた久坂はあからさまに驚きの表情になり

「違う違う。僕はサボろうとかそんな事は思っちゃない。ただ・・・」

言いかけて、言葉を詰まらせると高杉は一層疑いの眼差しをこちらへと向けてくる。

「ただ・・・なんじゃ？やっぱ玄瑞はサボろう思うたんじゃろ・・・それとも、妹御にでも見惚れとったんか？」

こうなると完全に高杉のペースである。急に女子の事を出され、久坂の慌てぶりに拍車がかかる。

「・・・！晋作！そげな事じゃない！君こそそんな茶化す暇があったら作業を進めえ！」

大慌ての久坂と既に本題から外れて単純に面白がる高杉をよそに、着々と工事は進み夕暮れの刻になると
遂に講堂は完成するのであった。

こうして松本村に松下村塾と称される私塾が開かれたのである。

松下村塾（12）

一松門思想一

久坂玄瑞を初め、高杉晋作や入江九一、野村和作など多くの門徒達にとって、新たなスタート地点となる
学び舎が遂に完成した。

彼等の活動拠点となる松下村塾の誕生である。塾の入り口にはかつて松陰の叔父であった、玉本文之進が塾を開講し使用していた「松下村塾」という古い看板を立て掛けそのままの名称で呼ばれるようになった。

「やっと僕達の塾が出来たんじゃな・・・。」

一同が完成した塾を囲むように立ち其々思い思いに自分たちの講堂を見上げる中、高杉は一人誰に言う
でもなくポツリと呟いた。

この共同作業を経て彼は自身の手で新たなものを構築し、生み出す事への関心を一つ持つようになる。

そんな高杉の感嘆を横で伺っていた久坂は、少しばかり嬉しくなった。

以前は身分階級の狭間で、どちらかという輪から外れがちだった高杉が、こうした小さな苦勞を共に
したことで、”僕の”から”僕たちの”という同志的な意識を持ち

始めたからである。

「さて、塾も完成した事じゃし……晋作に負けんよう明日からまた勉強に励むとするかな。」

久坂は、彼特有の大きく透りの良い声でワザとの様に隣の高杉を刺激する。

それを聞いた高杉は感慨耽っていた頭を左右に振り、思考を元に戻すと、聞き捨てならんといった

形相で隣で意地悪そうに笑む久坂に食って掛かった。

「突然なんじゃ!? あっ! そうか、この間先生が僕の詩稿を褒めたから妬いとるんじゃないろう? ふんつ、こちらとてそう易々負けるかい。」

悔し紛れか、余裕なのか高杉は鼻でフンと笑いながら久坂の挑発には乗らぬという仕草をみせた。それ

でも、怒っている訳ではない。寧ろ顔には笑みすら浮かべている。

久坂の挑戦を受ける構えを表現し、同時に良き好敵手として切磋琢磨していこうという共生の意味も含まれているのだ。

久坂は流石に、この高杉の意をしっかりと読み取りこちらも笑みを返した。

そんな二人を見守る松陰は何時にも増して嬉しそうであったし、今まで特に高杉に対し、身分の壁でやはり深く関わり

辛かったほかの門人達も、彼等の若者らしい爽快な笑みにつられ堅苦しい空気を氷解させるのであった。

ここで、彼等は昼夜問わず講義、または議論に明け暮れ当初は丁度良い広さであった講堂も、徐々に口々に広まった

塾の評判により門人が増えて行き、遂には小さな講義室に多い時には80余名の門下生が集うなど大変な盛況振りであった。

初めは、一塾生として指導を受けていた久坂や高杉も、塾生が増えるにつれ門人から指導者の役割も受けねばならぬ事も

あり、彼等は徐々に松下村塾内部で大きな存在と位置づけられていくのである。

巢立つ時（1）

） 巢立つ時 （

塾の講堂を築いて早くも半年が過ぎようとしていた。

本当ならば毎日通い、討論したいのだが藩医久坂家督を継いだ立場上そう頻繁に松本を

訪れる事は出来なくなっていた。

これが、泰平の世ならば家督存続は何にも代え難いものである。しかしながら、今諸外国

との論争により国は慌しく動いている。この今までの平穩がもしかしたら永久に失われる

やも知れぬ危急存亡の秋ときなのである。

目まぐるしく変わる時代の流れに、ただ身を任せるだけでは居られない、自分に何か

出来る事はないのか。久坂は家督という小さな枠組みに囚われる自分が情けなくて仕様が

無かった。

藩医として蘭学や医術等の学問を修めるべく日々好生館に通いながらも彼は悶々と自身の

境遇を愁いていた。

（自分も何か国の為できることはないのだろうか……。今のまま自分の立場を取り

お家を守るだけで果たしてよいものか・・・）

考えれば考えるほど溜息が出てくる。次第にそれは大きくなり目の前が暗くなってくる。

最近では医業の取得に手間取って塾へも久しく通っていない。

近隣の大楽源太郎との交流も、好生館寮に入ってここ数日途絶えている。

好生館の学生達とは特に時勢を論じる事も無く、掻い摘んで噂程度に情報の語らいを

する程度。当然これで焦燥に駆られている

久坂が満足するわけ無く、悶々とする毎日を送っていた。

暫く医学に勤しんだ久坂は、ようやく好生館の講義から開放されま
ず平安古の町を

練り歩いた。近くに住み、幼少からの親友・大楽の元を訪れる事に
した。この友人

宅を訪れるのは久しぶりである。

門を叩き呼ぶと、木戸が開き家人と思しき老婆が姿を見せる。久坂
を一目見ると、

「お久しぶりです。久坂殿、源太郎様は奥に居られますよ。さ、さ、
客間でお待ちに
なってくださいな。お伝えしてまいりますから・・・。」

といって、襖を静かに閉め部屋を出て行った。久坂は足音の遠ざか
るを暫し聞いていたが、

やがてその音も聞こえなくなると視線を天井へ移しふうと一つ溜
息をついた。これは

好生館での愁いを帯びたものとは少し違い、久しぶりに論じる事が
出来る、一番の

空間に入り込めた喜びと緊張から来るものであった。

暫く待っていると、トタトタと規則的な足音が廊下から響き、客間の前でパタと止まり、

スツと静かに襖が開く。その襖の向こうより部屋へ入ってきたのは、先程家人の老婆が呼びに言った大楽源太郎その人であった。

「あ、源太さん。お久しぶりです。」

久坂は心から親しみこめて挨拶を交わす。一方の大楽も、実に優しい笑みを浮かべ、

「やあ、久坂君。随分久しぶりじゃ。この所好生館に雪隠詰めだったそうじゃないか。

はは、君にはあそこは物足りんじやろう。」

と、言って可笑しそうに笑った。サラリと襖に隠してあった感情を読み取られ久坂はグツと

言葉に詰まる。だが、長い付き合いのある大楽には隠し事をしても無駄だなど観念した

彼はポツリポツリと自身の境遇の事を話し始めた。

巢立つ時（2）

久坂は大楽源太郎と対座して、これまでの好生館での講義や同僚達との対話等掻い摘んで

話した。幼い頃の自分ならば、父の後継者としてこの医業を喜んで習得するであろうが

今は違う・・・それを聞いて欲しくてまず彼の元へ来たのだ。

「・・・成る程。久坂君はこのまま医者にはなる気はないと言う訳か・・・。確かに、

今の時勢のんびり医業だけを継いで過ごそう訳にもいかんからな。

君の様に色々な

人物達から良く影響受けた人ならなお更だろう・・・。」

大楽は頷きながら言った。

「源太さんの仰るとおり、僕は藩医分で一生過ごそうとは思ってません。出来る事ならば、兄・玄機が目指した様に・・・。源太さん達の様に武士として、いえ成れずともせめて

志士として活動したいのです。しかしながら藩命には逆らえませぬ。どうすればよいもの

かと日々思案しとりました。」

久坂はがっくり頭垂れて切に訴える。

その悲痛の声を瞑目し聞きながら大楽は、あれこれ思案していた。

藩医として努める事は

久坂家を継いだ彼の義務であり、藩命であるから到底逆らえない。

何とか良い様にして

やりたくても、出来ぬのが現実。

士分を持って京都で既に活動盛んな大楽を羨み、共に活動をしたいという久坂の切な願ひも

痛いほど解るが、今の彼等にはその身分とすべき役目の壁を払って行く事は出来無いのである。

「ふむ……。藩命は絶対だからなあ。論議だけならばここや松門でいくらでも出来よう……。他藩との接触を望むなら学業習得を理由にして国暇（他藩へ出かける許可）を

申請すればいい。取り敢えずはこの位の方法しか浮かばぬが……。どうろう？」

一つの案を出され、少しだけ頭を上げ久坂は大楽の言葉を反復する。確かに彼の言う通り、

今はそれ以外に活動をする方法が見つからない。取り敢えずは……。大楽の言う通りに

ここで論を鍛え、それから活動へ入れればいい、久坂はそう結論付け今度はちゃんと顔を上げた。

「ならば、源太さん。医業に励みながら、こちらや松門で論を鍛えようと思います。申し

訳ないが、少々ご厄介になりますよ。まあ、源太さんの邪魔にならない様にはしますけど。」

屈託の無い笑みを溢しながら、久坂は大楽にそう告げた。

「ああ、私も暫くは萩に落ち着こうと思うし、いつでも論を吹っかけに来なさい。」

先程とは打って変わって明るい表情を取り戻した久坂が微笑ましくもなり、釣られて極めて明るい口調で大楽も言葉を返すのだった。

久坂は数時間話し込んだ後大楽邸を後にした。その晩、布団の中で天井を仰ぎ今日の決意を思い起こす。

（まだ諦める事はない。時代は必ず変化する。兎に角今は今すべき事をしっかり修めていくべきだ。）

自身の意思を確認し、身の置き所をしかと認識した久坂は、緊張し悶々とした日々から解放され安心したのか、急速に眠りの渦へと入り込んでいった。

翌日目が覚めた時には、既に正午を過ぎていた。

久しぶりの快眠を楽しんだもつかの間、彼は先日の誓いを思い出し、大慌てで松門へと走っていくと、途中、明倫館から出てきた高杉と運悪く鉢合わせになるのである。

巢立つ時（3）

「よう玄瑞！・・・なんじゃ、情けない格好して。もしかして今お目覚めか？

夜遊びも程ほどにのお。」

かかと笑う高杉。まるで面白い玩具を見つけたかのような表情で、嬉しそうに

笑う様は、久坂にとって決して気分の良いものではない。

精神的な疲れから解放されて安心した為、かなり深い眠りについていた久坂は

正午まで延々眠りこけていた。

明るい日差しに目が覚め大慌てで起き上がり、

急いで家を出たために着物や袴も帯が中途半端に緩んでいたりなど・

・・・何時もの

彼からは想像つかぬ失態を犯してしまったのである。

明倫館から出て暇を持て余していた高杉にとってこれは丁度いい餌が舞込んで

来たと言う所だろう。

しかも相手があの真面目な印象を持った久坂玄瑞であるからなお更。普段からかう隙がない人物のこの失態は高杉にとって正に暇つぶしにうってつけ

の材料となった。

「で、寝坊主の玄瑞殿はこれからどちらへ？塾なら”朝早く”から講義が始まっとるが。
行くなら一緒に行こうじゃないか。」

「……寝坊主で悪かったな。塾には勿論行くが……ただ・
・。」

「……？ただ……なんじゃ？？」

少し視線を落として意味ありげに言葉を濁す久坂の顔を覗き込みながら高杉は
次の言葉を待つ。

「いや、なんでもない。それより塾へ行くのは久しぶりじゃ。何か変わった事はないか？？
先生とか皆は……。」

「いんや、変わった事は……あるな。最近の講義は今まで
のような学ぶとか
そんな考え方から実践を進めるものへ僅かじゃけど変化して行きよ
る。」

「実践？攘夷のか？」

まだこの頃は尊攘思想を高らかに唱える人物は少なく、長州もまた幕藩体制下にあった。

（討幕を含んだ尊攘論はまだ先のことである）

だから、久坂も高杉もこの手の対話を道々話す時は声を潜ませていたのである。

「うん。まだそこまでは議論が及んじやいないが、何れはそれに行き着くじやろう。」

先生も門人達も幕府の諸外国への対応には不満を露にしとったしの。」

「今までの様には如何という事か。大楽先生も悩んでいる時間は無いとか言っていたな。」

しかし、実践せよとて今忽ち何が出来るんじやろう。僕のような書生に出来る事とは何じや・・・？」

久坂は高杉の話を聞いているとまた昨晚の苦悩が脳裏を過ぎる。

医者になる定めを逃れられない自身に何が出来る。小さい藩士分に憧れそうになりたいという

望みすら叶わぬのに、お国の大事といった大業を成せなど、果たして実現できようか。

それこそ正に夢のまた夢ではないか。

悶々としている久坂の横で、士分でも上士格にある高杉はちらりと悩む同志を横目で見た後、

大きな晴天の空を仰ぐ。

「士分があっても同じじやろ。所詮は一藩士。藩の事は出来ても日ノ本をどうこうする事はできんのじや。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「のう、玄瑞。先生は凄い事を言寄ったぞ。日ノ本の民が一丸となり統一された民族として立ち上がるべきと。」

草莽が今必要なんじゃとっておった。君はこの意見どう思うよ。僕は勿論先生に同感じゃが。」

高杉が松陰から聞いた草莽という言葉。彼は彼なりに考えているようだ。

初めて会ったときは敵意むき出しの高級士族の青年だった高杉。

久坂に対しても、師の松陰に対してもどこか近寄りがたい空気を醸し出し士族としての誇りを高らかに掲げて

いて、塾においても浮いた存在だった。

その高杉が民衆に力を求める事に同意を示すという事は彼の大きな変化を意味するものであり、久坂は久しぶり

に見る同志の成長振りに目を奪われた。

巢立つ時（４）

高杉の変貌は目覚しかった。

僅かの間に、これだけ明確な意思を訴える事ができるとは……。久坂はそんな盟友を見て、ふと少し前の事を思い出すのである。

二人の若者が互いに好敵手として認識し、競い合い時には喧嘩染み
た論争を繰り広げる
のを、周りが仲裁に入ったりオロオロしたりする様を師たる人は何
をするでもなくただ
教卓からじっと静かに見守っている。

その表情に曇りは無く、寧ろ晴れ晴れと我子の成長を見つめる親の
様だった。

そういえば、出会った頃から目の前の男とは論争耐えなかった気がする。

思想というか、学問等等。とにかく様々な分野で負けじと意地にな
っていたと思う。

別に仲が悪いわけでも過去の因縁という訳でもない。

全くの初対面の筈で……。これが目的だったのかと気付き
ここまで来て久坂は、ああそうか。はっとするのである。

松陰が何故怒る事も無く、ただ見守っていたのか・・・
やっと解った気がする。自分達は試されていたのかもしれない。
それぞれを褒めておいて、そして相手を言葉巧みに刺激し競争意欲
を掻き立てる。

互いを強く意識するように。

つまり、松陰は両者の才を早くから見抜き、高杉久坂兩人の学問向
上意欲を上げる為に、

ワザと高杉の前では久坂を持ち上げ久坂の前では高杉を高く評価す
ることで、嫉妬に似た

ライバル心を煽ろうとしていたのだろう。見事松陰の思惑通り、久
坂高杉両者ともに競い

合って学問に励み今正に双璧と成り得る質を開花させるのであった。

（こりゃ先生にしてやられた訳か……。全く人の悪い事を……。
それにしても、晋作が
知ったらこいつは暴れるじやろうな……。）

笑ったり苦い表情を作ったり、コロコロ表情を変化させうんうん一
人納得する久坂を訝りながら
見つめる高杉がいた。

「なあ玄瑞。何一人で芝居の役者みたいな事しとるんじゃ？もしかして寝すぎておかしゅうなったんか？」

と、一言多いが一応心配の言葉を投げかける。

「な、おかしいとは失敬な。僕はたった今ある重要な事の種を明かしたんじゃが……、君には教えちゃらん。」

フンと歩きながら視線を他へ向ける久坂。

それに、少し焦ったのか高杉は、大慌てで久坂の前に回りこむ。

「なんじゃ。ちょっと待て、重要な事の種明かしってなんじゃ?!」

「いいや、君には一生解らんじやろうからええ。というか解らん方が幸せかもしれんな。」

ふふんと軽く言葉であしらうと、久坂は歩幅を広げ啞然と立ち尽くす高杉を尻目にどんだん松本村へ歩き去っていくのであった。

やがて、ハッと我に返った高杉は大急ぎで後を追ひ、共に松本村の松下村塾へとたどり着いた。

松下村塾へは久しぶりの訪問になる。

久坂とて毎日通える訳ではない。無論他の塾生とて同様だが、皆それぞれに家督を継いだり、家業に勤しんだり。大変な生活の合間を縫ってこの塾へやっところさ足を運んできているのだ。

貴重な自由時間を割いて来るだけの価値がこの場所にはあるとも取れる。

兎も角久坂高杉は久方ぶりにこの門を叩くのである。

「御免ください。」

「はーい。・・・あら、久坂さん高杉さん。お久しぶりです。お変わりなくて何よりですわ。」

「まあ、お上がりになって。」

出迎えたのは末妹・文である。

そういえば、この少女とも久しぶりの対面であるが・・・。
相変わらず家事をせっせとこなしているらしく、走ってきたのか少しばかり息遣い荒くなっている。

「おお、お文さん。久しぶりじゃ、先生はご在宅じゃな。」

高杉が気さくに話しかけると、文は楽しそうに頷き答える。

「はい。お二人がお見えになるのを首を長くして待っていますよ。」

「では、お会いできるんですね。」

文の言葉に続いて、久坂が問う。

「ええ、今日は塾の講堂へ居るみたいです。もしかして来訪されるのを承知で待っているんでしょうか？？」

兎も角お通りになって。直ぐお茶をお持ちしますから。」

そういつて、二人を中へ促すと文は母屋台番所へと去っていくのであった。

巢立つ時（5）

高杉と連れ立って講堂へ歩く。

久坂はただ、先に行く盟友の後を追った……。途中、何を思ったのか高杉は突然歩みを止め、久坂へ向き直った。

「なあ、玄瑞。そういや君はまだ妻帯しちゃうおらんかったかいの。」

「なんじゃ、突然。・・・そりゃ僕はまだ見ての通り一人者が。それがどうかしたんか？」

「いや、ただちよつとな。気になっただけだ。」

「？」

「ま、まあええじゃないか。行こう行こう。先生も皆も待ちよるぞ。」

唐突な質問をしておいて勝手な自己完結をする高杉。

久坂はそんな盟友を見て訝り気になったが、先生が待っているという言葉に渋々従い黙って
ついていった。

草履を脱いで、一步踏み込むと既に大勢の門人達が集まっており、二人はその間を何とか縫って
松陰の傍へと近づいた。

「先生、遅れてしもうて済みません。」

「先生お久しぶりじゃ言うのに申し訳ありません。」

二人が口々に謝罪すると、松陰は少し顔をあげ、

「いえいえ、一人で待つわけではなし……。それに君たちとて家業がおありでしょう。そちらを
忠に全うするのは良き事です。」

と、かえって穏やかな口調で二人の若者を諫めるのであった。

久坂と高杉は、久しぶりの松陰の講義を受ける事になった。
講義といっても、ほぼ彼等の場合師弟間の議論が主体なのだが……

。

久しぶりに会った二人の議論を聞きながら松陰は、ちやくちやくと日ノ本を支えてゆける若い人材が

生まれてきているという事に喜びを感じつつも彼等がこれから起こると思われる様々な事件難題に

辛苦するであろう事に少なからず痛みを覚えていた。

ふと、松陰は久坂の方へ向き直り一つ、

「そういえば、久坂君は今ほとんど好生館の寮へ泊まり切りかね？」

「え？あ、はい。家督を継いだ以上は藩医として一日も早くお役に立てねばならぬので。」

「では、お家も今は寂しかろうね。」

松陰が何を言わんとするのかこの頃の久坂には皆目検討もつかなかった。

ただ、高杉は何か知っているらしく始終ニヤニヤしてはいたが・・・。

やがて講義もひと段落し、門下生らはそろそろと解散して行った。高杉も藩士として勤めがあるので、足早に席を立てて帰っていった。

ただ一人、久坂だけは席を立つ事無くじっと松陰に向かい合っていた。

二人は静かになった講堂で静かに対峙した。

どの位たったろう・・・久坂はポツリと口を開き話し始める・・・。

「先生、僕は最近このまま藩医になってただ家督を継ぐだけではないかん思うとります。」

「確かに、家督を継いで絶やさぬというのは立派な事であるし大事な勤め、しかしながら今日の様な

急要する事態が迫っているならまた話はべつでしょう。」

「ええ、だからこそ僕は迷っているのです。なんというか・・・。」

「つまりは、久坂君は医者になる気がないと・・・こう言いたい訳だろう？」

松陰は言いにくそうに言葉を濁している久坂の代弁をするかのよう
に、サラリと述べた。

対する久坂はあっさり確信をつかれて決まりが悪そうにすこし俯いてしまった。

「実は・・・・・・・・その通りなのであります。僕はこの時勢、のんびり藩医などで生涯を大人しく
終えるのが苦しゅうて仕様が無いのです。」

この師と対峙すると不思議と嘘は付けなくなる。

久坂は泣き縋る様に、これまでの好生館での安穩とした書生生活、大楽との対話一つ一つを
掻い摘んで話した。

松陰は黙ってそれらを真摯な眼差しで受け止めながら、眼前の門人・
同志の嘆く声を静かに
聴いていた・・・・・・・・。

巢立つ時（6）

「医者身分で安寧の生涯を送る事は、僕にとって最良の道とは言い難いのです。」

久坂は語った最後にもう一度そう付け加えた。

「・・・そうあらうとするならば、君は差し当たって今の境遇を少しでも変えられるよう

努めなければ成らないね。」

対する松陰は至って冷静に述べる。その表情には微かな笑みが込められていた。

「・・・・・・・・？」

「今君は好生館で主に寝泊りしているのだったね。」

何を言い出すのだろう。久坂は小首を傾げて師を見つめた。松陰は尚も続ける。

「好生館での学問に打ち込むのも大事であろうが、国事を語る場が無いのも困った事です。

君のような秀才が世に出んとするならば、もっと多くの有志と語りその言一句に至るまで洩らさず

自分の力とせねばならない。その為には今の場所に押し込められる境遇は余り望ましくないな。」

ぽつりぽつりと話を進める松陰の言葉に耳を傾けながら、久坂は緘るような気持ちで問いかけるのである。

「先生、どうすればその様な大事を成せるのでしょうか。僕は今からどうすれば良いのでしょうか……?」

と、少し俯き加減に訪ねる。

「……………」

松陰は暫く腕を組んで瞑想し、良策を思案していた。

久坂が今藩医分を避けるというのは難しくても、せめて常時近くで自分達と語らう事が出来れば……。

それだけでもかなり彼にとっていい環境が得られるというのに。一

つの案が浮かんでは消え浮かんでは消え……。考えあぐねている二人の室に、丁度良く入ってきた人がいる。

「寅兄様、お茶をお持ちしました。」

「む、お文か。有難う、お入りなさい。」

スーッと襖を開けて、入ってきたのは末妹のお文であった。彼女の持つ盆の上には萩焼の薄く焼かれた独特な色合いの茶器が二つ並んで置かれている。

ツツと静かに茶を並べると、少しだけ笑みを残してまた来たと同じ様に物音立てず静かに退出していった。

この妹の仕草を一部始終見つめていた松陰は、ふと一つ妙案を浮かばせる。

そういえば、あの娘は……。少し考えていや待てと考えを打ち切り違う話題を振ってみる。

「さ、まあ一先ず茶でも飲んで一服つくとしましよう。」

「そうですね。頂戴いたします。」

久坂はようやく落ち着いた笑みを浮かべ器を手にとって口を近づけ

た。

熱い茶は彼の疲れた心に一つ癒しを与え、幾分効果があったようだ。彼は師と向かい合って、この一時の休息を味わっている。

やがて、一頻り寛いだあと、再び松陰は久坂に向かって話を再開した。

「久坂君、医者になる気が無いのであれば、好生館にいつまでも居続けるのは辛かろう。あそこから出て見れば良いではないですか？」

突拍子も無いが、最も彼が望む言葉を投げかける松陰に、暫く目を瞬かせていたが、目の前の師に何か良策があるのかと、思わず見を乗り出し次の言葉を伺う。

「確かに何時までもあそこに居る気にはなれませんし、折りあらば出たいとは思っておりますが。……しかし、もう先だって屋敷を人に譲り渡してしまったので……。」

「それならば、どうかね。僕達と共に住まえば？」

松陰は最も魅力的な提案を提示してきたのである。塾に通うという手間が省け、尚且つ松陰と始終論ずる事が出来る。なにより、幼くして肉親を失った久坂にとって杉家の様な家族団欒の風景は非常に懐かしくありがたい物でもある。彼は松陰の真面目な誘いに一瞬目を輝かせた。

「その様な事が出来るのならば……良いでしょうが、しかし……。」

「父母達は君の人柄はよく知っているし、妹だって顔見知りなんだから大丈夫でしょう。」

確かに、久坂は杉の家族とはなんども顔合わせしているし、ここで食を頂戴した事もある。

彼等とは全くの初対面という訳ではなく、杉家の一同も快く迎えてくれるだろう。

しかし、久坂には一つ気になることがあった。

「父上殿や母上殿は良くても、その、お文殿はまだお若い方ではありませんか。僕のような男がその様な方がいる場に入りこんで良いものではありませんまい。」

久坂の気にする所というのは、まだ15歳の若い師妹の事であった。年の行った父母なら兎も角、未婚の男女が一つ屋根の元に揃うのはいかなものか、久坂自身もまだ、

18歳と若い女性が全く無関心な年齢ではない。

それ故、この問題は捨て置きぬ事であった。

「それならば大丈夫です。お文とて君の来訪は慣れているし家族としてすぐ認識すると思いますよ。」

「・・・・・・・・・・。」

「まあ、杉の方はなんら問題はない。あとは、君が気が向いたらその仕様じゃないか。」

考え込んでいる久坂の肩をポンと方を叩いて、松陰は部屋を出て行った。

久坂にとっては、まさに幸運な事であるが直ぐに承知とするにはいろいろと考えねばならぬ問題がある。

彼も松陰に遅れて、部屋を後にし寮へ帰ろうかと思った所、玄関口でお文に突然呼び止められた。

「久坂さん！お帰りになるの？今日はもう暮だし泊まっていかれては。お部屋の御支度は仕上がってますのに。」

話題に上った人物の不意打ちに驚き、固まってしまった。

そんな久坂の様子などに気付かないのか、お文は少しだけ相手の袖を引いて再び中へ導こうとする。

「さ、どうなすったのです？今日はどうぞお入りになって・・・。」

結局彼は自分より遥かに小さい少女の引く手に負けて、その言葉に

甘える様に成ったのである。

「それでは、お言葉に甘えて……。しかし、お文さんは良いのですか？」

久坂は思い切って聞いてみた。この若干15歳の嫁入り前の娘の屋敷に自分などが入って寝泊りなぞ……。良いものか。

「……………構いませぬ。久坂さんは私を氣遣ってお出でなのでしょう？ふふ、ご心配なく。ここはお客も

良く泊まられますし、もう慣れて居りますので。」

あっさりした口調で淡々と語る少女。自分を全く男と意識していないのかどうなのか……。

少々気になる所だが、余り深く考えぬよう久坂は努めていた。

やがて二人の男女の影は室内の明かりへと導かれ、その中へ溶け込んでいくのであった。

巢立つ時（7）

明くる朝、久坂は重たい目を擦りながら顔を洗いに庭井戸へ歩いていった。

井戸から汲み上げた新鮮な水に顔を近づけると、透明の水面下に二人の顔が映る

昨日の松陰やお文とのやりとり・・・・・・・・久坂の脳裏にぼんやりと浮かび上がってくる。

杉の家に住まうとなると、若いお文との接触がどうしても気にかかる。

（本当に良いのだろうか・・・・・・・・。）

夜、帰り掛けに呼び止められ、杉の家で遅い夕食を馳走になった時のあの懐かしい団欒の風景。

彼は失った家族が一瞬戻ってきたような感覚が悲しくも有難く、その人々の優しい気遣いが今も鮮明に映し出される。

そして、松陰とお文の自分に対する家族同様な暖かい言葉。久しく忘れかけていたものばかりであった。

（一・・・家族か。そういえば、父母や兄の墓にもそろそろ参らんとな・・・。）

ふっと失った家族の顔も思い出す亡き家族への墓参り等、いろんな事を考えながら冷たい水で顔を洗う。

肌寒くなって来た季節に、冷水で洗うのは手も悴み辛いが、頭を冴えさせるには丁度いい。久坂は

2回3回と冷水を染込ませてからやっと手ぬぐいで顔の水を軽く拭いた。

冷たい風が吹く中、久坂は足早に部屋へと入っていった。

「おや、久坂君起きていたのか。」

聞きなれた声が廊下に響く。向かいの部屋に寝ていた松陰である。

「先生。お早う御座います。先に井戸を使わせていただきましたよ。」

「そうですか、今母と妹が朝餉の支度をしているようで。僕も久坂君に習って井戸で顔を洗ってきましょう。」

そういつて、松陰は久坂の横を通り庭の井戸へ歩いていった。
部屋へ戻った久坂は浴衣を脱ぎ着物と袴を身にまとうと床を畳み、
座して暫く瞑想を始めた。

やがて、井戸で清め終えた松陰が戻って来ると、彼はゆっくりと目
を開け、

「先生、昨晚お話してくださった一件。杉の方が宜しければ・・・」
」

その声に、少しだが、嬉しそうに松陰が反応を見せ部屋に入ってきた。
た。

「久坂君、ここへ住まうという事は父母も承知の事です。先日僕は
部屋を出た後父母の元へ行き話しをしたのです。

二人とも快く承諾してくださいましたよ。」

「有難う御座います。実は僕も帰ろうとしてお文殿に止められまし
て、その時に一寸伺ったのです。」

「そうですか。お文が承諾する事は実は知っていたのであえて彼女
には聞きませんでしたか・・・。

いやあ良かった。君がそう聞いてくれて・・・。。。」

何かしら意味有り気な発言だが、久坂にはこの杉一家の承諾は非常に嬉しいものであった。

松陰は一呼吸置いて、彼に再度尋ねた。

「君はそういえば、幾つになるかな。」

「え・・・？ 僕ですか。今年18になりましたが、何か？」

久坂は、突然何の脈絡もない質問を投げかけられ多少うろたえたが、何とか冷静に返事が出来た。

松陰は何を言わんとしているのだろう・・・。。。

「いや、18ともなれば妻帯していてもおかしくは無いと思ってね。」

「成る程、しかし僕は先生のように一人でも良いと思っておりますが。」

何となく松陰の問いかけの意味を察した久坂は、少し顔を俯かせた。

「久坂君、妹をどうか迎えてはくれんか。ちと急な話かもしれんが、僕は君の様な優秀な血脈と良縁を持ちたかったのだよ。」

松陰がこれだけ高い評価をしてくれるのは非常に有難く嬉しい事だ。しかしながら、久坂には彼女を妻として迎えるという事が今ひとつ実感として湧かなかった。

彼女は美人とは言い難いが、氣立ての優しい娘で武家の女らしく快活明瞭にこなす様は妻として非の打ち所の無いものである。

ただ、若い久坂にはまだ世帯を持つという自覚が薄く、若干芸妓の様な麗しい女達の世界に憧れる風もあり、どうにも氣が進まない。

「先生、何分突然の事ですので暫くこの旨考えさせてはもらえないでしょうか。」

久坂は急に返事は出来ないと、松陰に正直に話した。松陰も、急な事とは承知していたのでそれ以上彼に迫る事も無く、

「そうですか、確かに性急過ぎましたね……。では暫く考えてみてください。色よい返事をお待ちしておりますよ。」

と、彼にそういう含めるのであった。

その日は、一人で考えたいという理由で杉家を夕暮れの刻、辞したのだが松陰の言葉が頭から離れず好生館へ戻っても悶々と考えるだけで学問の打ち込む所では無かった。

久坂は狭い室内の畳にゴロリと横たわり、静かに目を閉じた。

巢立つ時（8）

（色よい返事を・・・）

松陰の言葉が浮かんでくる。

それと同時に、快活なお文の声も鮮明に聞こえてくるようだ。

正直この時の久坂には結婚という概念は無い。

自身のやりたい事・・・思想、同志、国事・・・それだけが今自分の中の大半を占めている。

だからこそ、こうして悩んでいるのだ。

お文の事は先にも述べたとおり、美しいとは言えない容貌だがやはり杉の娘というだけあってか

文字の読み書きもしっかり習得し、家事もテキパキこなす良い娘で、嫌いになる理由もない。

杉家での暖かいひと時の団欒も、忘れる事の出来ぬ懐かしい記憶となっている。

「先生とて独り身であるのに・・・僕だけがこの様に現を抜かしていて良いものだろうか・・・。」

久坂はふうつと短い溜息を吐いて、目を閉じてそのまま眠りについた。

翌朝、目を覚ました久坂は玄関の戸を威勢良く叩く音に気付き戸口へと急いでいった。

戸に映る影はどこかで見た人のもの……。ううむ、と考えていると外から大きな声が聞こえてくる。

「おおい！玄瑞、早く開けんか。」

声は少し乱暴な印象だが、良く見知った人物のものである。久坂は声の主が誰であるか悟り、大急ぎで立掛けてある板を外し戸を開けた。

「中谷さんじゃないですか。お久しぶりです。」

「なんじゃ、てっきり僕は忘れられたのかと思うたぞ？塾へ行っても行き違いで

全く。僕を避けとるんじゃないじゃろうな？」

恨めしげに中谷は視線を目の前の青年に向けた。

「え？そんな事は……。偶々時間が合わただけですよ。」

「どうだかの……。それより、玄瑞。君、先生から何か良縁を貰うたそうじゃないか。先生も杉の人たちも返事を待つとるようじゃが……。」

返事……。そう言われて久坂は黙り込んでしまった。

昨日一晩考えて、結局答えは見つかっていない。かといって、返事を長く待たせる事は松陰や杉家にも下手に期待を持たせ悪い気がする。

「中谷さん、正直僕は嫁を娶る気はありません。」

「……。お文さんでは気が進まんか？それともどこぞに好いた女もおるのか？」

中谷の率直な質問に少し俯き軽く頭を左右に振ると暫くして再び彼に向き直った。

「そういう人はいないが・・・どうにも気乗りがせんのです。」

「・・・・・・・・。」

「このような激動の時期に、のんびりお家だけを考えて妻を娶る気にはなれません。それに・・・これは昔から考えておったのですが、いやどうも・・・。」

「どうも・・・なんじゃ？」

モゴモゴと言葉を濁す久坂に、中谷は首を傾げる。

「お文さんは良い娘さんじゃが、何分不別嬪でしょう。何れ妻を迎えるのであれば美しい人をと以前から考えて・・・・・・・・」

「なんじゃ！久坂玄瑞とはその程度の男か。時勢を案じ大義を果たそうとする丈夫が女の容色如きに拘るか。」

言葉途中に突然割り込んできた怒声。中谷は普段明るく振舞いどころかというと仲裁に入る様な温和な人物である。

その彼がこれ程の大きな怒声を発せようとは、久坂は目を丸くして目の前の青年を伺った。

「僕は正直に申したまでです。何故それ程声を荒げねばなりませぬか！」

久坂も負けじと食って掛かる。

「お文さんはあの松陰先生の妹御じゃ。多くの門人の中からお前だけが選ばれたという事は、先生がどれほど君の才を買っているか・・・解るじやろう。それに、家族を失った君に大事な妹を与えようというお気持ち解らんのか。」

一気に場はしんと静まり返ってしまった。

久坂はもはや何を言う事もできず俯いて口を閉ざしている。

「のお、玄瑞。京女のような美女に惹かれるのは仕様無い。じゃが、君の様な大器のする事ではない。ま、多少の遊びは構わんが・・・あの先生の聡明な妹御を正妻と迎えるという事はそれほど苦な事かの？」

先とは打って変わって優しい声で中谷は年下の青年を諭す。
その言葉に久坂はハツとした。

これ程に自身を認めてくれる師に対する自分の矮小さ。
武士に憧れ、成らんとしている己が今更容色に拘るなどなんたる小さい器であるか。

彼は自分の稚拙な思考を恥、俯いていた顔を上げ中谷を見つめた。

「・・・中谷さんすみません。僕はいま少し気が動転しております。」

「・・・・・・・・・・。」

「僕如きに大事な妹御を下さる事は、先生やご家族のお優しいご配慮であつたものを。」

「やっと解つたか。恐らく先生は君と義兄弟になりたいのじやろう。」

俯きながらポツリポツリ話す久坂に、中谷はゆっくり言葉を継ぎ足していく。

「・・・・・・・・お文さんを頂けるといふ事は名誉な事じゃと、そう思えてきましたよ。」

そう言つて、ゆっくり上げた久坂の顔は、先程までの暗い表情とは違つて若者らしく清々しい笑顔であつた。

「そう思えるならば、膳は急げじゃ。先生へちゃんと心を伝えて来い。」

中谷に背中を押され、久坂は幾分晴れ晴れした表情で松下村塾へと急ぐのであった。

巢立つ時（9）

久坂は松陰や杉の両親を訪れ、その決意を示した。

これには松陰は勿論、杉夫妻也大いに喜び末娘の嫁入りを心から祝福するのであった。

「僕のような若輩には真に勿体無い事ではありませんが、是非ともご息女を頂きたく存じます。」

凜とした久坂の声は誠実な若者であると感じさせるものであった。

「婚儀を迎えれば、私達と共に杉で暮らしましょう。寅も娘もそれを望んでおりますし。
私達も歓迎しますよ。」

暖かい母・滝の言葉がジンと心に染み渡り、改めて久坂は家族という幸せを感じるのであった。

これから妻と呼ぶ人はその場には居なかったが、おそらく働き者の彼女の事、こんな場でもせつせと

何処かで家事に勤しんでいるのだろう。

ふと、お文の快活な笑みと汗ばみながらも熱心に仕事を続ける様を思い浮かべ久坂はふっと顔を綻ばせた。

「所で、これからの事も話しておきたいのだけど。」

滝は明るい声で告げる。これからの婚儀の日取りをどうするのかと聞いている様だ。

「そうですね、久坂君も志を持った人物。活動を早く行なう為にも時期を早めた方が良いでしょうね。」

松陰は嬉しそうな表情で淡々と段を進めている。

横で聞いている久坂は僅かに顔を赤らめながら師の嬉しそうな声を聞いている。

やがて、その話題は門人や周囲の者達に及び、静かな松本村に一時のめでたい賑わいが降り注いだ。

そんな中、久坂は遂にお文との婚儀の日を迎えるのである。

様々な婚札の品が送られ、持ち寄られた祝いの料理も並んで豪華だ。どうも慣れぬ紋付を羽織って、久坂が座するとやや遅れて白無垢姿のお文が入って来た。何時もの少女ではなく、

やや顔を俯かせおずおずと自分の隣に座る。

白粉を叩き薄っすら上品に化粧を施したその容貌は何時もの生娘のものではなく女性のものであった。

隣に座る文から甘い香の馨りが漂ってくる。男独りで過ごして来た久坂にとって全てが日常の流れと異なっており
落ち着き無くその場を過ごすのである。

「疲れて無いですか？」

時折隣に座って大人しくしている人を気遣い声を掛ける。

形としては紋付は普通の羽織袴と大差ない。それでも、一張羅という意識からか何となく、皺一つ付けまいと気遣って力が入ってしまう。それ故妙に今日は疲れている。

簡単な着物を羽織っている自分がこうなのだから、隣で幾重に合わせた重い衣装を身に纏う文はどれほどのものか・・・。

角隠しを被り俯いているのでその表情ははっきり解らないが、きっと自分と同じ・・・

いや、それ以上に疲れているだろう。

久坂は妻となる人を何度も気に掛けていた。

「いいえ、私幸せと思う気持ちの方が強くて一時の疲れなど忘れてしまいそうですわ。」

上目遣いに微笑んで文はそっと呟いた。

その様を見て、久坂も僅かに頬赤らめ、それきり静かに儀式の終わるのを待つのであった。

厳かな儀式が終わると、いよいよ飲めや謳えや大騒ぎの宴の時間となる。

この時になってようやく、緊張も解れ落ち着いて祝い酒をあけることが出来る。

横に静かに座していた文も疲れた表情はしているが、実に楽しそうに宴の行事を眺めているようだ。

夜遅くまで騒ぎ、杉夫妻や玉本文之進ら親族・松陰達の言葉や賛辞を聞き、いよいよ久坂とお文は正式な夫婦となった。

儀式と宴が終わって、新しい畳と家具を揃えた一間に若い夫婦は疲れた顔で戻ってきた。

久坂は部屋に入ると、後ろのお文に向き直り疲れていたが努めて微笑む。

「何か不思議な気分じゃ。つい先日まで君を先生の妹御と見ておったのに……。」

「私も同じですよ。少し前まで杉の娘でしたのに。」

「何はともあれ、これからは久坂家の妻としてよろしく頼むよ。」

「ええ、夫の名に恥じぬ様妻としてしっかりお勤めいたしますわ。」

新しい夫婦生活は実に慎まやかに営まれるのであった。

あと少しで年も明ける……。

新たな生活と、やっと取り戻せた団欒……。

何より、独りで暮らしてきた久坂にとっての唯一無二の家族。

これから激動を歩む彼のひと時の幸せな日々が始まるのである。

巢立つ時（10）

慌しく婚儀を終え、その熱も冷めぬ内にまた忙しい時期が訪れる。

新年の幕開けである・・・・・・。

新たな年が始まるという事は、日ノ本に住まう全ての人々老若男女身分問わず

新しい年への抱負と期待を抱く幸福の時間である。

それは、新しい家族を迎えた久坂にとっても例外ではない。

今年こそはと思う強い気持ちを抱きながら、杉の家族、そして新妻となった文との朝を迎えるのだった。

彼にとって久しく団欒で迎える元旦、屠蘇の席。

今まで閉ざされてきた暖かい日差しに囲まれながら、ほろ酔い気分で自室の書斎へ足を向ける。

久坂は少し赤らめた頬のまま書斎で筆を取ると、自身の今の心を上手く詩に託そうと筆を

ゆっくりすすめる。

（・・・・・・？）

どういう事か、新年故多少気持ちが高ぶっているのか上手い詞）が浮かんでこない。

詞どころか頭がぼんやりして考えるという行為にすら及ばぬのであ

る。

(・・・・・・あゝ、成る程)

久坂は何か思い当たる所があったらしい。

気持ちが高ぶっているのは新年故ではない。妻となったお文との夫婦の交わりに慣れていないからだ。

15歳で嫁した彼女は少しでも距離が縮まると、さっと頬を朱色に染め、華の様にしおらしく

恥らうのである。

そんなあどけない新妻の姿態は、何とも初々しいもので久坂は先を思い当たって一人赤くなってしまう。

邪念を払おうと、冷たい風が吹くなか彼は一人庭の先にある講堂へと歩いた。

途中の廊下で片付けを終えた妻を見つけた。

「あら、檀那樣。どちらかへお出かけですの？」

お文は寒い風吹く庭へ出る夫の姿を認めると、身を縮める様な格好をしながら問うた。

「ああ、少し酔いも醒まそうと思うてな。外へは行かんよ。ちと講堂へ行くだけじゃ。」

訝る妻に軽く笑みながら答えてやる。

「講堂へ？あそこはお寒いでしょうに。綿入れないとお持ちくださいな。」

そういつて、お文は足早に部屋へ入って行ったかと思うと、直ぐに何か手に持って戻ってきた。
その手には分厚い綿入れがある。

「さ、お風邪を召したら大変です。これを着て・・・・・・・・。」

「すまない。直ぐ戻るから君こそ早く戻りなさい。」

そう言つて久坂は受け取つた着物を羽織りながらゆっくりと講堂へ向かつていった。

講堂へ入ると一つ小さな影が見える。

ひんやりと冷氣漂う不思議な空間と化したこの講義堂に誰がいるのだろうか？

久坂はゆっくりとその者の気配を窺いながら近づいた。

「おや、久坂君。どうしたんだね？」

影の主は松陰であつた。新婚初夜を迎えた若夫婦がゆつたり年明けを暮らせるよう氣遣つてここに居たようだ。

「先生こそ、ここで何を？」

「……………久坂君、アメリカ国が掲げてきた条約締結問題は知っているね。」

「はい。大楽先生や月性殿の話では、かなり不平等な内容であると。」

「その通りだ。しかし、これを簡単に撥ね付ける訳にもいかぬだろうね。」

「……………」

「なあ、僕はこれからの時代、日ノ本を支えるのは武士だけでは足らぬと思つて居るんだ。」

ここに住まう全ての民族が藩や身分制の小さな枠を超えて団結し今こそ故国が為立ち上がるべきと思うんだ。」

松陰の言葉に、長く武士身分への憧れを抱いて、戦うのは刀と武士だという気持ちを少なからず据えていた若い彼は酷く衝撃を受けた。

「藩や武士階級だけではない……？」

「今の幕藩勢力ではもはや限界が来ているんだ。これらに成り代わる有能な人材組織の樹立が今日ノ本にとって急務となろう。」

松陰は今、古くから続いた封建の社会を否定するような言葉を吐い

たのである。久坂はただ、呆然と言葉を聞き必死で整理しようとしている。

その混乱する思考をなんとか纏め上げて、彼はやっと一つ質問を口にした。

「・・・・・・・・では、幕府が駄目なら朝廷ですか？」

「久坂君。残念ながら長らく栄華の中にあつた公卿様では何も変わらぬのだ。これから世界の強国相手に立ち向かつて行くには、草莽達が立ち上がる他ないのだ。」

「草莽・・・・？民衆の事ですか・・・・。しかし、どうやって・・・・。」

「

「国を思い志に命を賭せる有志・・・・君や高杉君、日ノ本にあつて時勢を憂う心ある若人達・・・・。」

彼等と共に手を結び、藩や身分の枠を超えて共に立ち上がるんだ。」

松陰は何か思いついたのか、久坂の返答を待たずにさっさと足早に講義堂から去っていった。

残された久坂は、松陰の書いていた詩作を眺めていた。

そこには志に燃える松陰の熱い思いが込められていたが、何故か久坂にはモヤモヤとすっきりしない不吉な

予兆と思えて成らなかった・・・・。

巢立つ時（11）

あれ以来自室に籠って一切を遮断してしまった松陰……
久坂は一人小さい小部屋に籠りっきりの師に一抹の不安を感じながら、日々書物を読み耽っていた。

「よう、玄瑞。先生の様子がおかしいと聞いたがどんなじゃ？」

陽気に声を掛けて来たのは高杉晋作である。

「……相変わらずじゃ。元日以来ずっと一人悶々と考え込んでおるようじゃ。」

「ふうむ、先生のことじゃ何か思うところでもあるんだろう。……
……問題毎なぞ起こらんにやいいが。」

軽い口調だが、流石の高杉も心配でならぬのだろう。声に反してその表情に茶化したような笑みはない。

松陰が引き籠ってしまうのは今に始まったことではないが、元日のあの思いつめて冷たい講義堂に佇む姿、
詩歌を戦わせた時と何か思い立った時の危機的な表情。

それら全てが今までの彼とは明らかに異なっており、その焦燥を感じ取れるものであった。

だからこそ、不安なのだ。

吉田松陰という人は・・・・・・・・。

理論を戦わせるより実践する事を好しとする人物であるから、今回も何かしようとしているのではなからうか。

それが、命に関わる事であつても彼の性格からすると恐れず屈せず戦い抜こうとするだろう。

たとえ相手が200余年の泰平を見てきた大物であつたとしても・・・・・・・・。

久坂は、高杉は、そこまで考え付いて大きな溜息を吐く。

「なあ、晋作。僕は今の時勢を先生方程知らん。一度出来うるならば江戸へ出て見たいが……。

一応国暇の申請は受けてあるし。」

「お！江戸か、いいねえ。夷荻もわんさか居るが。まあ中央へ出るにはある意味危険もあるが……
有用な情報も手に入る。いいじゃないか。」

「先生にも一度話してみよう。」

そういつて久坂は何か決意したかの様に目を伏せた。

高杉が帰った後、久坂は松陰の籠っている幽閉室を訪ねた。

「先生。少しだけお話したい事が御座います。」

「・・・・・・・・久坂君か。何かね？」

松陰は声の主を確認すると、スツと襖を少しだけ開いた。

「実は、江戸へ一度上がりたと思ってまして。国暇の許可は貰っております。名目は医学向上ということですが、これを機に国内情勢を探って来ようと思っております。」

「ふむ・・・・・・・・それは良いかもしれませんね。しっかりと学んで来るといい。今この国がどうなっているのか。」

机上では悟れぬ知識をしっかりと吸収して来るのも君の為になろう。」

「有難う御座います。それでは早速整えてまいります。」

そういつて久坂は一礼し、幽閉室を後にした。

翌朝、旅装調え兄の形見である大小を下げ、萩の城下見下ろせる長い山道の先、涙松と呼ばれる地に久坂は居た。

彼は離郷という愁いを帯びた表情は無く、これから臨む未知の世界への期待を帯びた精悍な若者らしい表情を浮かべている。

ただ、見送る大勢の衆の端に立つ若い妻の姿・・・・それだけが彼にとって存在重く、脳裏に焼きつけられるのだが。

今の彼には今後の自身の生涯を左右するかもしれない大事な旅とな

る事は間違いなく、そんな微かな愁いに
留まる事は許されなかったのである。

久坂は、短く暫しの別れを口にしそれきり振り返らずに山道を進んでいくのであった。

— 安政5年1月の事であった — . . .

巢立つ時（12）

山口、防府と山陽道沿いを歩き、芸州から真っ直ぐ伸びる街道を抜けひたすらに江戸を目指す。

目に映る全てが新しく、若い久坂はただ新鮮で活気溢れる景色に魅了されていた。

「やっぱり凄いな。都へ近づく程、人の活気も盛んになる。」

古都へ入り幾日か過ごし、ここで名士とも呼べる人物達と大いに語らう。萩にも多く素晴らしい

人材はあったものの、都は流石に広い。人材の多さもさることながら、見識も多種多様。

割合意見の纏まっていた郷里とは違って思想の違うもの同志で討論を繰り広げたり……。

接待兼ねて悠々議論を交すなど、萩城下では到底考え得ない事ばかり。

久坂もまだ若い。美しい京女に囲まれ遊興と議論を織り交ぜたこの界限で、ふと明るい気分させら

れるのだが、ふいに松陰と一人で待つ新妻の顔を思い浮かべて自制に努めるのであった。

つかの間の休息を得て、また江戸への長い道のを進んで行く。

一・・・休息と議論を重ねながら江戸へ到着したのは萩を出てから3ヶ月以上も経過した頃であつた。

江戸・・・泰平を長く与えた幕府の拠点。全ての政はここが起点であり、日ノ本で一番栄えた武家の都であつた。

「ここが江戸か。流石に大きい街だな。京とは違った角ばった武士の都か。」

久坂は一つ感嘆の溜息を洩らす。

彼自身が憧れる武士が作り出した武の都。

動きしなやかで優雅な京の都も風情があるが、この多少慌しく男気溢れるような武士の世界もまた壮快で良いものである。

「さて、まずは藩邸へ入るかな。その後は・・・」

久坂はフツと軽く笑むと江戸領内にある長州藩藩邸へと足を向けた。藩邸へ入ると懐かしい地方の方言で一杯でまるで一瞬にして郷里へ戻った様な錯覚に陥る。

自身に宛がわれた室へ向かう途中、同僚といえる人々の中に懐かしい人物を見つけると、久坂は親しげな表情でその人物に近寄って言った。

「お久しぶりです、桂さん。」

「お、久坂君じゃないか。来るとは聞いていたが……。」

その人物とは桂小五郎である。何度か松本村へ通う時対面した事がある。

容貌は相変わらず整って言葉動きに無駄な所は無い。

オマケに石高も高い武士の養子である。

もともと彼は藩医・和田家の一子として生まれたが、隣接する桂氏の夫妻に子が居なかったことで何の縁か養子として迎え入れられたのである。

やがて、桂夫妻が早くに亡くなるといち早くその禄を引き継ぎ、桂小五郎として、両家を支えていくのであった。

「しかし、随分のんびりしてきたな？」

苦笑い交じりに桂は呟く。

「はは、何しろ初めて出てきたので。目に映る全てを吸収しながらブラブラして来たら中々時間を食ってしまいましたよ。」

飄々とした態度の久坂に、フフと可笑しそうな顔を見せ桂は一通の手紙を手渡す。

「君がのんびりしているから、郷里の飛脚の方が先に着いてしまったぞ。」

彼の手には見覚えある荒い文字が書かれた封書が握られていた。

激動の風（1）

江戸へ来て早々、久坂にとって喜べぬ話が舞い込んできた。

「先生も無茶をなさる・・・。」

久坂宛で送られてきた郷里の手紙・・・

それを挟んで対座している桂小五郎は苦い顔で呟く。

「ええ、兎も角今は時期尚早と一刻も早く伝えねばなりませんな。」

久坂もまた同じく渋い表情でじつと畳の上に広げられた手紙を見据える。

話題に上った手紙の送り主は二人にはよく見知った人物、吉田松陰である。ここ数ヶ月の間、悶々と思い悩んでいたのであろうか。日ノ本を救う糸口が見出せず切羽詰ったと言わんばかりの悪筆で今こうして訴えてきているのだ。

久坂も桂も彼の派手な行動はよく知っている。

その行動力故か、しばしば藩からお咎め頂戴することもあり、今度の事が大っぴらに表へ出ると今までの罰則の比ではあるまい。

「なあ、久坂君。先生は焦っておられるのだ。一度故郷の同志達に説得を依頼してみては？それから僕等も返書を認めればいい。」

「そうですね。……しかし、先生は無茶をなさる。大砲を供出させ役人を打つなどと……。」

「ああ、下手すりゃ藩が謀反扱いで潰れてしまう。冷静に対処せねば、先生も、門人たる我々も危なかるう。」

吉田松陰の過激な文書に頭を悩ませ考えたが、これといった良策は浮かばず結局桂の言う様に、まず村塾の同志へ向け信書を認める事と成った。

久坂は、高杉晋作をはじめ郷里に残っている同志へ急ぎ書を認めると祈るような気持ちでそれらを送り出した。

一……数ヶ月の時間を要したか、久坂の歎願とも言える手紙は彼の盟友高杉晋作の手元に納まっていた。

「久坂はなんといっとる。」

久坂より少し年長の才人・入江九一が焦ったような声で、まだ手紙を読む高杉に詰め寄る。

他、野村和作兄弟や吉田栄太郎（利麿）らも緊張した面持ちで文字を追う高杉の周囲に座し待機していた。

「いや・・・やはりな。久坂も、桂さんも時期尚早といっとるよ。」

「それは僕等とてよう解つとる。問題は此度の先生の失礼ながら無謀極まりない策をどうお止めするかじゃ。」

「江戸の久坂らに何をせい言うても仕様が無いな。なあ暢夫。久坂は君や僕等に何とかしてくれと言うて来とろう？」

高杉の言葉に、入江・吉田両名が口を挟む。

彼等は手紙の詳細を知らずともおよその内容を察していたのである。江戸という遠方の地へ身を置く二人に今の松陰が止められるわけも無い事は今近くに居る彼等こそ重々承知の事だったのだ。

「・・・・・・・・全く。残留組は損な役回りじゃ・・・・。」

吐き捨てるように行った高杉の台詞は、冷ややかな風の中へ滑り込ん
んでいった。

まだこれから吹き荒れる惨劇に気付く事も無く……………
……………

激動の風（1）（後書き）

この時代、幕府による不平等な対外政策に憤る人々が多く現れましたが、梅田雲浜・頼三樹三郎・・・そして吉田松陰と反対勢力は悉く囚われ拷問や斬首という厳しい処罰を与えられ多くの先駆者達が亡くなりました。所謂、安政の大獄という事件です。

後、その思想を受け継ぎ恩師や同志の志を果たさんと、全国で尊皇攘夷運動が展開されることになります。

若い志士達は、激動の歴史の中でどう戦い生きていくのか・・・大きな節目となる章、頑張って表現して参りたく思います。

しげはる

激動の風（2）

江戸から届いた手紙事件の翌朝・・・

門人・入江杉蔵、野村和作兄弟は、松陰へ計画の断念を歎願する為の書を手に武家階級の獄舎

「野山獄」へ足を運んだ。

あの後、江戸へ経った高杉から久坂と同じ様に師を諫めよとくどくと言われていたのである。

松陰の計画・・・すなわち幕府老中・間部詮勝暗殺計画であり、その為の軍事物資を藩へ依頼すると言う
余りに無謀な策であった。

村塾の主だった門下生、久坂・高杉らは当たり前前の様に難色を示し、彼等にとって良き理解者であった萩藩の

重臣・周布政之助や桂小五郎からも即却下されていた。

しかし、松陰は簡単に思い立った事を忘れる人ではない。

だからこそ、直ぐ様江戸へ萩に散らばる同志達、門下生達に書面を以って暗殺計画を実行すべしと呼びかけ自らも

幾つか歎願書を書き提出したのである。

藩も門人達も動いてくれよう。と、期待をかけていたのだが、どれ

だけ待ってもその期待に沿う返答が反ってこない。

松陰はこれほど一日が長いと思ったことは無い。

彼の意見に同意するという返事が未だに彼の手元に届かない。

苛々と興奮で食事を取る事すら忘れそうになる。

寝る時間すら惜しまれてくる。

時間がなかなか過ぎていかない様な、寧ろ自分だけが停まった時間の中へ置き去りにされたかの様な錯覚さえ

覚えてしまうのだ。

何故こない・・・

私はすべき事を述べているだけだ・・・

久坂くんは？・・・高杉君は・・・？

ああ、皆どうしたというのだ・・・

松陰が迷妄している時、遂に彼が待ち望んだ分厚い書簡が手元に運び込まれた。

封書の裏側には、双璧と称される秀才、久坂玄瑞・高杉晋作・・・
・・・そして、中谷と桂の名が記されている。

獄舎の番から恐る恐る手紙を受け取ると、松陰は直ぐ様それを開封し食い入るように中の活字を追う。

封を開封し、手紙に書かれた綺麗な文字をゆっくり目で追ううち次第に松陰の顔が険しいモノに変わっていくのが解る。

藩は兎も角、自分と共に歩んできた門下生は必ず同意してくれる。彼等には草莽の志がある、と信じていた。

ああ、そうなのか……。

あれ程激論を戦わせ、世情を憂いて来た彼等もやはり恐れてしまったのだ。

そう言って、彼は盛大な溜息を吐いた。

次の瞬間、牢獄の大扉から見慣れた二人連れの姿が浮かび上がったのである。

激動の風（3）

「松陰先生……。僕です。」

消え入りそうな声が静かな牢に小さく響く。

その聞き覚えある声に松陰は苦悩し下げていた頭をなんとか起こすとかすかな笑みを声の主へと向けた。

「ああ、野村君……。入江君も一緒かね。こんな所へわざわざすまないね。」

先ほどまで取り乱していた人物とは思えぬほど穏やかな松陰の表情。その様子に、野村・入江兄弟は安堵の溜息を吐き、格子の前へと更に歩み寄った。

「君たちが来た理由はおよそ検討付くよ。私を説得しに来たんでしよう？」

二人が口を開くより早く松陰が問うてくる。
優しい何時もの口調だが、その彼の表情には微かな哀愁が漂っていた。

「……………先生。僕達は確かにそのつもりできました。けれど、先生が全て間違っている
とは思っておりません。」

野村が悲しげな顔でそう言うと、後ろに控えていた入江が更に言葉を紡ぐ。

「僕等兄弟も正直此度の先生の計画は時期尚早と思います。だから最初は何んとか説得しようと思った
のです……。しかしながら、先生のそのような悲痛の表情を見せられては我々も何かお役に立たねば帰れません。
例え藩命に背く様な禁忌であろうとも……………」

苦しそうな表情、まるで哀願するかのような言葉に流石の松陰も胸を詰まらせた。

二人は彼の無謀とも言える計画を阻止せねばならないというある種の使命感と師の頼みを聞き入れ出来る
限りの協力をしたいという気持ちに挟まれ苦悩していた。しかし、
こうして面会していく内に松陰の揺ぎ

無い決意を肌で感じ、同時にその強固な意志に惹かれ次第にその無

謀な計画へと苦しみながらも傾倒して
いったのである。

「……………二人ともすまないね。無謀な策とは知って
いてもやらねば成らぬのだよ。誰かが
攘夷の火蓋を切らねば何も変わらない、起こらない。私は後に行動
を起こしてくれる若者たちの為に、
日ノ本の為に犠牲と成ってでも変わるきっかけを作らねばならな
いんです。」

「……………先生、僕に何か出来ることがあれば……………」

松陰の決意に耳を傾けていた入江がツツと前に出る。

そんな弟子の姿を見て苦い笑みを洩らしながら松陰は一通の密書
を取り授けた。

「……………これを、京の公卿様に。大原重徳様にお渡
ししてください。」

「公卿様に……………ですか？」

入江・野村は突然貴族の名を出され、目を瞬く。

「そうです。あの方は三条卿と共に反幕派公卿として名高い方です。きっとお力になってくださる筈です。」

松陰は最後の望みと言わんばかりに天を仰ぎそう述べる。

入江は、その言葉を信じ大きく頷くと立ち上がった。

「先生、それでは身支度を整え急ぎ上京致します。」

若い入江の目には強い焰が灯っていた。

松陰はそれをみて眩しそうで満足気な笑みを返すと、

「頼みますよ。……くれぐれも気をつけて。」

と、最後は慈しむ口調で一礼し出て行く彼ら兄弟を見送った。

入江・野村兄弟は、僅かな家財を払い旅費を作りいよいよ支度に取り掛かった。

ただ、不安げな母の為兄である入江は萩へ残る事となり、野村家を継いだ弟が一人旅立つ事となった。

この騒動より少し前、梅田雲浜・頼三樹三郎他、多くの志士達が幕

吏によって捕縛されるという事件が
相次いで起こっていた。

吉田寅次郎松陰・・・・・・・・彼にも徐々にその魔の手が忍び寄ろう
としていた・・・・・・

激動の風（4）

長州萩を出てから野村は一人ひたすらに京の都を目指した。

かつて久坂達が歩いていった街道を・・・・・・・・。。。

睡眠と食事、必要な事意外では休む間すら惜しんでひたにただ敬愛する師の為に進む日々。

2足持って出た草鞋も最後のひとつとなり、足は所々血豆が出来てなんとも痛々しい様である。

（・・・・先生、待っていてください。必ず悲願を達成させてみせます！）

例え、叶わぬ事であったとしても・・・・今は自身に課せられた使命を全うするのみ。野村は疲労し傷つき痛む足を引きずりながら、物凄い速さで上京を果たすのであった。

野村和作が京へ上ってから数ヶ月が過ぎた頃、萩でも一つの騒ぎが起こっていた……。

「全く寅次郎は何を考えとる！無茶をする奴じゃとは思うとったが・
・今回だけは見逃せん！」

「ええ、この度ばかりは松陰先生のお命にも関わる事。事もあるうにお上を敵に回すなど・・・いくらなんでも今事を起こすは時期尚早でございますな。どうお止めすればよいでしょうか？」

周布政之助が捲くし立てる傍で心底困った表情の小田村伊之助が（後の楯取素彦男爵）淡々と言葉を口にする。

「兎も角、藩に知らせなければなるまい。話に寄れば、入江九一の弟・野村和作は既に京へ上がり公卿様の元へと向かって居るとか。一刻も早く寅次郎を・・・、もし幕府に知れてしまえば我藩とて無事では済まん！」

周布は畳の上に座り込み頭を抱えこんで苦々しく言葉を吐き出す。
小田村もまた、苦渋の表情で彼を見守るのであった。

（なんとかして寅次郎達を止めねば……。幕府側に知られる前に！）

二人は拳を握り締め、互いに目で確認を取ると其々にあるべき場所へと歩き去っていったのである。。。。。

話戻って、京の都へ無事到着した野村和作。。。

彼はやっとの思いで都へたどり着くと、遊女芸妓の誘惑もそっちのけで京都藩邸へ転がり込んだ。

散々に旅の疲れを癒す事2日。。

野村は滞在3日目の朝早く、皆が目覚めるよりいち早く起き出し身支度を整えると、朝餉すら取らずに
急ぎ早に御苑へと足を運んだ。
勿論目当ての公卿に会う為である。

御苑付近の目的地へ着くと、野村は松陰の書を手に面会の許しを願った。

公卿・大原邸一。。。。普段なら垣間見ることすら出来ぬ宮中貴族の邸宅であり、並みの藩では
取り次いで貰うにも時間がかかる筈だが。。。。

流石に雄藩。少し待った程度で、貴族の屋敷へ足を踏み入れる事を

許される。野村は緊張した面持ちで、
屋敷の主人を待ちわびた。

「お待たせしましたなあ。麿に何か用ですかな？」

暫く待ったか、ミシミシと少し軋む廊下の木板に気付き顔を上げると低音で品のある声が空から降ってきた。

聞きなれぬ不思議な言葉遣いに一瞬首傾げる野村だったが、現われた人物の装束に息を飲む。

衣冠束帯の装束を纏う貴人。

如何にも都人らしい雅を漂わせるその人こそ、今回の旅の目的ともいえる大原卿その人であった……。

激動の風（5）

従者を連れ、厳かな足取りで黒い装束を纏う貴人が姿を現す。

野村は初めて見る高貴な存在にただ戸惑うだけであった。

そんな状態の彼を支え、正視する力を与えていたのは紛れも無い師・松陰の決死の書簡唯一つ……。

そんな彼の心中を知ってか大原卿はふっと口元を緩めると固くなっている目の前の青年に声をかける。

「……長州藩の方、ご用件伺いましょう？」

卿の言葉に、野村はハッと我に返り急いで懷より預った書を取り出すと、

「申し訳ありません！本日公卿様にと長州藩の吉田松陰寅次郎より書を預っておりました。こちらをご覧くださいませ！！」

大慌てで僅かに顔を俯かせたまま手紙を持つ両の手を伸ばす。

大原卿はそれをまた静かに受け取ると、徐に封を切り真面目な面持ちで目を通し始めた。

野村は誰にも気付かれないようにフウと短い溜息を吐くと、改めて卿の顔色を覗った。

大原卿は手紙を半分以上読んだ辺りだろうか、僅かに怒った様な顔になったり、また泣きそうな

困った様な表情を作ったり・・・・・・・・・・。

そんな卿を見ながら、野村はぼんやりと、

“これは良い評価は期待できないかなあ”

などと、暢気な感想を頭に浮かべたりしていた。

一時程待ったろうか。

大原卿は手紙を仕舞まで読んで、綺麗に折りたたむと一つ溜息を吐いて野村をみた・・・・。

その顔はあまり期待の持てるモノではなく、寧ろ悪い結果を想像さ

せるモノであつた。

「・・・・・・野村殿、確かにお手紙拝見致しました。ただ・・・・・・」

「ただ？」

「・・・・・・」

言葉を反復し問い返すが中々返事は返ってこない。

「・・・・大原卿、僕は貴方の率直なご意見をお伺いしたいのです。仰ってください！お願いいたします」

師の為哀願をする野村の真摯な目に、大原卿は少し顔を俯かせ重い口を開いた。

「野村殿・・・・厩にはまだ時期尚早ではなからうかと思えます。吉田殿は如何なるお考えかは知りまへんが・・・・。これは危険と違いますか？」

（ああ・・・・やっぱりな。久坂さんや高杉さん達の意見と同じだな

あ)

野村は以前久坂玄瑞から松陰の無謀とも言えるこの計画を断念させて欲しいという書を受け取っている。松陰の

計画が無謀としりつつも師を見捨てられずここに要る自分……。

矛盾は承知で師を助けるべく今こうしてこの場に座っているのだ。

今、彼等師弟の頼みの綱とも言える公卿に“時期尚早也”と説かれて、またその決心がグラつく自分がどうにも惨めで申し訳なくてがっくりと頭を垂れるのであった。

「……やはり、貴方もその様に思われますか。」

「申し訳ありません。この件は余りに時勢から外れてます。もう一度冷静になって考えてはどうですか??」

本当に申し訳なさそうに言う大原卿に、いえいえと頭を軽く振りつつもやっぱり居た堪れなくなり、結局日の暮れるより随分前に屋敷を後にするのであった。

激動の風（5）（後書き）

＊＊更新について＊＊

ちと、平日になると更新が翌日に延ばされたり等、ご迷惑おかけするかと思います^^；

出来るだけ定期更新で参りたいのでどうぞ宜しくお願いいたします。

激動の風（6）

長州萩藩・・・・・・・・・・

野村和作が旅立って数ヶ月が経とうとしていた時、この城下は騒然としていた。

「入江・野村兄弟は寅次郎の密命を受けあろう事か京の公卿様の下へ上がったそうじゃないか！」

「なんと恐ろしい事を。あの様な無謀な事・・・万が一にでも幕府朝廷に露見すればそれこそお家の一大事。下手をすればお取つぶしも免れん・・・。」

「ぬう、此処は京の藩邸へ早馬を飛ばしあちらへ飛んだ野村和作を捕縛させるしかありませんな。

早急に手を打たねばなりますまい！」

城内の一室で重臣と思しき男達の会議が行なわれている。

吉田松陰寅次郎は、事ある毎に幕政への批判を訴えタダでさえ役人から白い目で見られている。

先だっては江戸で高名な頼三樹三郎等数名の志士達が捕縛されたばかり。

これ以上騒いでは吉田松陰自身彼等と同じ道を歩む危険は免れまい。

それに・・・彼を今まで匿って来たこの長州藩とて無事では済むまい。

彼が今回やろうとしているのは紛れもない幕府への挑戦なのだから。

「・・・では、ワシは早速藩邸への連絡を付けて来る。」

「お主がそちらへ回るならば私は萩に残った入江を訪ねてこようか。」

一人が重い腰を上げ席を立とうとすると、続いてもう一人も動こうとする。その去っていきこうとする

後姿を見て、ある人物が一つ彼等の背中にポツリと呟く。

「両兄弟は・・・武家身分では無い事がこの際幸いか。松門の師弟が今は集う事出来ぬように
しっかりな・・・。」

今の今まで一言たりとも話に加わらずただ、傍観していた人物の声に静かに頷きながら其々に持ち場へと戻っていった。

「………吉田松陰か。まったく火の玉の様な男じゃな。」

最後まで座していた男はゆっくりと立ち上がるとまた一つ呟いた。今までここに居た重臣達は何れも文官といった風貌であったが、彼の人物だけはそれらとはどこか違っていた。

着物を纏う代わりに厳つい甲冑を着け長尺の刀を黒塗りの鞘に収めている。

立ち上がると天井まで届くかと言う程大柄で、精強な古武士そのものである。

「ああ、こちらに居られましたか、来嶋殿。」

立ち上がって自分も在るべき場所へ帰ろうとした彼は、部屋を出て直ぐの回廊で呼び止められるのであった。

「おお、これは周布殿。私に何か御用ですかな？」

厳つい古武士の風貌と裏腹にこの来嶋と呼ばれた人物随分大人しい物腰をする様だ。

剣も取れるが学術も出来る。何時だったかあの吉田松陰も彼の外観と内に有る実力は認めていたと思いだされる。

周布は少しだけ過去の記憶に思考を廻らせていたが、何時までも用件を言わない自分を訝しがる来嶋に気付き慌てた。

「来嶋殿も寅次郎の此度の一件はご存知と思うが……。」

「ああ、例の砲撃計画かな？無謀では有るが、実に彼らしいとも言えような。」

切羽詰った周布に対し、来嶋はのほほんと応える。

「……！又兵衛殿、そんな暢気な事を……。寅次郎がする無謀で寅の命だけではない、我等や藩の命運も尽きるかもしれんですぞ！？」

「いや、申し訳ない。しかし、師弟として動いたのは入江・野村兄弟だけか。

高杉や久坂等……特に久坂玄瑞、彼は吉田君の妹婿だろう？何故動かなかったのかな。まあ、この暴挙に難なく賛同する程彼等も馬鹿じゃない。動くのは得策ではないと思っただけでしょうな。」

やはりややのんびりした口調で淡々と語る来島又兵衛に、流石の周布も少し脱落してその場に立ち尽くしていた。

激動の風（7）

城内で来嶋又兵衛がのんびり語り周布政之助が喚く中、長州藩内の、重臣達は早馬を一路京へ飛ばしていた。

「野村和作を捕獲せよと至急京都藩邸へ伝えよ！」

「其の方等はこれより入江を捕え岩倉獄へ連行じゃ。」

「吉田松陰寅次郎は野山獄へ……。」

重臣の一人が”連行せよ”と言いかけたが、何かに気付いたのか言葉途途中で止めた。

「……随分慌しい事じゃの。寅次郎が何ぞ罪を犯したか？」

後ろから気配を感じて振り返った重臣の命を遮った人物はこの非常時に似合わぬ淡々と落ち着いた口調である。

途中で止まったままの命令に何事かと近寄ってきた兵長もまた彼を見て直立不動のままに固まってしまった。

「御殿・・・・。」

やっと口にした言葉すら僅かにだか掠れている。

御殿と呼ばれた人物はそれらを気に留める事もなく言葉を続ける。

「おい、質問に答えぬか。寅は今度は何をしたのじゃ。」

少しでも荒げた口調に、それまで固まっていた重臣はハッと我に返り慌てて応答した。

「はっ、実は此度・・・・吉田寅次郎松陰による危険極まりない言動がありました。彼が事及ぶ前に捕え外部の同志との連絡を押さえようと・・・・」

「寅次郎が・・・・？危険な言動とは如何なものぞ。」

「・・・・・・・・・・はっ・・・・・・・・、それが・・・・・・・・あろう事か幕府方の人物を打てと息巻いておりまして、大砲なぞを貸せと言い・・・・・・・・。その上、門人である入江・野村兄弟を使者に仕立て、上京させ公卿様へと密告を・・・・・・・・。」

「なんと・・・・・・・・！寅次郎がその様な無謀な・・・・・・・・。」

「はっ、事が実行されぬにせよ幕府側にこの事が洩れば彼だけではなく我等長州藩そのものが・・・・・・・・下手をすればお取つぶし等も免れますまい・・・・・・・・。」

「・・・・・・・・。」

御殿・・・・・・・・毛利敬親はワナワナ体を震えさせ、絶句しその場に立ち尽くす。

スーッと血の気が引くのがわかる・・・・・・・・。

寅次郎は以前にも突拍子のない事を仕出かしてくれたが、今回はそれに輪をかけている。ここまで過激に出られると彼が恐ろしくなってくる。

「殿、何は兎も角此の俣では双方共倒れに成りかねません。ここは已む終えませぬが、寅次郎を捕縛し外部との

連絡遮断の措置をとる他御座いませぬ。これは藩と寅次郎共に救う唯一の法と思うて居りますれば……何卒御許しを賜りたく存じ上げまする……。」

重臣は悲痛な面持ちで主に頭垂れる。

部下である彼等の哀願に、正に進退窮まった敬親はただ無念を襲に隠して頷くしかなかったのである……。

「寅次郎を野山獄へ引き立てい。入江もじゃ。京へある野村和作は藩邸と連携し何があっても捕捉せよ！」

・ ・ ・ ・ ・ 厳命じゃ！直ちに行動に移し各人成果を上げて来い！

!

声高らかに藩命を宣言すると、藩内は一斉に慌しく動き始める。

敬親は、藩を護る一方で学問の師とも言える松陰を救おうと苦渋の決断を即座に下さねばならぬ事に心底疲れていた。

重い足取りで室へ戻って行く主君を、重臣達はまた何ともいえぬ表情で見送っていた・・・。

激動の風（8）

吉田松陰寅次郎・・・・彼の計画は遂に露見してしまう。

何時もの様に小さな仏間に小さな机と座布団を敷いて何時もの如く書に読みふけていた彼は、

バタバタと外から近づいてくる騒がしい足音に気付くと何事かと気になって意識をそちらへと、集中する。

どうやら大勢のものと思しき足音と怒声は村塾から母屋玄関の前でピタと止み、続いて指揮官と思える人物の声が鳴り響く。

「我等は藩命により参ったものである。家主何処に！」

家中に広がる怒声に、ガラガラと玄関の引く音が聞こえる。

「お迎え遅くになり申し訳御座いませぬ。」

驚きに掠れてはいるが、しっかりと応答する声・・・・松陰の母・滝であった。

「それで・・・この様なあばら家にお役人様が何ぞ御用でありましようか？」

落ち着きを取り戻し凜とした口調で立つ母親。

その姿を眩しく見守った後、役人は文書を開き大きな声で言う。

「此度、吉田松陰寅次郎に不穏な気配有りとの情報が入ってな、直ちに捕えよとの通告を頂いたのだ。」

「・・・・・・・・そんな！」

気丈に振舞おうとする母親であったが、突然我子を捕縛と聞かされては動揺するなど言うのは些か無理な事である。

そんな彼女の事などお構い無しに役人は話を続ける。

「寅次郎は此処にいるのであろう？これは御殿の厳命である。如何なる事があっても此れを退ける事は許されぬ。
邪魔立てするものは同じく反逆の心有りとみて 子息共々引っ捕えるぞ！」

役人が怒声を放ち母親に詰め寄ろうとした次の瞬間、一度は閉ざされた玄関の戸がカラリと再び開いた。

「お話は聞かせていただきました。然しながら私は逃げも隠れも致しませぬ故、邪魔立てなぞ全く危惧するに及びませぬぞ。命惜しくてこの様な覚悟は出来ませぬ。さて、それではお縄頂戴致しますかな。」

何時もと変わらぬ姿で、どこか笑みすら浮かべて松陰は姿を現した。

「それは良い覚悟だな。何、手荒にはせぬよ。寧ろその毅然とした態度、見上げたものだ。此度の事、御殿の苦渋の命であること……ご理解いただければ良いが……。」

「存じております。さあ、何処へなりとお連れくださいませ。」

静かに佇み全く抵抗すら見せず連行されていく松陰を母は騒ぎに駆けつけた父親と共にただ悲しく見守る他無かった。家屋の僅かに空いた戸から恐る恐る顔を覗かせているお文もまた、連れて行かれる最愛の兄の後ろ姿を瞼に焼付けるのであった……。

同じ時、入江九一は少しだけ抵抗の後を見せたが最後は師と同じく黙って藩命に従い捕縛される。

一方京都で大原卿との対談を終えた野村和作、彼は藩邸まであと僅かという所で戻るべき場所が騒然としているのに気付き、手前の屋敷の壁へ背を付け様子を窺った。

「行け！野村和作は藩を潰すやも知れぬ危険因子である。吉田松陰の謀略を組む人物だ。藩命により如何なる事があっても捕えよ！」

此れを聞いた野村はサツと顔を蒼くした。

（何故だ・・・もしや先生の計画が藩に筒抜けに？このまま僕が反抗や逃走でもすればもしかしたら先生達にまで迷惑が・・・）

自分が裁きにかけられるのは痛くも無い。だが、兄弟や家族・・・何より大事な師がその罰を共に味わうのは捨て置けぬ事。

野村は暫く考え俯いていたが、やがて意を決したか藩邸へと自ら足を運んでいった。

要するに自首である。

此れにより藩は怪しいと思える入江兄弟・吉田松陰の捕縛に成功し、ホッと胸を撫で下ろした。

この知らせを江戸の久坂達が受け取り、妹婿として危ぶまれた彼に帰国令が下るのは数日程後のことである・・・。

激動の風（9）

暗殺計画騒動から一夜明け城下はようやく静けさを取り戻したかのようには思えた。

指月城内・・・・・・・・

先日の事件を重く受け止めた藩主は、重臣連を召集し善後策を議論しあうのであった。

「吉田松陰他関わった者は悉く捕縛した。しかしながら、まだまだ油断は出来ませぬ、あれ程大事な計画・・・彼等3名だけで成し得ようか？」

「む・・・確かに寅次郎には入江・野村兄弟以外にも優れた弟子達が居る。奴等が全く動かないのも疑問じゃな。別の密命を受けていたら・・・?!」

「これ以上騒ぎを大きくして幕府側に知られでもすれば取り返しつかぬ事になろうぞ。ここは、危険と思しき者達をバラバラに帰藩させるのが妥当では？下手に急かせば

アレらも反抗するやもしれんしな。」

「しかし、無茶苦茶な計画は兎も角あの者たちは将来我藩を支える有望な人材。ここで敢て皆罪を緩く
とって恩義を掛けた方が宜しいのでは？」

藩城内で激しい議論が闘わされている。

そんな中、周布と来嶋は一言も発せずただ黙って彼等重臣の討論の様子を傍観していた。

一萩城下・・・平安古の路地。

ここを先の騒ぎにも関わらず一人、大楽源太郎は刀を佩いてのんびり歩いていた。

「全く・・・。昨日は騒ぎのお陰で落ち着いて書物を読むことも儘ならなかったな。」

そう呟いて今だ議論が繰り広げられている高い城を見上げた。

大楽は先日飛脚から受け取った一枚の手紙を懷から取り出すと、送り主の署名を目で追うのであった。

（―久坂君、君の師は遂に囚われの身となったぞ。同志もな・・・。

君にも何れ何らかの沙汰が下ろう。
その時君はどうするかね……………。」

遠く東の地へ身を置く友へ心の中で静かに話しかける。

当然返答は無いが、相手からの答えが聞こえた可の様にフツと苦い
笑みを浮かべて彼はまたゆっくりと

何処へとも無く歩く。

（……吉田松陰はこの位で萎える男ではないだろうが……。こ
れからどうしたものかな。此度の事は
きつと藩内だけでは片付かぬ問題となろう。時代の流れは大きく動
くな。）

「さて、私もそろそろ国暇でも取ろうかな。そろそろ京へ上っても
良い時期だろう……………」

両腕を大きく天へ伸ばし、誰へとも無く力強く空へ向け宣言すると
相棒の刀を軽く叩いて今度は少し早い
歩調で歩き出すのであった。

一方、遠く離れた江戸では松陰捕わるの一報を耳にした松門門人達が藩邸で大いに討論をしていた。

久坂玄瑞、高杉晋作、伊藤俊輔他、松門では無いが桂小五郎など早々たる面々が顔を合わせ、この度の騒動を沈痛な面持ちで受け止めていた。

「皆が危惧した通りになったな・・・。」

「ああ、しかし先生も・・・入江達も無茶をするのお」

「ど、どうでしょう・・・先生達はどうなるんですか!？」

「まあ、落ち着きたまえ。藩として功績ある彼を簡単に罰したりはしないだろう。」

上から久坂、高杉、伊藤、桂という順で会話がなされている。

時々、心配を隠すように茶化した口調で語る高杉以外は皆一様に暗い表情で重苦しい言葉しか出てこない。

こんな場所で茶化した口調の高杉に対して誰一人食って掛かる事が無いのは、彼の性格をよく知り抜いているから

であろうか・・・高杉もまた口調と裏腹に酷く気落ちし師を按ずる気持ちで一杯なのは近い久坂が一番よく解る事である。

「晋作……。君も無茶をするなよ。」

一言だけ飄々と構える高杉へ向け呟くと、久坂の言わんとする事を悟った彼はバツの悪そうな顔をして、少し俯き様に

「ああ。」

と小声で返事を返すのであった。

激動の風（10）

長州萩藩・・・・・・・・

薄暗い牢獄の中、松陰は一人正座し瞑想している。

外はすっかり闇に包まれているようだ。何一つ物音なく辺りは静まり返り自分ひとりが

取り残された何ともいえぬ気分である。

（そういえば・・・また私はここに居るのだな。世を憂えば枷を与えられる。江戸でも

幾多数多の志士が囚われ命を落としていると聞くが・・・・。）

フウッと重い溜息を吐くと暗い格子から覗く夜空に目を向ける。

黒で覆われた空の遙か向こうには多くの知人や同志らがいるだろう。

彼等もまたこの闇をどんな思いで眺めているのだろうか・・・・。

松陰はぼんやりと幾人かの顔を思い浮かべながら、傍らに置かれた木箱へと手を伸ばした。

その木箱は筆硯など、必要な筆記具一式が整えられている。

その中に丁寧に畳まれている一通の手紙を取り出すと、小さな机上に広げ備え付けてある

小さな蠟燭の光を照らし読み直す。

送り主は江戸から数ヶ月前に送られてきたもので、彼にとって愛す

べき弟子達によって
認められたものであった。

（久坂君、中谷君、高杉君、桂君．．．皆の言うとおりになっ
てしまいましたね。しかしながら、

私は死を恐れて志を貫く事は難しいと思います。恐らく私はこれか
らこの牢獄を出て江戸へ送られる
でしょう、そしてもうここへは帰れぬやもしれない。

ですが、私は最後まで志だけを守ろうと思います。身よりもすべき
事を重んじたい。

君達同志にはその決意だけでも伝えたいと思い．．．．．）

江戸からの手紙を傍らに畳み、松陰は紙と筆を手にとると硯の僅か
な墨を頼りに思うまま筆を走らせた。

愛弟子達へ自身の揺ぎ無い決意を．．．

その彼の思いは今薄暗い牢獄の中、小さな明かりと共に煌煌と輝い
ていた。

それから幾日か後．．．．．一見鎮火したかのように思えた今回
の事件は、予想すらし得ぬ新たな
展開を迎えていた。

何とか萩藩だけで決着をと臨んだ藩主・毛利敬親の思いも虚しく、
遂に事は幕府へと露見するのであった。

長州藩・指月城・・・・・・・・

「なんと！では、寅次郎を江戸へ出せと・・・！？」

「はっ、此度の事如何なる筋からか洩れたので御座いましょう。唯でさえ志士狩りに躍起になっている幕府。

寅次郎の一見が如何に伝わったかまでは存じませぬが・・・、あちらにとって捨て置きぬ事であったのでしよう。」

「ええ、後日江戸の伝馬町で申し開きせよとの事。」

「・・・・・・・・。よもやアレを斬るのではあるまいな。」

藩主は幾分青ざめた顔で重臣達の報告を耳にする。

嘗ての江戸幕府ではない。井伊大老へと変わってからの彼等は反乱分子と判断

すれば、過激な刑罰を科していく様に変貌した。

寅次郎の様な未遂事件とはいえ、今までの様に寛大には行くまい。誰もがそう思っていた。

激動の風（11）

吉田松陰投獄から少し時を遡る・・・

江戸の久坂玄瑞は、吉田松陰の計画露見から少し経ったある日、突然の帰国藩命に見舞われていた。

「・・・これは藩よりの厳命じゃ。久坂玄瑞殿、直ちに支度を整え一両日中に帰国の途に就きめされい。」

「・・・・・・御命とあらば従いましょう。」

納得出来ぬ事であっても命は命。従わねば大罪。主命は当時武士達にとって何に替えても守らねばならぬ絶対の約束であり、武士としての一種の誇りの様なものでもあるのだった。

洩々承知を唱えつつ、黙々と久坂は身支度を整え始める。

書類を整理し始めた所で、ふと郷里の妻から送られてきた手紙が目にと留まった。

久坂は徐にそれを開くと、既に読み終えた手紙の字を追いつめるの

である。

（兄・寅次郎が野山獄へ送られる事となり、私には何も出来ずただ彼の辛苦を見守るばかり。檀那樣に

ご心配おかけするは心苦しゅう御座いますが、ただ一報認めんと・
・・・・）

震える文字で綴られた一つの手紙。

妻・お文は吉田松陰寅次郎の可愛い妹であり彼女自身にとっても同じく敬愛する兄である。そんな兄・寅次郎が自分の目の前からまさに獄へと導かれるその姿はどれ程悲しいものであったか。

普段から泣き言一つ我侬一つもらさぬ気丈な若妻を想うと早く帰らねばとも思える。

そして、自分にとっても尊敬する義兄・松陰の無事も確かめたい。二つの思いが相互に脳裏に浮かぶと、自然彼の手足は何時も以上に早く動くのである。

手紙を手早く畳みその一つだけを懐の手帳に収めると、纏めた小さな行李を提げ旅装を整える。ほとんど旅には

必要最小限なものしか持ってきていなかったため、来た身軽なままで彼は足早に藩邸を発ち、一路西へと下るのであった。

来る時も通ってきた街道。それらが皆今は違う風景に見える。

ゆっくりと物見がてらに歩いた時にはこのゆったりした景色が愛し

くさえ思えたものだが
今となつては・・・・一刻も帰郷せねばという焦燥感からか、
多少の小憎らしささえ浮かんでしまう有様。

華やいだ京の都を過ぎる際に、幾人もの美しい芸妓達の自身に向けて
熱い視線も感じられたがこの時ばかりは
何一つ感じる所はなく寧ろ絡みつく糸の様で視線から逃げる様に立
ち去るのであった。

二月、三月と数ヶ月の経過と共に、次第に懐かしい緑が眼前に広がる
ようになった来た。
蒼かった空も緑の木々や山々も、季節の冷たい風で色がくすんでい
る様に思える。

以前自分が出て行った時とは変わってしまったのだろうか。

幾らか感傷に思い馳せながら、懐かしい萩の山道をゆっくり北上し
義兄や妻の待つ

村へと急ぐのであった。

激動の風（12）

江戸から萩までの気の遠くなるような長い道のり……

遂に久坂玄瑞は故郷・長州萩藩へたどり着いていた。

長く留守にしていた様な気が、町並みや行き交う人々の様子に特別変化は見られず以前出て行った頃と変わらぬ空気が緩やかに流れていく。

（ここは何も変わっちゃないな。本当に……この空気がこのままあそこまで続いていれば良いのじゃが……）

ふうっと一つ溜息吐いて久坂は萩城下から東へ離れた松本村を目指すのであった。

やがて、田畑あぜ道を過ぎると懐かしい家が見えてくる。その手前にはまだ昔のまま小さくてすこし古ぼけた看板がかけられ

ている講義堂が。久坂は一瞬目の前に現われた懐かしい風景に心暖まるのを覚えたが、自分が何の為にこうして此処へ再び戻ってきたのかを直ぐ思い出し、表情を厳しいものに変えて玄関へと歩いていった。

久坂は玄関を軽く叩くと、ガラガラと戸を開け中へと入る。草履を脱ごうと掃除の行き届いた床へ腰を下ろし、荷を降ろした所で奥のほうからパタパタと軽い音が規則的に聞こえてくる。

「檀那樣！」

若い女の声が背後から聞こえる。

僅かに体を後ろへ向け振り向く形を取ると、其処には変わらぬ若妻の姿が。

何時もの様に家事の最中だったのか袖を纏める為襷をかけている。

「申し訳ありません。ちゃんとお迎えもせず……。」

「いや、それより長く留守を任せて悪かったね。」

申し訳ないという気持ちをお互いが口にする。本当にこうして対面するのは久しぶりの事だ。松陰の件ではこの人も随分胸を痛めたらうに自分に悟られまいと気丈に振舞って居るのか……。そう考えると微かに痛みが走る。

「文、先生は・・・・・・・・。」

少しの沈黙の後、久坂は文に切り出した。今聞きたい事、そして自分が帰藩する要因。詳細を把握していても、
敢てその直ぐ傍にあった筈の人声で次第を告げて欲しい。そんな夫の意を賢い妻は直ぐ察するのであった。

「檀那樣、兎も角お上がり下さいませ。お茶をお持ちしますからそれからお話致しましょう。」

それも最もだなと思い、久坂はお文の言う通りに居間へと導かれるままについて行った。

案内すると文はお茶を煎れると言い残し、台番所へと足早に姿を消した。

一人居間に取り残される形と成った久坂は、この懐かしい空気の中に敬愛する松陰が居ない事が無性に辛く、
また寂しく思えて仕様が無かった。

「お待たせいたしました。」

か細い声と共に、再び文が現われる。
思わず声のする方へ顔を向け、改めて久しぶりに見る妻の姿を見つめる。

自分が出て行った時は、この女性はあるべきを残し女というよりも少女といった方が適切な位であった。

しかし、今日の前にいるのは少女の名残はあっても凜とした気位高い武家の妻そのものである。おそらく、自分の

留守中にあった兄・松陰の事件など様々な労苦によってかつての幼い少女の心は耐え忍ぶ事を覚え、表情仕草諸共に

大人のそれへと半ば強制的にすりかえられてしまったのであろう。

「すまない……苦勞かけた様だね。」

久坂は気がつけばそう呟いていた。

松陰のことでは自分も相当痛みを負ったと思うが、身近に居て辛い現実を直視してきた家族達の痛みはきつと

それ以上であろう。だからこそ、それが真っ先に口から出てしまったのである。お文は、ポツリと呟く夫の

悲しげな姿をただじっと見つめその場に佇むのであった。

暫く二人は口を閉ざし、静かに痛みを共有しあう。

やがて、長い静けさを打ち破ったのはお文の一言だった……。

「檀那樣、私……兄が投獄されて以来本当に久しいのですが夢をみますの。」

普段の軽快な彼女からはおよそ考え難い暗くシンとした声。

「夢？　もしか先生のかね？」

「ええ、いつもの様に優しく笑ってくださって。昔に還ったかのような懐かしくて暖かい夢なのですが。どうしてか悲しいと思ってしまうんです。母上にもお話したら、あちらも同じ様に兄を夢に見ると。」

「……義母上も？　お前がそう言う話を僕にするのは珍しいな。先生が何か訴えちよるのかな。」

「そう……かもしれませぬ。兄様、どうなさってお出でかしら。心配ですわ……本当に。」

「明日、僕が会いに行ってみよう。会えればなんじゃが……。」

彼の姿をみれば全て解る筈だ。

久坂は妻を励ますように努めて明るい口調で言い聞かせ、一つの決心をするのであった。

激動の風（13）

明くる日、久坂は一人きりで松陰の投獄されている野山獄を訪れていた。

「先生・・・松陰先生、玄瑞であります。」

鉄格子越しに師・松陰にそっと語りかける。

すると、薄暗く狭い格子の中で細い体を僅かに動かし声に近づく影があった。

久坂玄瑞の義兄・吉田松陰寅次郎その人である。

「ああ、実甫。君が帰って来ている事は人づてに聞いてましたよ。よく無事で・・・。僕はこの通り計画にも失敗し、家族や入江兄弟、幾多数多の人々を巻き込んでしまいました。獄にあるのも今は已むなしと思ってますよ。」

疲れた声で松陰はゆっくり話すが、その口調は少し前の荒々しい彼のそれとは異なって、塾生が

敬い慕った優しいものであった。

久坂はこの声を聞いて心配する反面、やっと元の“先生”が戻ってきたのだなと少しだけ嬉しく思えた。

しかし、喜んでもらえない。あの計画には松陰から助けて欲しいとの声があった。

でも、自分達は時期尚早と訴え結果として彼を一時的に遠ざけてしまった……。

その負い目は今もまだしつかりと残っている。

「先生、先の一件については申し訳ありませんでした。僕等もできる限り先生のお力添えをしたい、

しかしながら此度の事は時期が早いと思い……仲間達と相談した結果あの様に先生をまるで

裏切るかのような事に……。」

久坂は苦痛の表情を浮かべながら、ポツリポツリと掠れた声で言葉を紡いだ。

「実甫。もう已めましょう。計画が断念されたのはもはや天命。今はその時ではないという天の声

だったのでしょうか。私は本当の所天命というものは余り信じていない方なのですが、今回の事はさすがにそれと思わざる得ない。」

「先生……。」

「実甫よ。私はね、そう長くは生きれまいと思っている。今回の事では無いが、言論が危うしと幕府方で囁かれているとも聞いた。近いうち江戸へ呼ばれるだろう。」

「え．．．！」

「ああ、これから私に如何なる事があるかと君はひたすらに君のやり方でこの国を変え守っていつて欲しい。
私がたとえその時居なくても君達は前進するのだ。」

「．．．．．。」

もはや久坂に言葉は無かった。ただ項垂れて何度も頷くばかりである。

松陰の悲痛な言葉に彼は目の奥がジワリジワリと熱くなるのを覚えた。

（まるで死期を悟った人間のようなだ．．．。この人はもはや命も時間も国家に捧げているのだ。その為の犠牲になる事も厭わぬ程に．．．．．）

今の松陰は正に長州人の粋を超え、日本の草莽志士そのものであつ

た。久坂は威厳ある姿で正座する
師の姿を眼に焼き付けるのである。

その翌日、ついに松陰に江戸送還命令が下された。

吉田松陰寅次郎、国家転覆を企て民衆扇動を図った疑い……

この様になんともはつきりせぬ曖昧な容疑をかけられ、家族や知人、
門弟らが総出で見守る中江戸行きの
小さく小汚い駕籠で長く辛い旅に出るのだった。

涙松の別れがこの様な形で再び彼に訪れようとは誰もが予期せぬこ
とであった……。

激動の風（14）

松陰が江戸へ送還されてから何ヶ月経ったろうか……

久坂は萩の東に位置する松本村・杉家に居た。

吉田松陰の取調べが江戸の伝馬町獄で行われる中、一族や門下生の内、彼と思想近しい者達に対する

嫌疑の声も少なからず起こっていた。

藩は、この動きに対し松陰の思想を色濃く受け継いでいると思われる杉家で彼の義弟となった

久坂玄瑞に目を付けた。

彼を追って過激な行動に出ぬよう、周りの同志を扇動させぬようにと久坂に対し、自宅謹慎を命じたのである。

「檀那樣・・・寅兄様は大丈夫なんでしょうか。」

お文は不安を滲ませた表情で一室に籠っている夫に訊ねる。

「それは僕にもわからんが・・・先生ならば大丈夫じゃと信じちやる。お前も余り思いつめるな、もう遅いから休みなさい。」

久坂も正直松陰が無事この萩へ戻ってこれるのか不安だったが、今

はそれを考えなくなかった。

目の前の妻は松陰の実妹に当たり、彼を大層慕っている。

彼女にとって胸中にある不安を告げ悲しませるのは好ましくない。自分だって信じたくは無い・・・・・・・・松陰が処せられるかもしれないという事は・・・・。

だから今は無理やりにでも安心させる様な言葉を吐くしかなかったのである。

（先生が遠い江戸の地で苦しんで居られるのに、僕は・・・・・・・・）

ぎゅつと血が出そうなほど唇を噛みしめ、久坂は外の月を睨んだ。時に脱藩という事が頭に浮かぶが、残される家族を見ると中々踏み切れない。

志士となる人間が小事に拘る事は愚かと言えようが、彼にはやはり覚悟が定まらぬのであった。

その頃、伝馬町牢獄に押し込められている吉田松陰はお取調べも一通り済み再び獄舎に入れられていた。

数日前までここへ訪れては衣類や紙筆を世話していた

高杉晋作も今は藩命で萩へ帰ってしまった。

唯一の支えも無くなりいよいよ彼も自らの命運を悟ったのか、徐に筆硯と紙を取り出すと、硬い床の上に
きちんと正座し小さな机に広げた紙に筆を走らせる。

それこそ、松陰最後の筆記といえる留魂録となるのである。

師として、兄として、子として、一体自分はどれだけの物を残してきたのだろうか。

今後活躍するであろう弟子たちへ何を残していこうか・・・。

様々な人々の顔を脳裏に描き、その晩彼は何かに取り憑かれたかのように作業に取り掛かった。

数日経過すると、それは立派な書物の様に厚みを帯びており、面に走り書きした留魂録の文字も生きてくる。

松陰が納得して筆を休め姿勢を僅かに崩した所で、獄舎に声がかかった。

「吉田松陰寅次郎、お主の処遇が決まったそうじゃ。出よ、判決が下される。」

役人の下へ引き出され、松陰はいたって平静を装い言葉を待つ。

「長州藩士・吉田松陰寅次郎、そなたはあろうことか間部様暗殺を企てた。結果として事に至らなかったが、

これ罪は非常に重きものである。よってそなたに極刑を命じる。明日、斬首とし刑場に引き立てよ。」

幕府役人達と共に控えていた長州藩士は思わず顔を上げる。

暗殺を企てたとて、それは全く実行されていない。彼の言動は確かに危うさあるがそれだけで斬首とは・・・。

例え命助からずとも切腹はさせてもらえろと思っただけに、その衝撃は大きい。井伊直弼の尊皇志士弾圧の激しさはこれ程のものだったか……と同行の藩士はがっくり肩を落とした。

そんな中、松陰は顔色も変えず淡々とした面持ちで、一言「承知仕りました」とだけ述べると役人達に其々一礼をして番人とともに獄舎へ戻っていった。

その夜、彼は今まで慈しみ理解し常に傍で支え続けてくれた両親へ最後の句を一つ認めるのである。

一親思ふ　ここにまさる　親ごころ　けふの音づれ　何ときくらん一

松陰は自身が案ずる家族への気持ちより更に強い想いで自分を思ってくれる父母へこれから降りかかる出来事をどう彼等が受け止めるのか……そう思うと胸が張り裂けんばかりに痛んだ。

そして、最後の最後、見送りに付き添ってきた弟子達、可愛い妹を娶り義弟となった愛すべき義弟・久坂玄瑞や
時が許すまで傍で励まし続けた高杉晋作への最期の句を残すのである……。

一身はたとへ　武蔵の野辺に　朽ちぬとも　留め置かまし　大和魂一

自分の魂はこの地で明日にも消えようとしている、しかしながら今まで大事に抱え守って来た志は不滅のものとしてこの国で生き続けるのだ。その心を同じくする久坂始め多くの秀才達によって……。

松陰は書き上げて大事に封に納めると、此処でひと段落という様に大きな溜息を吐いた。

やるべき事はした、訴える事は皆言い、そして伝えた。

人生に悔い無しとはやはりいい難い所もあるが、志を思いを誰かが引き継いでくれるのならそれで良しとも思う。

あとは、もう眠りについて天より見守ろう……。

そう思い至って松陰は疲れたのか目を閉じるのであった。

翌朝、松陰は遂に獄舎から刑場へ引き立てられた。

刑場へ向かう際もそしてその瞬間までも……彼は薄汚れた白い着物を着ていたが凜とした姿で最期の時に望むのであった。

そうして、彼の細い首は暗い土穴の中へ引き込まれるかのように消えていくのである。

後に、彼等志士の弾圧が行われ無念の死と悲劇を引き起こしたこの事件は「安政の大獄」と呼ばれ、伝えられて

いくのであった。・・・・・。

上洛論戦（1）

吉田松陰の死より久坂玄瑞は変わる……。

死の一報を届く事になるその日、久坂は妻と共に縁台に座り庭の景色をぼんやり眺めていた。

（松陰先生はどうなったろうか……。まだ厳しい取調べをされとるんじゃないか）

彼が伝馬獄へ送られてから1日経つのがこれ程遅く感じるとは……。

ふう、と小さく溜息吐いてまた庭の景色に目を遣る。そこで、久坂は小さな気配を感じた。

「檀那樣……？」

小さな気配は妻のものであった。お文は心配そうな表情を久坂に向けている。

おそらく彼女も兄・松陰の事を考えていたのだろう。

夫たる自分の苦痛の表情を垣間見てその不安は僅かながら高まったのであろう。

少女ともとれる細くて小さな肩が震えているのが見て取れる。
久坂はその妻の姿見て、不甲斐ない自身を恥じた。

「文、不安にさせてすまなかった。きっと先生は大丈夫じゃから・
・・・。」

そう言って、文を慰める様に彼女の肩に手を置いた。

庭先の木の葉が冷たい風で1枚、また1枚と乾いた空に舞っていた・
・・・。

翌朝、早くに目覚め何時も通り書斎に籠っていた久坂は、聞き御覚えのある声にハッとして立ち上がると、
庭を歩いて玄関先へ向かった。

「おお、玄瑞！此れを見てみい！」

其処に居たのは、帰藩したばかりの高杉晋作。

確か、先日実家へ戻ったと聞いたばかりだった。肩で息をしながら自分に一通の書簡を出す盟友。

その手にあった手紙を早速受け取ると、カサカサと音を立てながら開いていく。

「・・・・・・これは・・・・・・！」

暫く手紙の文字を追うように黙々読んでいた久坂の表情が固くなり、信じ難いと言わんばかりの声を上げる。

傍に立ってその様子を見ていた高杉は同じ様に苦痛の表情を浮かべ静かに頷くのであった。

「・・・僕が江戸からここへ戻った日にな。人づてに先生が伝馬獄で処されたと聞いた。・・・・・・・・入江らも

その内許されて出てこれるじゃろうが・・・先生だけは・・・」

「そんな・・・・・・・・、斬首だと？先生は切腹すら許されなんだか・・・！」

久坂は手紙をしわくちやに成る程握り締めた。

「それでな・・・あと、これはご遺族にも読ませちゃってくれ。辞世の句という奴じゃ。僕や他な塾生はまた後日

集まって聞かせてもらう。先にご両親や妹御らに・・・・。」

そういうと高杉は久坂の肩をポンと慰めるように叩き、振り返る事無く立ち去っていったのである。

残された久坂は、彼の後姿を放心した様に見つめていたが、やがて重い足を引きずる様に再び家屋へと歩いていった。

「あ、檀那樣。如何なさいました？高杉様がいらしたの？……
・檀那樣？」

書齋に戻ってみると、妻が何時もの様に掃除叩きを手に立っていた。

「……ん、ああ。なあ、お文……皆を広間に呼んでくれんか？
一つ話したい事が出来た。」

「え……？は、はい。今すぐに……。」

疲れた声で久坂が頼むと、妻は僅かに訝しんだが直ぐ頷き部屋を出て行った。

パタパタと妻の軽い足音が遠くなると、久坂は深く長い溜息を吐いて柱にズルズルと縋り滑り落ちてしまった。

暫く部屋の中で当ても無く視線ばかりを泳がせていると、再び小さな足音が近づいてくるのが解る。

「檀那樣、皆呼んで参りましたよ。広間へいらしてくださいな。」

「ああ、すまないね。直ぐ行こう。」

妻の声に居住まいを正し、相変わらず力の無い声で返事をする久坂は重い腰を上げて広間へ続く廊下を歩いていくのであった。

上洛論戦（2）

一室に杉夫妻・そしてお文が静かに座して彼を待っていた。

「お待たせして申し訳ありません。実は高杉殿より急な一報が届きまして・・・」

久坂は努めて平静を保ちながら言葉を紡ぐ。

「高杉殿より・・・？ よもや寅次郎の身に何かあったんじゃ・・・」

「そうよ、寅さんについて何か情報は得られないのかしら・・・？」

杉の夫婦は我子の身を案じるがあまり顔色蒼くして身震いしている。隣に控えめに佇む三女・お文はそんな父母を必死に慰め落ち着かせようと努めるばかり。

時折夫をちらりと顧みては寂しそうな視線を送るのであった。

「・・・彼が運んできた情報は、まさに義兄・寅次郎松陰の事。お二人とも御気を強く持ってお聞き下さい。」

久坂は深く重い溜息を吐いて震える声でぼつりぼつり言葉を発した。

「・・・一義兄が、伝馬町獄で遂に処されたとの事。ご遺体については役人の

改めが済むまで返して貰えぬ・・・と・・・」

高杉より受け取った手紙をぐしゃぐしゃに成る程強く握り締め、語尾は涙交じりの声となり最後まで言葉を
つむぐ事が出来なかった。

手紙で涙の落ちる顔を隠すように久坂は唇を噛締め声を殺して泣いていた。

「そ・・・んな・・・馬鹿な・・・何故じゃ、これではまるで罪人扱いじゃないか。公正な調べもろくに
行わず言葉で戦うものを力で処するなぞ・・・！あって良いものか
！！」

「寅兄様・・・兄様が何をしたというの！嗚呼・・・！」

松陰を何時如何なる時も信じ支えてきた彼等にとってこの無情の審判は余りに辛いものとなった。

何とか辞世の句はちゃんとした言葉で伝えたい……………

久坂は涙で滲む目を袖で強く拭うと、一言一言嚙締めながら呟く。

「…………親思ふ　ここにまさる　親ごころ　けふの音づれ　何と
きくらん…………これは義兄・松陰からあなた方へ

…………と、詠われたものです。先生は獄中で死を覚悟されこの詩を、
留魂録なる書を必死で執筆なさったのでしょう。

…………一身はたとへ　武蔵の野辺に　朽ちぬとも　留め置かまし
大和魂…………これが義兄…………先生の最期の句です。

あの方の強い志を僕如き書生が継げるかは解りませんが……………

┐

言葉を止めて僅かに視線を上げると、今自分が言った二つの句を必
死に覚えようと何度も口ずさむ悲しい家族の姿が映る。

嗚咽を洩らしながらも最愛の我子の言葉、兄の言葉を必死になって
記憶に焼付けようとするその様が何とも言えぬ哀愁を
帯びて居た堪れないのである。

久坂は頬を伝う涙をそのままに、闇に隠されてしまった外の景色を
ぼんやりと見つめていた。

・ ・ ・

翌朝、重い瞼を擦りこじ開けると、視界に見慣れた天井が移る。

（結局、僕は何もしちゃ居らんのじゃな……。先生の遺志を継いで行きたい。その為に惜しむ命ではない。）

（しかし、今何の力も無い僕に何が出来ようか……。・・・）

希望を失いかけた昨晚、すっかり泣きはらした日の朝は目が腫れぼったくて寝起きは最低なもの。

久坂は近頃付くことの多い溜息をまた一つ吐くと、上体をゆるりと起こし傍に置いてある真新しい着物の袖に手を通すのであった。

上洛論戦（2）（後書き）

本文中で、おや？と思う所があるかと思います。

現代社会に行き、近代欧米的な思想を乗せた私たちには解りにくい封建体制家における「地域」と「国」の捉え方が所々見られる明治以前の体制。

その中でも「激動の風」にあった吉田松陰寅次郎先生の行動と当時の常識、法がいかなものであったか、代表的な所から1点ご紹介します。

▼脱藩とは厳しい罪

藩士はけいこ切手という外出許可証をもらってはじめて他藩などにかけることが出来る。証書は1ヶ月毎に更新しなければならず、期限を過ぎたものに関しては”揚がり切手”といい無効となるのである。そんな無効となった揚がり切手を持ち他国へ外出するとこれが脱藩（国抜け）とみなされるのである。脱藩の罪は非常に重く、軽くても藩士の資格を取り上げられてしまい、浪人身分となるのである。通常藩士が脱藩すると、すぐさま追っ手が仕向けられ、強制的に国に戻され刑罰を与えられる。松陰の場合、友人・来原良蔵らが上役を説得してなんとか追ってを出す事をやめさせたのだが、藩邸に大きな波紋を投げかける事件となった。

上洛論戦（3）

悲しみに暮れた安政の大獄。

多くの尊き命が散っていく日々、遺された者たちの悔恨の念は日を追う毎に大きく成ってゆく。

久坂玄瑞ら村塾生、そして幾多数多の志士達もまた同じく悲嘆に暮れていた。

そんな中、久坂はかねてより約していた大楽源太郎との再会を果たすべく遠い山向う、瀬戸内側に位置する防府へと向かっていた。

大楽源太郎は萩で生まれ暫くは久坂玄瑞と近隣にあって平安古に住まっていたが、縁組事情も会い重なって、今は台道（防府市）へ移住していた。今日はそんな彼の誘いにより同じ防府に済む岡本と言う学者邸で落ち合うようになっていた。

久坂は夜明けと共に萩を出立する際、同門の中谷を誘い出し一路萩の街道を南へ下っていた。

今現在と違ってこの頃は兎に角駕籠や馬でも使わぬ限りは皆一様に徒歩での大移動であったから、

山口（湯田温泉町辺り）へ着く頃には既に正午を過ぎる程であった。

「なあ、玄瑞。この分だと夕方・・・最悪日が変わる前にはあちら

さんへ着けるかのお。」

正午になってようやく山口入りを果たした2人の若者は、一休みと称して茶店の縁側に腰掛けている。

中谷は草鞋の締め具合を確かめながら、ちらりと久坂を仰ぎ見る。

「ああ、まあ今の調子で歩いていけばなあ。」

「大楽さんは台道からか・・・近いけえ良いなあ。はあ、遠いのお・・・。」

淡々となんでも無いかのように告げる久坂に、中谷は大きな溜息を吐いてぽつりと小さな愚痴を漏らすと

ずずつと茶をすするのである。

それを見て、久坂もやれやれといった表情を一瞬向ける。

「ま、愚痴言っても仕様が無いじゃろう。さあ、もう一頑張りじゃ、先を急ごう。」

「ほいほい。じゃ行きましようかいの？」

そう言って二人は席を立つと湯田の茶店を後にした。

二人がいよいよ防府へ入ったのは完全に日が落ちた時刻であった。

「ようやつと着いたのお。」

「そうじゃの。まあ取り合えず岡本さん所へ急ごう。」

一旦防府へ入ってしまえばあとは近いものである。防府宮市はほぼ防府の中心に位置する場所である。

久坂と中谷の兩人は足早に宮市・岡本邸を目指すのであった。岡本邸にたどり着くと、二人は快く出迎えられた。

「よく来て下された。さ、お上がりなさって。もう大楽さんもお見えですよ。」

主人が笑顔で出迎えてくれる。どうやら約束の大楽源太郎は既に到着しているらしい。

家屋の門を潜り、客間へ導かれると言われたとおり先にたどり着いた大楽が既に待っていて彼は久坂を見るなり立ち上がり、嬉しそうに彼を迎えた。

「おお、久坂君。中谷殿もお久しぶりですな。今宵は大いに語り合いましょぞ。」

「源太さん、お久しぶりです。お変わりなく何よりです。」

「ご無沙汰しとります。勿論こちらもそのつもりで土産話からたくさん用意して来とりますよ。」

口々に再開を喜び合う彼等を岡本は満足そうに見守っていた。

懐かしい盟友の再会・・・

そしてこの翌日にもたらされる報・・・・・・・・

歴史の波はやがて彼らをもその渦に飲み込んでいくのである。

上洛論戦（4）

翌朝、久坂は大楽や岡本らと連れ立って小高い丘を歩いていた。

「「桜を見に行こう。」」

誰が言い出したか、その一言から始まった今日の行程……。
桜花に対する武士の生き様、愛すべき国花に憧れを抱く久坂はその
意見に是非にと賛同するのであった。

季節は丁度桜の咲き誇る美しい春……。
新しい蕾を幾つもつけて、薄い紅色を遊ばせている穏やかさの中に
清らかな空気が一面漂っている。

久坂はそんな清々しい空気を深く吸い込んで、空を仰ぐ。

（ああ、先生も今頃はあの上から見守ってくださっているのだろう
な……）

空を眺めつつふと思い出される松陰の面影。

敬愛する人物を失ったのは久坂だけではない。大楽や中谷らも同じである。
振り返れば皆一様にそれぞれの懐かしくも悲しい思い出を回想している様だ。

「よしよし、皆こちらで酒でも飲みながら持参した物を拝見しようじゃないか。」

岡本は、皆を敷いた御座に呼び寄せる。
酒などを供えられた簡易の祭壇が小ぢんまりと佇んでおり、いよいよ追悼の意を込めた語らいが始まるのである。

久坂らは吉田松陰の面影を偲ぶ遺影代わりとも取れる掛け軸を。
大楽は頼三樹三郎ら師から受けた書を広げた。
其々に実に思い出深く大事な遺品だった……。詩と酒に酔い、大いに盛り上がる小さな法事ともつかぬ席。

久坂はこの日の出来事を良く記憶するのであった。
やがて、一頻り宴席が空けてくると、いつの間にか席を外していた中谷が走ってこちらへ向かってくるのが見える。
その顔は驚きと、複雑な喜びに満ちていた。

『大老・井伊直弼が白昼江戸城桜田門で惨殺された！』

彼が持ち込んだ一報は、まさに志士にとっては朗報。だが、久坂や大楽達はうれしさ半分、あとは弱りきった幕府・そして日ノ本の行く末を思っ て目を白黒させていた。

「井伊をやったのは恐らく水戸の志士じゃと言われとる。あれだけ多くの血を流した男じゃ。こればかりは自業自得よ。先生方の敵討ちは果たされたわけじゃ。」

中谷は興奮した面持ちで得た情報を皆に知らせる。

「しかし、幕府の権力者が白昼堂々と・・・・・・・・すっかり幕府も衰えたという事か？」

顎に手をやって考え考え久坂は呟く。
それを隣で控えている大楽は相槌打ちながら、

「いや、井伊だけが幕府ではない。勢いはそう衰えまいが、取り合えず一つ大きな嵐が去った事には変わらない。
どちらにとっても井伊の政は良いものではなかったろうしな。」

それは、極めて冷静な言葉だった。
二百余年と泰平を維持してきた幕府、その大老が真昼間暗殺という話はまさに信じ難く、また国家の暗転を匂わせるものであった。

上洛論戦（5）

桜の下で詩を吟じ、酒を嗜む久坂達の元に一つ朗報が届いたのは午後。

幕府の政権を掌握する人物・井伊直弼襲撃の報は瞬く間に広がり、同志を

失った志士達はこの報を聞いて涙を流し歓喜したという。

久坂達とて例外ではない。この急報を聞き、それぞれに敬愛する師を思い

描き大いに喜び合ったのである。

朗報を耳にして翌日、久坂は久しぶりに良い朝を迎えた。

桜の丘から岡本邸に引き返してからまた4人は室内で酒に酔い語り明かした。

その晩は昨夜のそれとは全く異なり、それぞれが味わった悲痛な思いを解放

する事が成就した実に充足したものであった。

（ああ、先生もこれで少しは喜んでくださるだろう。あとはお志を僕等が継続させれば

良いのだ・・・・・・）

無念の死を与えられた松陰に、久坂は瞑想し心の内で語りかける。
隣で眠っている大楽・中谷も同じ様に敬愛するものを大獄で失っている。

ここでは皆が等しく同じ様な境遇にあるし、幾分張り詰めていた気持ち
持ちが解れる様
だった。

暫くすると、隣の掛け布団がもそりと動いた。

「ん……。あ？久坂君……。お早う。どうした……。随分早い
目覚めだな。」

「源太さん。お早う御座います。ええ昨日の興奮が冷めぬようで、
何時もより早く目を
覚ましてしまいましたよ。」

明るくなり始めた室内に目を覚ました大楽は隣で起き上がっている
久坂を見つめる。

やや寝ぼけ眼の友人に久坂は笑みを含め返答するのであった。

「ああ、そうだね。私もまだ夢を見ている様な気分だ。あの井伊直
弼がよもやあの様な
最期を迎えることに成るとは……。いや、全く予期せぬ事ではな
いにしろ余りにあっけなく

早かったからな。本当に天命には逆らえぬものだ・・・。」

そう言って大楽は喋り終わると深いため息を吐いた。

久坂も相槌を打ちながらただただ大楽の言葉を聞いていたのである。

やがて起床時刻になり、一同揃うと今度はそれぞれ在るべき場所へと足を運ぶのであった。

久坂と中谷は岡本邸を出てから直ぐ大楽と別れ、来た時と同じ様に萩への山道をひたすら

北へ北へと上がっていくのだった。

上洛論戦（6）

防府宮市の国学者・岡本三右衛門を訪ねてから暫くして、元号は文久元年と改められた。

萩にて活動を模索していた久坂は、ふと一つの事を思い描いた。

（何を始めるにも活動資金は必須となる……。しかしどうやってそれらを徴収するか？

杉にも頼れぬし僕等で稼ぐしかないか……。）

久坂は幾日か資金調達の方法に試行錯誤し、結果自分達の学を生かしつつ貯蓄できる作業を見つけ出した。

写本をし、それらを売りえた金で行動の資金を賄おうというものである。

寫本は毎月六十枚ずつを持ち寄り1日に二枚最低売りさばけば何とか学の妨げともならず上手に稼ぐ事が出来るではなからうか？

久坂は才気ある同志達に、詳細を綴った手紙を出す事にした。

『

一燈錢回覧文

此度、同社中申合せ自分々々の力を盡し骨を折りて、鎖細の事ながらも
相貯、置き度き事に候。非常の変、不意の急に差し掛かり候ても、
懷中

拂底にては差問ふるものに候。逐々有志人の牢獄につなされ亦は飢渴
に迫り候者も相助け度く、義士烈士の碑を建て墓を築き等までも
力を

盡し手を延し度き事に候へども、同社中、有余の金も有之まじき事
に候へ

ば、何れ此方の至誠をのみ貫き度き事に候。されば、毎月寫本なり
ともし

て僅かの貯へ致し置き度く、月末松下村塾まで銘々持ち寄り致す可
く候。

半年にもせよ一年にもせよ、塵も積もれば山となる理にてきつと他
日の用に

相立ち、用途も有之べく相考へられ候。同社中身の膏を絞り出して
集むる事

になれば、容易に費すべきにあらず、己むを得ざる事あれば、同社
中申合

せの上にて取り捌き申すべく候。抑々人を救ふも、用に備ふるも、
富貴長

者のことなれば、如何様にも相叶ふべけれど、我々にてかくまで
にす

るは貧者の一燈とも申すべきことにて、至誠の貫かぬ理はよもある
まじき

也。之れに依り、此度取立て候金を一燈錢と名付くる也。

一、毎月寫本六十枚つつ村塾まで必ず持ち寄り致し置き度く候事。

一、寫本料は先師の定むる所眞字（漢字）十行二十字五文、片仮名
同断

四文の事。

一、一日僅に二枚づつの事なれば、さまで勉強にならぬ事はあるまじ。若し

此の数不足なる時は一枚五文の辻（割合）を以って相償ひ、必ず持寄り

度き事。

一、寫本紙、寫本取捌き等は逐々申し談じ合せ致すべく候へ共、當分の中

は、寫本紙は銘々心配有之べく候事。

右條々、此度申合せ候所、これしきの事さへ骨を惜しみ候位にては、我々の

至誠相貫き候事も覺束なき事のやうに相考へられ候。銘々屹と怠らぬやう

致し度きことは申すも疎に候。

西ノ十二月朔日

松下村塾同社中

』

久坂は中谷正亮・入江九一・吉田利麿ら松門の同志を中心に、回覽文書を見せていた。

勿論彼等は松陰の遺志を継がんと、勇み久坂の写本作りに賛同してくれた。

そんな中、久坂は松門の志士以外の面々にも声をかけていた。

文を娶り、杉へ移る前に済んでいた平安古。

懐かしい香り漂う町並みに再び久坂は足を踏み入れると、一件の家

を訪ねる。この辺りは

土塀が高く外敵に供えられ、また作りも武家の町並みに匹敵する場所である。当然この付近にもなかなか身分格高き人物が多く住まっており、侮れない所である。

「確かこの辺りじゃったか。ここは本当に懐かしいな。家族という者が居たころのまま……っと、感傷にひたつちよる場合じゃないな。そういえば近年越して来たと聞いたが。」

細い路地をウロウロと、長屋の古めかしさを目で追いながら歩いていると、後ろから聞き覚えある声が響く。

「……久坂君か？」

静かな空気の中に突如響き渡った声に、思わず久坂はビクリと体を震わせると、素早く後ろを振り返った。

其処には以前にあったままの大楽源太郎が居たのである。

「源太さん！すみません、訪ねようと思ってウロウロしていたのですが、何処へお住まいか聞き忘れてすっきり迷ってしまいましたよ。」

「ははは、ここを離れて随分なるからなあ。それに以前と私も住居

が異なっているし。仕様が無いね。」

互いに顔見合わせて苦笑いする。

久坂は、文才秀でた少しお堅い親友をなんとか誘えないものかと、大楽邸へ案内される間一人必死に考えるのだった。

上洛論戦（7）（前書き）

作業完了に伴い、本日よりサイト運営及び更新再開になりました。
数日間、ご迷惑おかけしました。

上洛論戦（7）

大楽源太郎邸。

久坂と聞いて大楽は喜び彼を客室へ通した。
静かな室内に茶を啜る音が響く。

「で、今日はどうかしたのかね？」

「はい、今日は源太さんにお問い合わせがあって来ました。是非ご協力頂きたい事があるんです。」

「協力？・・・まあ、取り合えず話したまえ、聞いて見ようじゃないか。」

・

・
・
・
・
一燈銭申し合せ書きをパラッと目の前に広げていく。
一通りの事項が書き綴られており、その最後に署名が連なっている。

「久坂君・・・・・・・・此れは一体？」

瞬きも忘れて表情固くした大楽は小さい声で呟く。

「これから我々が攘夷へ向けて活動するに於いて、その資金調達が必須となってきます。
何れは藩からの支援も頂戴出来ればと考えておりますが、まずは自分達で・・・・・・・・。」

「・・・・・・・・成る程な。然し活動する塾生は兎も角何故私まで・・・・。」

「一人かなりの枚数寫本する訳ですが、当然人には得手不得手があります。僕としては確実に

役割をこなしてくれる有志が必要なんです。源太さんは文才に秀で更に活動においても先輩
でしょう？そう考えるとどうしても外せなくて。」

申し訳なさそうに久坂は述べる。

大楽はそれでも少し渋っていた。今まで接点の浅かった松下村塾生らと果たしてどう協力していくのか。

松陰の思想に浸かりきった彼等と接する事に成功を感じえぬ所があるのも事実。さて、どうしたものか……。

「源太さん？黙っていたら了解と取りますよ？」

俯いて考え込んでいると、人の良さ気な顔で久坂が顔を覗き込む。

「な！待て待て。考え中じゃ……！」

自分は滅多な事では動じない、感情は常に襞に隠して応対をする。そんな冷静さを売りにしてきた自分が慌てた声を出すなどそう無い事だ。大楽は自分の有様に驚きを覚えつつも
必死で久坂の言葉を遮ろうとした。

「ねえ源太さん、僕はここから出て何時かは幕府を……日ノ本を変えたい。その為には志を同じくする同志と、

それらが抱える才気を全て取り込みたいんですよ。松下村塾生だけでは成しえぬ事です・・・何れも。貴方をこうして説得出来るかどうか・・・その小さな事一つにも日ノ本の命運がかかっていると言っても過言ではない・・・お願いします！」

先程までのお茶らけた空気は一変して真摯なものに変化する。

大楽は見つめた久坂の瞳の奥の真理に気付いてハツとした。

彼が背負う大きな存在とそれを遮ろうとする壁・・・・・・・・・・。

その板ばさみになっているのは目の前にいる年下の青年。

「・・・仕様が無いのお・・・。久坂君、少し待ってくれ。墨を磨って来る。」

そう言って静かに席を立つと、大楽は自室の書斎へと消えていった。

一人残された久坂は、後姿をただじつと見詰めていた・・・・・・・・。。

上洛論戦（8）

硯に水を少し垂らし、黒い墨石を指で固定し、その先を水に浸ける。ズリズリと手を前後させると水は徐々に黒く浸食され、透明さを失う。

久坂は無表情に墨を磨る大楽の横顔をただじっと見つめた。

「さて、書こうか。」

ピンと背筋を伸ばし、姿勢正した彼は筆を軽く握って空いた手を多くの名が連なる書にそつと添える。

そして、ゆっくりとした動作で和紙の上に先を墨で濡らした筆を走らすと、忽ち綺麗な線を描き文字が浮かび上がる。

大楽は先にも述べた通り、文才秀でており詩歌なども多く出している。

そんな彼の字は実に達筆で、久坂の様に力一杯思いをぶつけた様な荒い文字はほとんど見当たらない。

川の流れの様にゆるやかに描かれた書体で、生涯を懸けた攘夷活動を行う彼の熱意と激しい思想を

それから感じ取る事は難しい事であろう。

最後の一字を描く彼の目は筆先の毛一本にまで集中し、一寸たりとも乱れなくスルスルと先へ先へ向かう。

やがて、全てが終わったのかコトリと静かに筆を硯の横に掛けると、半紙から手を離し久坂へと向き直った。

「これで良からう？さ、誓約しようじゃないか。私も君達に協力させて頂くよ。」

先程は納得行かない様な面白くないような表情で参加を渋っていた彼だが、一度覚悟を決めると

案外開き直りは早いらしい。

引きつっていた口元をかすかに緩めてようやく穏やかな表情に戻るのである。

「源太さん、有難う御座います。・・・しかし、よくよく考えると源太さんの様な達者な方が来るって事は僕もうかうかしていませんね？」

「・・・？」

「ほら、達筆な源太さんの寫本の方が売れそうだし・・・。」

ニツと表情を崩して久坂が少しおどけた口調で言う。
それに最初こそ疑問符を浮かべていた大楽だったが、言わんとする所に気付くと終いにはククッと小さな声を
たてて笑うのであった。

「あはは、源太さん。笑い事じゃないですよ。本当にこっちは死活問題なんですから。」

「クク・・・久坂君。それはこちらと同じ事じゃないか？久坂君が居ったら私こそ売れのこってしまうかもしれない・・・。」

それぞれ好き勝手な解釈で言葉を発する。

やがて、二人は顔を見合わせるともう一度盛大な笑いを洩らすのであった。

本当に久しぶりだったと思う。

あの大獄からこっちそう可笑しくて笑うなど殆ど無く、喜びを表現する事はあってもこうやって幼い表情で笑いあう事など
無縁と成りつつあった。

久坂は可笑しさを囁殺しながら、久しぶりに見た大楽の笑い顔を覗き見た。

彼もかなりツボに嵌ったらしく、其処から抜け出すことも出来ず未だ笑い続けている。

後どの位こうして穏やかに笑っていられるだろうか。

これから立ち向かう世界は少なくともこんな優しい空間ではない。

常に死と隣り合わせ……。

もしかしたら一人きりで戦いを強いられるかもしれぬ、全く未知の世界である。

考えるうち、久坂の表情は切なげなものへと変わる。

ふと視線を久坂に運んだ大楽は瞬時にそれに気がつき今まで笑っていたその表情を静止させる。

「久坂君……？どうした。随分大人しくなったじゃないか。」

「え？ああ、なんだか久しぶりに笑ったなあと思って、少々考え事を。」

「……そう……か。物思い耽るのも良いが、これからの事を考えたら今のうちだぞ？こんなに無防備に安全な場所で笑ってられるのも。」

大楽は、京で幾度か既に活動をしている。

この長州藩を出れば、全く油断ならぬ様々な思想と謀略が入り混じった世界となる。

身の安全を考えながらの生活を強いられる場所で、このような心の笑みは浮かぶ余裕すら無いだろう。

ならば今の内に護られた有難味を味わっておけ。

大樂の言葉に僅かな気遣いを見つけて久坂はもう一度クスリと笑みを溢した。

上洛論戦（9）

大楽邸での一時の休息を終えると、久坂は杉家へもどり寫本へと取り掛かる。

「さあ、早速始めるか！」

気合を入れて作業に取り掛かる久坂。

今頃、一燈銭の署名に参加してくれた面々も一生懸命になって執筆作業にかかってくれている筈だ。

一枚・・・また一枚と筆を走らせていくうち、隣に積み上げられた半紙の枚数は小高い丘さながらに厚みを帯びてくる。

出来上がった寫本を道々に売り歩き銭を作っていく。

一銭が積み重なれば、いつか長い時を経て黄金の貨幣へと進化してくれるだろう。

久坂はこの地味で気長な作業を今から始める活動に置き換えて考え

た。

今は一人でこの一銭の様に孤独を感じつつ歩いているが、何れは一銭同志が寄り添い集まって黄金の

小判に勝る大きな力を生み出すだろう。

自分達の一燈銭の活動は正に今後日本に大きな変化をもたらすものとなる。

その日から久坂は書齋に座り込んでひたすらに寫本に打ち込んだ。時折、妻からの差し入れが入り、それらを口にしながらも一時の休息の間も寝る間さえも惜しんで作業に没頭していくのであった。

僅かではあるが、資金集めも進んできた頃久坂に一つ朗報が入る。

京の都へ経てという知らせだ。

前々から活動を早期に行いたいと考えていた彼は、藩庁に幾度か国暇の許可を申請し返答を待つばかりであった。

その待ちに待った返答が先日になってようやく届いたのである。

「檀那樣！藩の方よりお知らせが参っております。」

パタパタと衣擦れの音が廊下に響く。

小さな足で小走りに近づいてきたのは妻・お文だった。

「何？藩からじゃと！？」

久坂が勢い良く振り返ると、お文は僅かに頷いて自身の手の中に納めてあったそれを夫の手へ渡す。

受け取った久坂は大急ぎで書簡を紐解くと、興奮に震える手で束ねられた紙をゆっくり広げた。

予想していた通りの言葉が書き綴られた文字が其処に広がる。

「・・・・・・・・檀那樣・・・・。藩の方から何と？」

お文は松陰の愛妹であり、他杉家に生まれた三姉妹の末娘として兄や姉達に並んで多少の学ならば理解しうる賢母とも言える女性であり妻であった。

だからこそ、夫・玄瑞が亡兄の後を継いで他国へと出たい・・・・という、彼の熱い願いも密かに気付いて寂しいなど一言も発せず黙々とその志を後押しするのであった。

「ああ。都への旅が出来るようになったよ。」

「まあ！おめでとう御座います。それで、ご出立は・・・・？」

「うん、出来れば明日にでもと思うが・・・・・・・・なあ、お文。また暫く留守にするが・・・・」

「存じております。檀那樣、こちらの心配は要りません。どうぞご立派な御活躍を。」

背筋を伸ばし凜とした声で言う彼女は流石に杉家の、武家の女性であつた。

久坂はその健気かつ気丈な妻の姿に一言”すまない”と呟いて後は言葉をつむぐ事が出来なかつたのである。

翌朝、予告通り久坂は京へと旅立つ事になる。
以前の旅路とは少し自分でも違う空気を感じて、久坂はふと涙松に立ち尽くす。

（先生もここから最期の景色を眺めていたのだな・・・）

（僕はまだ戻る事もあるが、以前のような唯の遊学とは違う。もしかしたら最期の景色になり得るかもしれん。）

亡兄でもあり大事な師でもある吉田松陰の最期の面影が脳裏を過り、ふと感傷に浸ってしまう。きっと、彼が大事に可愛がっていたお文を視界に入れたからだろう。

久坂は、婚儀より殆ど夫婦としての時間を持っていない。
それでも文句不満一つ言わず寒くなるだろうからとせつせと厚手の
着物を縫い上げてくれたお文に目でもう一度侘びを入れる。
やがて、別れの時間となると、久坂は後はもう振り返る事無く涙松
を山陽沿岸へ向けて下っていくのであった。

上洛論戦（10）

山口へ出て、そのまま南下すると防府へ着く。

防府で一日目の休息を入れていると、何ヶ月か前に大楽達と騒いだ頃の風景が脳裏を過る。

彼も今は萩へ戻っているが、何れは自分達と同じ様に京や江戸へ上がって活動を始めるのだろう。

松陰とほとんど同時期の活動者である彼の事だ、いつまでも郷里でのんびり過ごすという事はあるまい。

久坂は遠くに離れた友を思い出しながら、宿の女将に出された熱い茶を啜る。

防長から芸州（現在の広島市）へと入り込めば、長く毛利公が望んできた広い町並みが見えてくる。

久坂も以前江戸へ発った折、芸州藩内は通ったが、城下町の方へは行かなかった。

だから、一度だけどんなものか見てみたいとは思っていたから、ここは一つ皆に目を瞑ってもらって暢気にかつて

歴代の主君が築き上げた小さな都を散策する。

「流石に芸州は広いな。毛利公の祖国とも言えるんだよなあ。」

城下を流れる大きな河は、幾つにも枝分かれしそのどれもが日の光を浴びて眩い宝石の様に透き通り輝いている。

街道には店が立ち並び活気溢れ、道々すれ違う人々の表情にもそれは現われている。

やがて、立派なお堀が眼前に現われる。

「八丁堀周辺は流石に整然としてるな。しかし・・・肝心の城は・・・」

ふと堀に向けた視線を僅かに上へずらす。

その視線の先にあるものに久坂は目を丸くする。

彼の視界に映ったのは、芸州公浅野氏の居城・・・かつて毛利輝元が築城し西国一の大名とまでのし上がったその拠点。

現在の広島城・・・主には鯉城と呼ばれ、また在間城、石黒城、御篠城などとも呼ばれる。

「はあ・・・これは・・・凄い・・・。」

久坂は初めて目にする城の大きさに感歎の溜息を洩らす。

彼が見慣れている萩指月城も小ぢんまりとして趣ある造りだが、目の前に聳え立つ鯉城の堂々たる姿に憧れの武士という

存在を描かざるを得ない。(広島城・・・鯉城は被爆前まで日本三代名城に上がっていた)
かつての同志ともいえる武士達ものものの威風堂々たる姿が、情景が浮かび
久坂は暫しその場に立ち尽くすのであった。

”いつの日か芸州へ・・・・・・・・・・”

そう宣誓する主君とそれに身命賭して従う主従の契り。

無念の思いを持ってこの地を去った古き主にこの鯉城はどの様に映
っていたのだろうか。

何時かはその宣誓に自身も家臣の末席でも良いから加わりたいたさ
え願っていた自分。

これからの活動は主従云々一切を追いやっても成さねばならぬ大
きなもの。

新時代を見たい自分と、古い武士の道にしがみつく自分との矛盾の
間で幾度となく戦い、新しい世界を望んだばかりというのに・・・。

久坂は自問自答をし、再び溜息吐いて自嘲の笑みを洩らすと、これ
以上は居てはならないなと思ひ立ち、足早に鯉城を後にする。

芸州を抜け、所々で休息を入れ用意した草鞋も何足目の交換を終え

ると、ようやく逢阪入りを果たす。

「ふう・・・あとちょっとじゃな。相変わらず上方方面は栄えとるのお。」

町並みを見渡すと、萩や山口、芸州、赤穂などとは違い、大問屋が目立ち流石に天下の台所と言われ流通も栄える逢坂は比べ物にならぬ程の人・人・人・・・

目まぐるしく動くその姿は逢坂の民ならではのと思える。

少し外れた先にある遊郭界限も実に煌びやかで、豊艶とし美妓が我こそはと美しい姿態を晒している。

「ああ、本当にここは都に近いだけあって美人が多いなあ。」

などと、一人ぼそりと呟くと一人の芸妓とぼったり視線が合ってしまった。

芸妓は白粉を薄っすら塗り上げ、紅をスツと控えめに引いて多少の気品が感じられる。

然しながら、流石に手馴れて居るのか実に優雅な仕草でこちらへと誘うように視線を寄越してくる。

久坂とて人間、一時風に流れてくる香の匂いに惹かれそうになる。しかし、その次の瞬間・・・涙松に佇む寂しそうな若妻の姿と師・松陰の面影が脳裏を掠め、瞬時に我に返ると、慌てて近づこうとする妓を手で制す。

芸妓は可愛らしく小首を傾げて見やると、長い袖を少し口元に添え、

くすりと鈴の様に笑うのだった。

久坂は照れくさくなり、足早に其処を去った。

芸妓を侍らした席は幾度か以前の旅で体験したが、こうやって単身でというのは一度たりとも無い事。

慌てて駆け出した彼は、呼吸を整えると再び自嘲した。

（遊びに来ている訳じゃない。気を引き締めてかからんと・・・！）

そう自身に心の内で一喝入れると、黙々宿へと急ぐのであった。

上洛論戦（11）

京都へ辿りついた久坂は藩邸で一晩を明かすと、早速市外に繰り出す。

最近では土佐や薩摩などで、尊皇攘夷を謳う者も多く京の町は何時もの都の雰囲気とはまた違う、物々しい空気に染まりつつあった。

「はあ・・・京の都も以前とは変わったのお。目つきの悪いのがよけえ居るわ。」

練り歩いて志士と思しき人間を探すと、志を疑う程のゴロツキ連中の姿が視界に入る。

おそらく、長州藩で最近始めた同志募集に食い扶持求めて各地から集まってきたのだろう。

久坂は軽い失望と頭痛に大きく溜息を洩らす。

この大勢の中におそらく心底思想を求める者は極一握りしか存在せんだろう・・・。

それらを果たして全て拾い出すのに、随分無駄な労力を要してしまふのは間違いない。

考えながらフラフラ歩いていると、一件の茶屋から大きな怒声が響く。

驚いて、その棟へと歩いて覗くと、刀を佩いた大男数名が討論を交わしているらしい姿が飛び込んで来た。

（もしや・・・薩摩か・・・土佐の志士が会合を・・・？）

美しい美妓を侍らせて、酒を囲み優雅な空間での談合。

・・・らしいのだが、如何せん聞こえてくる声は怒りを微かに含んだ穏やかでは決して無いもの。

美妓達はそれぞれに相方と方を寄せて黙って聞き入っている。

暫く中を覗っていたが、余り覗き見るのも宜しくないと思い直し、そこからまた別の場所へ歩き出した。

「久坂さん！」

後ろから声が聞こえる。

はっと振り返ると、同志であり、同門の寺嶋の姿があった。

「ああ、寺嶋か。君も同志集めかい？」

「ええ、それもあるのですが……ちょっと。」

意味ありげに口の端を上げ久坂へ近寄ってくる。

「なんだ？ 気持ち悪いな。はっきり言ってみい。」

僅かに近づいてくる寺嶋から身体をそらすと、久坂は口をゆがめて言う。

「いやあ、同志集めも結構ですが、ここの美しい芸妓達を少しばかり拝見しようかなと思うて。」

緩んだ表情で寺嶋は久坂の肩に手を置いて耳打ちする。

それを聞いて久坂はまた小さく溜息を吐くと、ほどほどになど小声で囁いた。

「しかし、僕らは有志を募りに此処へきているのだぞ？ 芸妓と遊ぶなぞ……」

「そんなこと言って、久坂さんもたまにゃ構ってやらんとほら、可哀相じゃないですか？」

にやりと笑って寺嶋は視線を久坂から町並みへ移す。

それに釣られるように久坂も彼の向くほうへ視線だけ送ると、そこには鮮やかな着物に身を包む

妖艶な美妓達の姿があった。

彼女たちも又、彼等に視線を投げかけている。

「……………坊主が大小を佩いているのが珍しいんじゃろうか。」

頭を軽く磨りつけ、久坂は苦笑いする。

「違いますよ。きっと久坂さんが男前じゃからじやろうて。」

寺嶋は妓達の視線の意味をそう解釈付けた。

「まさか！」

冗談はよせと言わんばかりに久坂は寺嶋を軽く睨み付けたが、飄々としている彼へその睨みも全く皆無と成ってしまう。

「・・・・・・・・ああ、ほら、行くぞ！」

全く何を言っても通じないと悟った久坂は寺嶋に一言そう言い捨てると、微かに朱に染まった顔を隠すように振り向きもしないでさっさと芸妓達とは反対の方向へ大股に歩いていった。

その姿を寺嶋は実に楽しそうに見つめ、面白い遊びを見つけた子供のような表情で後を追うのだった。

上洛論戦（12）

賑やかな京の町並みを堪能したその晩、久坂は藩邸で食事を済ませると書斎に入り書物を読み耽っていた。

「久坂さん、起きとられますか？」

襖越しに誰かが呼んでいる。
久坂はその声に聞き覚えがあったので、声の方へ振り向くと立ち上がってそちらへと歩み寄っていく。

「ああ、寺嶋か。どうした？」

「いや、ちょっと所用で。って、久坂さんは夜は何時もこうですか？」

「……？まあ、寝るには早いし今日は特にする事も無い。郷の知人達へは此処へ来て直ぐ書簡を送ったからなあ。」

ふっと視線を綺麗に整えられた机へ向け、再び寺嶋へ戻すと其処にはいつの間によらもう一人、人が増えている。

「君は……」

「伊藤です。伊藤俊輔ですよ、久坂さん。ほら、村塾の……」

「ああ、知っているよ。久しぶりだなあ。君も此方へ来ていたのか。」

同門であり、盟友とも言える3人が人所に集い互いを懐かしみ合う。久坂は、真に二人の同志との再会を喜んでいた。

そんな彼に、彼等二人……特に伊藤の本来の再来理由など解ろう筈も無く。

一頻り懐かしい会話を堪能した後、伊藤は円を組むように座ってい

た自分の座布団を
ズズイと中心に寄せると久坂へ顔を寄せ、耳に口元を近づけると囁
いた。

「なあ、久坂さん。これからちよつとだけ良い所があるんじゃないかと酒
ないと思いませんか？」

「酒・・・？」

久坂とて酒は嫌いではない。

それに、一度来ただけの京の都で良い店など知らない久坂にとって、
伊藤の紹介は
有りがたい。

今後彼が成そうとしている他藩との交流に使える店を紹介してもら
えれば儲けもんだ。

久坂は二つ返事で承諾することにした。

「・・・・・・・・・・で、未だなのか？」

かれこれ一時程歩いている気がする。

藩邸など当の昔に見えなくなってしまった。

前を歩く伊藤は軽い足取りで飄々とした態度を崩さず歩く。

「まあ、もう少しで着きますから。」

そういう彼を一瞥して辺りを覗くと、昼間来た色町の界限独特の空気が漂っている。

「おい！ここらは・・・・・・・・！！」

「へ？なんですか久坂さん。京都で御茶屋っていったら・・・ねえ？」

「ああ、ほら、昼間も通ったでしょう？」

伊藤、寺嶋の言葉で昼間のあの芸妓達の熱っぽい視線が再び彼の脳裏に蘇る。

「な・・・！それでは、今から行く所って・・・・・・・・！！」

「そう、この辺じゃ有名な界限でね。・・・ほら見えてきましたよ。」

嬉しそうに伊藤が指差すそこにあるのは、島原大門。

京では祇園と共に、多くの美妓が揃っている大掛かりな揚屋が並び建ち、人の出入りも多い。

「・・・・・・・・！しかし・・・・・・・・」

「まあ、お堅い事は抜きにしましょうよ。折角ですし、それに・・・・・・・・こういう所は密議には持ってこないんですよ？貸切も可能ですからね。芸妓つてのも以外に口の堅い者達でね。」

「・・・・・・・・。」

「安心して会合出来、その上美妓に酌をさせ楽しめる。正に一石二鳥！」

「全く、僕がここへ来て毎夜抜け出す連中が居ると思うたが・・・・・・・・君達か？」

「へへ・・・まあ、あの芸妓達に泣き継られて放っておく男は居らんでしょう？」

伊藤はそういつて頭を掻きながらにんまりと笑った。

結局久坂は何度かに及ぶ二人の説得により、女郎界限へと足を踏み入れるのであった。

上洛論戦（13）

結局久坂は寺嶋・伊藤に引き摺られながら大門を潜ると通り一面艶やかな空気が流れていた。

「ささ、久坂さん。行きましょう。」

伊藤が何時もより乗り気に手を引っ張る。
彼等に引かれ、歩いていった先に一軒の揚屋が。
小さく書かれた表札には”角屋”とあった。

「俊輔、どうする気じゃ。京へは遊びに来たわけじゃないと・・・。」

久坂は困り果てて伊藤と、隣に居る寺嶋に声を上げた。

「久坂さん、ここまで来たら観念してくださいよ。」

伊藤が可笑しそうな表情で久坂を宥めている。

「そうそう、これも今後の対談接待の為の前準備もとい勉強じゃ思うて。」

寺嶋も伊藤の言葉に続いて言う。

「しかしな・・・・・・・・・・」

久坂がまだ納得行かずと口を開いたその時、建物の中から一つ高い声が掛けられた。

「あら、伊藤はん？何時もおおきに。」

「おう、久しぶりじゃ。今日も頼むぞ。」

中から出てきたのは紅梅の装を纏った芸妓であつた。

彼女は伊藤の姿を認めると、嬉しそうな顔で彼に走り寄る。

伊藤はそんな妓を広く腕で受け止め抱きすくめると、優しく呟いた。

「浅菊、今日は新しい同志が来とつての、良い妓を誰ぞ紹介してくれんか？」

「あら、そういう伊藤はんは？」

浅菊と呼ばれた妓は蕩ける様な視線を送り、伊藤に縋る様に問うた。

「菊・・・妬いとするのか？心配せんでも今日もお前を選んじやるぞ？」

「まあ、嬉しおす・・・。ほな、うち他な妓呼んで来ますさかい。」

浅菊は、嬉しそうに口元を緩めると、やり手に案内を任せ、自分は奥へ引っ込んでしまった。

「・・・・・・・・・・俊輔、寺嶋・・・・・・・・・・。僕は帰・・・・・・・・」

「駄目ですよ、久坂さん。覚悟決めてください。」

「行く行くはこういう場所で会合も行うんじゃないから。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・。」

廊下を歩き歩き彼は渋々に付いて行くしかなかった。

やがて、一室に着くとそこはそこから解らなかったが、豪華な屏風や装飾に彩られた和室が彼らを迎えた。

「凄い・・・・・・・・。」

久坂はその贅沢に飾られた装飾部屋に息を飲んだ。
今まで慎ましく生活してきた彼にとっては見たことも無い、別世界。
そういうする内、静かな一室に高い声が響く。

「お待ちせしました。」

「おお、浅菊！待ったぞ。」

伊藤は声だけで解るのか、直ぐに先程会った芸妓の名を呼んだ。そして、それに応えるかのように、障子がすっと開かれるのだった。

「伊藤はん、久坂はん、寺嶋はん。ようお越しくださりました。」

「浅菊、そがな所に居らんとこっち早よ入らんか。」

待ちきれぬといった風に伊藤は自分の隣の座を叩く。

「へえ、本にせっかちなあ伊藤はんったら、ふふふ。」

カラカラと鈴声を立てて、浅菊は望むままに彼の傍へと腰下ろす。

「ほな、皆お言葉に甘えて入り？」

浅菊は呼んできた二人の美妓に入室を促すと、自分は早速伊藤に向き直り杯を進める。

彼女に呼ばれ、それぞれの相方となるべく芸妓達が入室すると、先程の装飾に負けず劣らずの
艶やかかつ豪華な雰囲気相場を支配するのであった。

上洛論戦（14）

艶やかな芸妓達が入室すると場の雰囲気は一変する。

手馴れた二人を見てみると、久坂は急に不思議と自分が小さい男に思えてきて居た堪れない
思いに駆られる。

「どうした久坂さん。そう固うならんこう大きゅう構えとりやええですよ？」

伊藤が浅菊の肩を抱き笑った。

寺嶋を見ると、早くも自分の相方を選んだのか、芸妓に凭れる様な姿勢でうっとり杯を傾けている。

どうしたものかと思案している彼の腕に何かが絡み付いてくる。

「久坂はん・・・うちの事お嫌いどすか・・・？」

しっとりした高い美声が耳元から聞こえる。

ハッとして振り向くと、白粉に艶やかな紅をさした美しい芸妓が上目遣いに自分を見つめている。

「い、いや。嫌いではないが・・・、こういう場所には縁がのうて・・・。」

しどろもどろに言うと、芸妓は拗ねた表情を一変させころころと鈴鳴りに小さく笑った。

「うふふ、久坂はんは思ってた通り真面目な方なんどすなあ・・・。」

口元に手を軽く添え、妓は綺麗な仕草で言う。

都とは遠い長藩にあって、お文と慎ましく暮らしてきた頃とは全く違う色町の空気に眩暈を覚えつつそれから逃れるように久坂は少しだけ目線を彼女から外した。

「あら、許しとくれやす・・・久坂はん。珍しいお客様でしたからつい・・・。」

先程の笑い顔とは打って変わって芸妓は少し申し訳なさそうに久坂の顔を覗き込み許しを請う。

「いや・・・怒ってはないが・・・ああ、やはり駄目だなあ・・・。」

久坂は照れとも苦笑いとも取れる表情で芸妓へ再び視線を戻すとそ

う眩いた。

そんな彼の言葉に妓は一瞬驚いた表情を見せるも、直ぐ嬉しそうなそれに変わり久坂の腕に軽く
縋りついた。

「うち壇さん事気に入ったわぁ・・・色んなお話聞かせとくれやす。」

甘い声で縋ってくる芸妓の名は辰路といった。
源氏名であるが故、本名とは違うが久坂は表情をコロコロ変える面
白い妓だと印象深く残るので
ある。

久坂は目の前にいる二人の同志と共に杯を傾けると、後は一時の散
会となり伊藤も寺嶋もそれぞれに
相方を伴って散っていった。

「・・・・久坂はん。うちらも行きまひよ。」

辰路に甘く囁かれると、夢見心地に浸り自然彼女の言葉を当たり前
の如く受け入れてしまう。

「・・・・そう・・・じゃな。少しだけ休ませて貰おうかな。」

そういつて久坂もまた先に出て行った二人の同志と同じく相方となつた辰路に寄り添って彼女の室へと移っていった。

「……ほな、久坂はんは今暫くはこちらへ？」

「ああ、京で活動する為に同志を探しに来ているんだ。つい先日この近くへは足を運んだのじゃが。」

「んもう！そやったら、うっとこ寄ってくれはっても……」

「すまんすまん。どうにも苦手でのお。今晚もあの二人に引っ張ってこられた位じゃからのお。」

申し訳なさそうに言うと、辰路は機嫌を直したのか再び酌を再開した。

この美しい芸妓とやがて深く関わりを持つなど、今の久坂は予想だ

にしなかったのである。

ただ今宵限りの事と信じて疑わぬ彼にとって辰路が妻に継いで安息
の場となるのはまだまだ
先の事である・・・。

上洛論戦（15）

久坂はこの一夜を境に、活動を開始する。

薩摩や土佐の志士達と盛んに会合を重ね、その度辰路と出会った島原へと

頻繁に足を運ぶのだった。

部屋を貸しきれるこの遊里は密議には持ってこいの場所で、他藩の者達も

事ある毎にここを使い更なる交流を広めていく。

久坂はこの日、土佐の勤皇志士らと面会を果たし芸妓を囲んで対談していた。

「成る程、こちらが吉田松陰先生の辞世でありますか・・・。」

強い双眸を持つ丈夫が卓を挟んで向かいに座り手に先程渡した故人の書を取っている。

その書とは松陰の辞世の句であり、久坂も度々これを手にとって読み直し決意を新たに

している。

「はい。武市殿にも是非ご覧頂きたく思いお持ちしたのです。」

久坂が畏まって言うと、武市半平太は書に目をやったまま口を開いた。

「……………そうですか……………有難う御座います。いや、吉田先生の句は実に素晴らしい！」

「……………」

「我等志士は彼の人をよく見習ってこれから進んでゆかねばなりませんな。」

「ええ、僕達も日々師のおっしゃられた事柄を思い起こしながら先を目指しております。」

「ああ、是非に私も微力ながら吉田先生や貴殿らの志に沿いたいものですな。」

そういつて二人は改めて杯を交わした。

その後は、いよいよ本題である尊攘論へと入り、暫し二人の会話に耳傾けていた志士達も

我こそはと名乗り上げて熱く時勢を論じるのであった。

それ以降連日会合を重ねた久坂は、本当に何ヶ月か振りに单身島原の門を潜った。

辰路と出会ってから常に座へ呼び、すっかり馴染となった彼女は久坂が訪れると嬉しそうに声を上げ彼を自室へと誘った。

「ホンマお一人で入らはるなんて久しぶりやわあ……。」

幾分甘えた声で辰路は酌を勧めつつ久坂の傍へと身体を寄せる。

「ああ、ここで君と二人で話をするのも随分久方ぶりの気がするの
お。」

「ホンに。すっかり忘れられたか思っていて寂しかったとすえ。」

「スマンスマン。僕も成る丈時間取ろう思ってたんじゃが、何分忙し
ゆうてなあ。」

申し訳なさそうに頭を掻く久坂の仕草に辰路はクスリと小さく微笑
んで笑みを洩らすと、
一層彼に縋る手に力を込めた。

「……久坂はんの奥様でどんなお方です？」

ふいに出された質問に久坂は驚いて隣に座る芸妓を見た。
そんな彼の行動も知るかのように女は再び笑うのだった。

「……恩師の妹御でな、聡明だが静かな女じゃが。どうした？」

「いいえ、少くし気になったけどすえ？」

辰路は悪戯っぽく言うと、久坂から顔を隠す様に彼の腕に顔を埋めてしまった。

辰路に言われ、ふと久坂は遠い地で待つお文の顔が脳裏に浮かんだが傍に座ってすっかり黙ってしまった彼女を見て苦笑いした。

「なんじゃ、何ぞ不貞腐れてしもうたか？」

少しからかう様な言葉をかけると、辰路はゆっくり顔をあげ恨めしげに久坂を見やった。

「久坂はんの意地悪。」

プクッと頬を膨らませながら絡めた腕をそのままに辰路はふうっと息を吐くと彼を振り返った。

「辰路、君は本当に飽きん女子じゃな。見とって面白い、表情もよう変わるし」

クスクスと言う久坂に、辰路は思わず先程までの拗ねた表情を一変

させポカンとした顔をする。

「は・・・・・・・・？久坂はん？？」

「いやいや、すまなかった。毎日君の面白い話や仕草を見とると世情の緊迫した空気から解放され
楽な気持ちになれるんじゃないや・・・本当に助かつとるよ。」

ぼんやりとこちらを見る辰路に笑みを向けると、漸く理解できたのか彼女は嬉しそうに表情を一変させた。

「嬉し、久坂はん。うちも久坂はんが来てくれはるんが何より嬉おすえ・・・・・・・・」

そういうと、辰路は久坂に一層縋りつき甘えた。
そんな妓の可愛らしい様に久坂は顔を綻ばせ、この美しい芸妓を思
うままに抱き寄せるのであった。

維新の礎（1）

文久もいよいよ2年目に突入した頃、久坂達長州藩の志士達に一つの危機が訪れていた。

この頃藩は尊攘論から少し外れたモノへと変わり、その執政を牛耳り藩主・敬親をその流れに傾けていた。

敬親に信任されたその男、長井雅楽。

彼とそれに追従面々が提唱した『航海延略政策』、これは久坂達が塞き止めんと

する公武合体理論（朝廷・幕府の政治的結束）に似通ったもので、尊皇攘夷及び

討幕を志す彼等にとって思いもよらぬ思想であった。

当然これを知った久坂達も手を拱いている訳ではない。

何度か、長井らに掛け合っては議論を設けようとするも、当時長藩で重用されていた

長井雅楽の論がそう易々片付けられるわけも無い。

真向から立ち向かえども、藩論を傾けるだけの事あって長井もなかなかの達者者であった。

京での活動に一旦区切りをつけて、久坂は萩へと再び足を運んだ。
懐かしい我が家へと帰宅して、ゆっくり寛ぐ間もなく藩庁の周布政
之助を訪れ、彼に従って
長井雅楽を訪ねた。

「航海延略策に組みした手前強くは言えぬが・・・しかし、突然思
想そのものを急転
させるなど如何なる事か？」

周布は対座したと同時に話を切り出した。
対する長井は落ち着き払っており淡々と茶を啜りつつ言った。

「欧米諸国がこの日ノ本を隙有らばと狙っておると言うのに、君ら
はまだ幕府だの
朝廷だの言いよるのか？もはや国家存亡の時に一刻の猶予もないの
じゃぞ。」

「仰りようは御尤も。然しながら僕等としてそれが解らぬわけではあ
りませぬ。ただ
今の幕府に諸外国と渡り合っていくだけの力は無いと思えるからこ

そ、新しい有能な人材によって
作られた新政府こそ必要であると考えerのです。現状維持ではもは
や国家体制を作るのは難しいと考えます。」

長井の言い分に久坂も負けじと言い返す。

両者共、国を思う気持ちと意地は強いらしく暫しにらみ合いが続い
た。

「ふむ、全く君の考えが解らぬ訳ではない。しかし、今直ぐに新政
府とやらを樹立するのこそ夢想に過ぎん
と思うがね。現実に執政を取っている幕府と古来より神国を統る天朝
様が手を結び合う方が早いのではないか？」

最もな言い分は更に続く。

遂には久坂も論戦にキリが無いと判断し、この場は潔く退出するの
であった。

「お帰きなさいませ。」

改めて妻の出迎えを受けると、帰ってきたのだという安堵感が心一杯に広がる。

活動に身命注ぐ彼に休む間など殆ど無かったし、京では生命の危険すらも覚える

事暫々。

漸くぐつすりと休める事が出来ると喜ぶ一方、長井とのやりとりが脳裏を過りその度

居てもたっても居られないほどの焦燥感がこみ上げてくる。

（もしこのまま上手く彼を説得出来なんたら・・・）

ふと思いついて戸から洩れる月夜の光を仰ぎ見る。

師・松陰と同志達の顔をその夜空に浮かべつつ、久坂は一つ決意を固める。

（長井雅楽を制す他ない・・・刺し違えてでも・・・だ・・・）

そう誓って書斎に向かい筆を認めていた手を再び動かすのであった。

維新の礎（2）

翌朝久坂は、平安古の大楽邸を訪れていた。

一燈銭申合せの時から、直ぐ京へ上がってしまったから彼とは随分会って居ない

事になる。久坂は久しぶりに会う親友との再会と談笑の様を思い描き意気揚々と路地を歩いていった。

「済まんが主殿は居らんか？」

ドンドンと玄関の門戸を叩く。

暫くすると邸の中より一人使用人と思しき老婆が姿を現した。

「はいはい、お待ち下さいまし。ちと覗うて参りますけん。」

間延びした声で老婆は告げると屋内に姿を消した。

そうして、暫し門の脇で立って許しを待っていると中へ入っていったあの老婆が

足早に駆け寄って来た。

「すみませんねえ。お待たせしちよって。さ、どうぞお上がり下さい。」

先程とは打って変わって老婆は多少しつかりした口調で久坂を奥へ通した。

「いえ、こちらこそ急に訪ねてきて申し訳ない。源・・・大楽先生はご在宅なのですね？」

「ええ、ええ、ここ数日は書齋に籠りつきりで。何かに必死に打ち込んでいらっしゃる様で御座いましたよ。食事もそこそこで・・・あたしゃあ雇われの身じゃが流石に心配でなあ・・・」

老婆と主である大楽源太郎は親子程年が離れているらしい。

久坂は、老婆の心使いを我が事のように暖かく感じながら、書齋への道を案内され歩いていった。

「さあ、此方で御座ります。」

「ご主人様、久坂様で御座いますよう！」

年を思わせぬ軽快な声に閉ざされた襖がガラリと開いた。

「おタネ、そんな間近ででかい声出さんとも聞こえとるぞ？ それより、済まんが茶を二つ用意しちゅくれんか？ ああ、此れやるから後は休んで良い。」

大楽は小さく綺麗な箱を老婆・・・おタネに手渡し笑いながら言った。

箱の中身が解ったのか、老婆は頬を緩めるとお茶を煎れて来ると言い残してそとその場から去っていった。

「それにしても久坂君、久しぶりじゃ。」

大楽は襖を開けて立つ彼を嬉しげに迎え入れると、座布団を差し出して対座させた。

「源太さんも元気そうで安心したよ。時におタネ婆さんが随分心配していたぞ？」

「心配？？あの婆様がかい？」

「最近書斎に籠りがちで食も疎らだそうじゃないか。いかんぞ？それで身体を壊しては元も子もないじゃないか。」

心配な気持ちを全力でぶつけて来る親友の気持ちと、身近にあって世話に当たっているタネ婆さんの心配性を知って、大楽は心底嬉しく感じた。

「ああ、君らにそう言われては敵わんなあ、今後はちと気を付けるでしょう。」

「本当にそうしてくださいよ？源太さんは無茶するからなあ。」

「悪かった悪かった。・・・で、今日は？」

笑いの雰囲気と暖かい雰囲気が流れていた室内の空気を一変させ大楽は本題に入ろうとした。

彼の先程とは打って変わった真面目な表情に久坂も気を引き締める。

「ええ、実は・・・藩論の事で・・・なんですが」

「航海延略・・・か？」

久坂が言葉を濁したその部分を大楽はズバっと明かしてみせる。

「はい。・・・本当に源太さんは情報通だなあ。お見通しですか僕の目下の任務ってのが・・・。」

「ああ、世間で騒がれている公武合体に近い政略だそうだな。しかも、よりにもよって我長藩で。」

「源太さん、今藩政を牛耳っている寵児の事はご存知で？」

グツと膝を付け合って密談しながら二人は近づき話し合うのだった。

久坂と大楽の久しぶりの議論が始まろうとしていた。

維新の礎（3）

「長井雅楽か・・・」

大楽は長藩執政の寵児と聞いて一人の名を口にした。
その通りだと言わんばかりに久坂も頷いている。

「その長井なのですが、源太さんはどの様に思われますか？」

「尊攘の志の今一番の障害であろうな・・・。」

ギリっと悔しそうに唇を噛締めて大楽は答えた。

「今はまだ攘夷論と延暦策、共に藩論として占める割合は5分程で
しょうが、このまま行けば

尊攘論がああ男の弁舌で覆されるも必死。」

「何か早急な手立てを考えねばならんか・・・。」

二人で考えあぐねていると、閉めた襖の向うから掠れた声がする。先程案内をしてくれたあのおタネ婆さんの声だ。

「失礼します。お茶お持ちしましたよ。」

「ああ、入ってくれ。」

スーッと襖を開けておタネ婆さんが盆に二つ湯飲みと茶菓子を持って入ってきた。

「あ、源・・・ご主人様。先程頂いた箱のお菓子出させていただきましたよ。」

にこりと皺だらけの顔を綻ばせて婆さんは言った。

「ああ、有難う。おタネ、菓子はまだ残っているだろう？部屋でも食べなさい。」

「ほほ！有難う御座います。・・・では、久坂様ごゆるり・・・」

笑顔のままおタネ婆さんは来た時の様にゆっくりと退出していった。

「ふふふ・・・」

「? どうしたんだ久坂君。いきなり笑ったりして?」

「いやいや、おタネさんは源太さんの保護者みたいだなあとお
思っ
て
の
お。」

「・・・久坂君・・・君ネエ・・・」

「いやいや、悪い悪い。冗談ですよ、しかし面白いお婆ちゃんだ
ね。
え。」

「・・・婆さんのひょうきんは今に始まったものではないよ。
私も最初は面食らったりもしたがね。」

「源太さんらしいですね。」

そう言って、二人は「ははは」と久しぶりに軽快に声を立てて笑
う
の
だ
っ
た。

「ああすっかり笑いこけてしまったなあ。本題に戻らないと。」

「うむ、そうだな。で？話は脱線してしまったが・・・長井をこのまま放っておく訳には行くまい？」

長井の名を聞いて、それまで大きな声で笑っていた久坂も表情は一変、真剣なモノへと変わる。

「・・・はい。」

「ではどうする？・・・討つのか？」

大楽は声を潜めて言い放つ。

その言葉に久坂は思わずゴクリと唾を飲み込んだ。

「源太さん・・・僕は・・・どうしてもあの男が我等の志の障害となるのであれば・・・殺ります。」

「・・・致し方ないが・・・あくまで最悪の場合だな。出来うる限り議論で勝ちたいものだがね。」

「ええ、政略を持って戦うが理想ではありますが、何か策を講じねば・・・。」

「ソレなのが、私に一つ考えがあるが・・・」

そう言って、大楽は一枚の紙キレを懷から取り出した。

維新の礎（3）（後書き）

こんばんは。

ご覧頂き有難う御座います。

此の度、ちとバタバタしておりまして・・・

明日はお休みさせていただこうかと思っています。

日曜再開まで、暫くお待ちくださいませ。

維新の礎（４）

大楽源太郎が出した一枚の紙切れ。

彼は口の端を上げて意味ありげに笑って見せた。

「これないと広めてみればどうかね？」

「え・・・？」

「但し、これを実行するのはまだまだ先だろうが・・・」

そう言って、久坂に紙キレを手渡すと何度も未だ開くなと念押しした。

夕方になって大楽邸を後にすると、久坂は一路村塾のある松本村を目指して歩いた。

杉家へ戻り、文の出迎えを受けた。

夕食を家族団欒の中で取った後、自室へと籠る。

机に向かつて先程大楽から渡された一枚の紙キレを封したまま手に取って頭上に掲げ、思案する。

（未だ開くな・・・か・・・）

何度も念を押す親友の顔が脳裏に描かれる。

そこまで言われると逆に開きたくなるのが人間の性なのだが、敢て親友の願いを裏切るまいと

久坂は句帖にそれを仕舞い込んだ。

「檀那樣？」

「ああ、お文か。どうした？」

何時の間にか、文が部屋の入り口に正座していた。

どうやら手に茶器を乗せた盆を持っているらしいから机に向かつている夫に茶でも運んできたのだろう。

「お茶をと思ひまして。」

「ああ、すまないね。」

そういつて茶器を受け取ると、お文は微笑を残して部屋を後にした。

久坂は再び思考を戻し茶を一口だけ啜って机の上に置いた。

（源太さん・・・僕はいざとなったら彼を斬りますよ・・・）

平安古の親友に声に出さず話しかける。

久坂は手近にあった書物を徐に手にとって適当な頁をパラパラと捲る。

その書物はいつの事だったか、亡師・吉田松陰から譲り受けた国学書であった。

「松陰先生・・・貴方ならばどうしますか・・・？」

久坂はポツリと今は亡き師に語りかける。
当然返る言葉は全く無いが・・・それでも言わずにはいられなかった。

彼自身、ここまで頭を悩ませたのは松陰との始めての手紙のやり取り以来だったろうと思う。

あの時も、こんな風に悩んでどう返事を書こうか頭を抱えたものだった。

（でも・・・このまま考えてばかりでは何も始まらない・・・。何か出来る事を模索せねば！）

手にとっていた書を畳みの上に置き、久坂は何かを決意したかのように、拳を握った。

（また京へ上がろう。他藩にこれ以上遅れを取らぬ為にもここで動かねば！）

翌日、松本村の杉家へ藩庁より一つの命が下る。

そんな決意を掲げる久坂に、翌日蟄居命令が出されるのだった。

維新の礎（5）

突然の謹慎命令に久坂は愕然とした。

「な・・・何じゃと！？何故に僕が・・・！」

「檀那樣・・・！」

「久坂君・・・。」

杉家では家族までもがこの信じ難い命令に動揺隠せない。
その晩から久坂は書斎に引き籠って、ただ黙々と書物を読み漁る様
になっていった。

それから数日経ったある日の事、杉家に珍しい訪問者が現われた。何時もの如く、庭先の掃除をしていた妻・お文は玄関先でその人物を見つけた。

「あら、お客様かしら・・・？」

パタパタと箒を壁に立掛けて客人と思しき男に近づく。彼女に気付いた訪問者はゆっくりと振り返りその姿を認めると薄っすら微笑んだ。

「こんにちは平安古の大楽と申します。久坂君が謹慎命令を下されたと人づてに聞いたもので。心配になって来て見たのですが。」

「・・・平安古の大楽様・・・良う存じておりますよ。貴方様がお越しくだされば主人も喜びましょう。ささ、是非にお上がりになって・・・」

お文は嬉しそうに大楽を向かえ、奥へと通すのであった。

「檀那樣。平安古の大樂様がお見えですよ？」

大樂を客間に通した後、お文はすかさず書齋に居る夫の元を訪ねていた。

嬉しい訪問者に久坂は我武者羅に読み漁っていた書物を勢い良く閉じ、ガバツと立ち上がった。

「まことか!？」

「ええ、ええ、まことに御座います。客間にお通し頂いてますよ、私直ぐお茶のご用意致しますので

檀那樣もお出でになってくださいな。」

そういってお文はツツツと静かに廊下を走り去った。

維新の礎（6）

客間でただ静かに座って待つ大楽源太郎のもとへ久坂は急ぎ足で駆けつけた。

「源太さん！」

ガラッと大きな音を立てて入ってきた親友に一瞬だけ驚いた顔を見せた大楽だったが直ぐに何時もの落ち着いた表情に返って薄く笑った。

「やあ、久坂君。この度は大変な事になったな。」

「ああ、やはり皆知っていたんですね。」

「あれだけ賑やかな君が顔を見せないとなると・・・やはりな・・・」。

久坂玄瑞謹慎との報は同志たちの間で瞬く間に広がり、実は先日か

ら心配した

彼の同志やこの大楽のような親友が訪問すること後を絶たない。

嬉しくも有るがどこことなく恥ずかしい様な悔しいような気持ちさえ持つ久坂にとって

実に複雑な訪問であつた。

「源太さん。この間お話した長井雅楽の・・・」

「ああ、こっぴどくやられたな。松陰門下の者、それに同調するものに目を光らせている。

だが、こちらとて馬鹿ではない・・・。」

「ええ、この間のアレ、どうでしょう？まだ時期尚早と言えましようか？」

そういつて久坂はこの間の大楽邸訪問で彼から直接に受け取った一枚の紙切れを

目の前に差し出した。当然未開封のままだ。

「うん。本来ならばまだ早いというべきじゃが・・・君自身がその調子では致し方ないか。

開いて見ると良い。」

「有難う御座います。これで上手くいくでしょうね。」

「君次第じゃろう。今後を考えればこんな所でまごついている場合じゃないしのお。」

ははと笑って大楽は言い放った。
釣られて久坂も笑みを溢す。

「これが上手くいけば僕は再び活動できる・・・」

そう思うと嬉しくてたまらない。

久坂は思い切って封を切ったのであった。

さて、彼等がこの後人騒動起こす前に、ここ長州藩の杉家に珍しい風が舞い込んだ事があった。

縮れ毛で近目の巨漢、後に薩長軍事同盟・大政奉還など数々の功績を残した土佐の坂本竜馬その人である。

竜馬は当時、勤皇党の主として牛耳っていた一族の武市半平太（瑞

山）より一通の

書状を携え遙々久坂玄瑞を訪ねてやってきたのだが、いかんせんこの男は態度が実に

堂々というのか飄々としてつかみ所がない。

当初、剣術に秀でた彼を試さんと楽しそうにアレコレ指示出して動いていた久坂もほとほと

暢気に構える竜馬の姿に困ってしまう始末。

さてどうしたものかと考えあぐねているところで漸く、彼は武市より預ったという書を懷

より取り出すのであった。

手紙を見て久坂はあれと思った。特別活動について書かれている訳でもない。

文頭の挨拶で始まり、あとはこの坂本竜馬なる人物を向かわせるに当たって、信の

置ける同士である故、臆怖なく意見を聞かせて欲しいとの事。この程度が記されている。

「まあ、今日来たのは陣中見舞いの様なもんでしょな。」

竜馬はがはっと豪快に笑い飛ばした。

それを見て久坂も苦笑いを洩らす。

「しかしながら、こちらの書状に有るとおり、盛んな活動と言われるまでも僕も

藩論は延暦策にやぶれご覧の様に蟄居の身。どうして良いもか・・・」

やや自嘲気味に久坂が述べると、先ほどまで笑っていた竜馬は急に真剣な面持ちになり、声を潜めて言う。

「それならばちくと案がありますがの。国抜の覚悟で事に望む他ない思うちよりますき・・・。土佐者達も例の長井いう男、長州者で斬れんならワシ等が斬っちゃう言よるがじゃ。」

そう言って、竜馬は暫く滞在し時勢を論じると再び土佐へ戻っていった。

その数日後には同じ土佐の吉村寅太郎が訪れこちらは具体的な計画を持ち込んで来るのであった。

維新の礎（7）

吉村寅太郎の訪問で久坂は、島津候上洛の意を知り大いに焦った。この時期に蟄居となっている我が身を恨みながら彼は必死に画策するのであった。

「この様な大事な時期に蟄居なぞしとる場合ではないというに……島津候が御上洛

なさるのならば志士達の士気も大いに上がる事だろう。それなのに、長藩は今だ

長井の詭弁に揺すられて満足に動く事すらままならん……！」

「……久坂君……」

ハッとして久坂は自分と呼ぶ声へ頭を上げると先ほどから対座している大楽が

少し心配気にこちらを覗っている。

「大丈夫か？」

「ええ、済みません源太さん。そうそう、少し前に土佐から二人も訪問者がありました

ね。ほら、吉村殿と坂本殿がいらしたのですよ。ご存知ですか？」

「ああ、そういえばあの時は君への訪問者が絶えなかったな。で、彼等は何と？」

先ほどからそれを思い出して考え耽っていたのでは無いのかね？」

大楽はすかさず話を切り返した。長年の付き合いで凡そ彼の思考は汲めている様で

共に良い理解者となっていた。

「その通りです。彼等から聞いた島津候上洛話を思い出して改めて自分の不甲斐なさを痛感しておりました。」

「ほう・・・その不甲斐なき自分を払拭する為に今から動くんじゃないだろうか。」

そういつて大樂は久坂が先ほどから握り締めている紙切れを指差した。

「あ！そうでした、此れを開くと言ってそのままにしとりましたよ。じゃ、源太さん開きますね。」

久坂は丁寧に折りたたまれた紙を広げ文字に目を通し始めた。

見る見るうち彼の表情は真剣なものへと変わる。

「成る程・・・これなら・・・いけるかもしれない。早速行動に出よう。」

「ああ、それがよかうて。じゃが久坂君くれぐれも慎重に・・・」

「判つとりますよ。これで長井との論戦もひと段落つくじやろう。」

「お、こりやいつの間にか夜更けになつとるな。それじゃあそろそろ私は・・・」

そういつて大樂は軽く礼をすると退出しようとした。

「あ、源太さん。待ってください。今日はもう遅いですし泊まっていってください。」

立ち上がり去ろうとする大樂の袖をグツと掴むと久坂は大きな声で妻を呼んだ。

「おうい、お文。ちよいと来てくれんか。」

「久坂君。急では悪い、やはり・・・」

「いやいや、折角ですし夜まで語らしましょう。源太さんさえ良ければ是非そうなさって下さい。」

そこまで言われればと大樂も彼の意見に頷き再び座布団へ腰を下ろした。

そうする内にお文がパタパタと小走りに走り寄って来た。

「檀那樣、何か御用でしょうか？」

「ああ、源太さんに泊まって貰おうと思うてな。すまんが支度を頼みたいんじゃないが。」

「まあ、それはそれは。大楽様お待ちになってね。直ぐに支度致しますわ。」

久坂の言葉を聞いてお文は何時もの明るい口調で嬉しそうに大楽を歓迎した。

翌日から久坂は支度を始めた。

これまでも長井雅楽の暗殺を企ててみたり、何度か建白書を提出してきたがもはや

長州藩にはそう時間は無い。

この航海延略策は維新政府の方針に近しい近代的なものであったが、当時尊攘思想に傾倒していた志士達に理解し難いものであった。

勿論久坂達過激な攘夷思想家もそれに該当する。
断固として長井論には反撥し、決起か脱藩かというギリギリの交戦
を続けてきた程である。

「よし・・・これを最後の建白としよう。これが通じなければ・・・
覚悟は出来とる・・・。」

藩主に対する村塾生を始めとする尊攘派志士らの最後の建白書を丁
寧に仕上げると、久坂は
それを周布に託すのであった。

これまで温厚な藩主は極刑を求める久坂らの建白に難色を示してい
たが、今回は覚悟の旨しかと
書き綴っている。どうするか・・・、久坂は周布の使いが去ってゆ
くのをただ見つめていた。

維新の礎（8）

最後の建白書を出してから、藩内は大いにもめた。

長井を処罰すべしという意見と、これだけの理由では罰するに値せずとの保守的意見の対立。

「御殿に申し上げます。長井殿の処罰を求めている久坂玄瑞らの意見をまたも撥ね付けては

彼等が脱藩なぞし兼ねぬと言う懸念があります。そして久坂らには匿うに十分な同志が他藩に

散らばっている。我藩にとって有益な逸材を切り離すかもしれぬ事はならぬと存じますゆえ、

これこの度は久坂らの言に従うが宜しいかと思われます。」

この一言から更に藩内は揺れた。

そうして藩主は遂に処すべしとの勢力に折れたのだった。

この事から、少なからず松門一派の政治的台頭が覗える。

数日後、長井は自宅謹慎を受ける。

（わしは間違いは言っていない。攘夷攘夷と口先で唱えるは容易いが、現実に諸外国の

力を知らん者の意見である。我論は今の世情にちと早すぎ理解者は現われなんだか……
（実に無念じゃ……。）

翌朝、藩内で重役についていた国司信濃が長井邸を訪れ直接長井に向かつて罪状を述べ

その日のうちに極刑を申し渡すのであった。

長井は胸中に得もいえぬ憂いを残しながらも最後はやはり武士として潔く刑を受け入れ

堂々とした成りで愛刀を腹に突き立てるのであった。

彼の最期は余りに整然としており、中々介錯を許さず独りで果てたその古武士の潔さは

政敵として戦っていた久坂達すら驚嘆するものであった。

こうして、彼等の道は再び開かれ、久坂も遂に蟄居を解かれた。

翌年久坂は再び国暇を得、江戸へと向かう。

この時は高杉や井上ら同志も共に出立しいよいよ村塾生が動き出すのであった。

江戸へ着いて以前と同じ様に、藩邸からいくらか離れた座敷を借りきり、久しぶりに土佐や

薩摩志士と大いに会談を果たす。

「いや、それにしても良う御座いました。長州が動けぬでは我等も

上手く事が運ばんでいやはや
苦勞がしたですよ。」

「申し訳ない。漸く長井を制する事に成功し、これから本腰入れて
尊攘活動に精を出せるというものです。」

武市の安心した様な表情に、久坂も苦笑いしながら言葉を返す。
高杉や井上、伊藤などもそれぞれに臨席する志士達と賑やかな対談
をしている。

ソレを見て、久坂は改めて自由を得たという気持ちになった。

藩邸へ戻り再び同志を集めての会談を開始すると、久坂は一つの案
件を脳裏に浮かべた。

「のう、皆口は堅いほうか？」

久坂の唐突な質問に一同は賑わいを一時止めた。

「な、なんじゃ？ 玄瑞よ、どうしたんじゃ？」

「正直に言うてくれ。」

久坂の突然の真剣な面持ちに一同は顔を見合わせた。

「で、玄瑞よ。どうしたんじゃ？」

解らぬという顔で高杉が答えを聞き返してくる。

「僕が言う事を口外せぬと言ってくれぬ限り言う事はできん。」

「おいおい、僕らは同志じゃないか。玄瑞に不利になるような事は一切せんのが当たり前」

「じゃろう？ 解った！ お主がそこまで言うなら口外一切せぬと誓おうじゃないか！」

「おお、そうじゃ。僕らも口外一切せぬ！」

松門の志士たちは口々に言う。

そこで彼等の言葉に信を得て久坂は漸く口を開いた。

「……品川御殿山に幕府が何を作つとるか知つとるか？」

「え．．．？」

「ああ、英国の屋敷じゃろう？それがどうかしたんか？」

久坂の言葉に、井上と高杉はすかさず反応する。

だがそれらには返答返さず久坂は更に言葉を続けた。

「そう、英国人邸じゃ。幕府が作らされたな。これをどうにかしちやろうと思うとるが。」

「成る程、攘夷攘夷と言うだけではなく実践して皆に知らしめる訳か！」

「うん。もうじき完成するらしいし、どうせなら夷敵が居座った時期に派手にやってやるのが効果あると思うてな。」

「ほう．．．で、折角出来た大層な屋敷を一瞬にして焼き払うんじやな？」

彼の発する言葉に面白いといった表情で皆喰らいつく。

「よし！やろうじゃないか。参加はここで今話しとる者だけにしよう。具体的な計画と日時・・・・・・・・」

—この晩から数回に渡る綿密な打ち合わせが成され、いよいよそれが実行されたのは
文久二年12月の事であった。

維新の礎（9）

品川御殿山・・・

夜も更け町並みもがらんと静まり返る頃。

久坂達は行動を開始する。

頭には黒頭巾を被り黒い装束で統一され忍びの風体で人目を忍んで歩く。

「良いか・・・落ち合う場所はあるの妓楼でじゃぞ？」

「解つとる。任せとけ！」

「よし、もう着くぞ！見とれよ夷敵共！！」

久坂、井上、高杉、伊藤等長州の同志達は揃いの装束を纏い、小声で指示と

気持ちを確認めあった。

ごくりと唾を飲み込むと、皆いっせいに手にする火種を屋敷の中へと勢い良く投げ込んだ。

「それ！」

声を殺して退却を促すと、一斉に彼等は蜘蛛の子を散らすように一目散に山から転げ降りる。

暫くすると、赤々と燃え盛る屋敷から英国人達がわらわら叫びながら逃げ出てくる。

後から来た幕吏の目を掻い潜りながら久坂達はそれでも目的の合流地目指して其々が必死に駆けていった。

やっこの思いで妓楼へとたどり着いた久坂は辺りをキョロキョロと見渡す。

「おお、玄瑞。なかなか早かったのお。」

「久坂さん、やりましたね！」

背後から同じく逃げ延びた同志達が安堵の声を上げる・・・が、その中に一人足らぬ
を気付いた彼は蒼くなって傍に来ていた高杉に詰め寄る。

「晋作！・・・井上は！？」

「は？・・・あれ？え・・・まさか！」

「井上さん・・・！」

皆井上聞多がその場にいない事に大いに焦り、辺りを見回すがそこに彼の姿は
見当たらず虚しく風が吹き抜けていくのみであった。

「まさかアイツ捕まったんか？」

普段飄々としている高杉も流石に色を失いしきりに周囲へ不安の表情を向けている。

伊藤に至っては蒼くなって呆然と立ち尽くすのみ。

久坂はしまったと悔いた。

彼はきつと逃げ遅れたのであろう、今頃どんな報復を幕吏や夷敵に受けているかもしれん。

これはまずい・・・同志の危機を思うと居ても多っても居られなく

なり再び今来た道を引き返そうと踵を返すのだった。

「あら、皆さんどうなすったの？」

ふと、こんな夜遅くに彼等に声をかける者が居る。

振り返ってみると、井上が鼯鼠にしている芸妓が一人戸口に立ってこちらを不思議そうにみているではないか。

「あ、ああ・・・実は呑みに繰り出して居ったが井上の奴がどうも逸れたようだな。」

「そうそう、それで探しとるんですよ。」

高杉と伊藤は詮索を入れられる前に咄嗟の判断でそう偽り文句を並べた。

そういうと、芸妓は何を思っかカラカラと声を立てて笑い出した。

「うふふ、井上様でしたらいらっしゃいましたけど？」

「な、なんだって!？」

「ええ、それはもう汗だくで駆け込んで来られるから驚きましたけど・・・でも嬉しいわぁ
そんなに急いでいらっしゃるなんて。」

芸妓が嬉しそうに彼の元へ案内すると、其処には何事も無く出かける前と寸分変わらぬ
井上の姿があった。

「聞多！！お前なんでここに・・・！約束と違うじゃないか」

「井上さん驚かさないでくださいよ・・・」

「ああ、すまなかった。こっちの方が逃げ込むには楽だったしな、
幕吏に見付りそう
になって已む無くコイツの所に逃げ込んだって訳じゃ。」

すっかり脱力する二人を前に井上は淡々と何でもないように言っ
てのけた。

ソレを見て、久坂はヤレヤレと胸を撫で下ろすのだった。

一夜明けてこの騒動は一種波紋を呼んだが、直ぐに幕府の対応策によって鎮静化
成された。

「なあ、余りそれほどの反応はなかったのお。次は何か考えあるのかえ？」

ある日、知らせを聞いた高杉は不満気に呟いた。

「・・・こんなもんじゃろう。真向対決をしたわけではないしのお。」

久坂も流石に思う程の成果が上げられなかった事に満足出来ぬ様子。

「ふむ、となると・・・だ・・・やはり攘夷は戦の規模でやらねばならんか・・・」

久坂の呟きに肩肘ついてブツブツ文句を言っていた高杉はガバリと起き上がった。

「玄瑞・・・お主、もう次手を考えとるのか!？」

「うん、ここは一つ馬関に戻ろうと思う。」

「馬関？もしかして外国船が通る海峡でドンパチやんのか？」

「勿論だ。長州藩として尊攘を提案するならまず自国が攘夷戦なるものを実践せねば

ならん。口先だけの思想に人は結局付いてはこんからのお。」

「へえ、じゃあ日ノ本初の攘夷戦って訳か。面白い！」

高杉はここで漸く意図を解し面白そうに目を輝かせた。

実際久坂が次々と過激な法を用いる事に驚きを持たなかった訳ではないが、

兎も角彼の考えには一つでも共鳴する所があったから跳ね除ける理由もないのであった。

維新の礎（10）

馬関には外国商船がよく行き来している。

久坂は高杉らと共に江戸から戻ると休む間もなく馬関へと急いだ。

二人は朝方から下関日和山山頂へ上り、丁度座るに適した天然石に腰を下ろしていた。

「むう・・・やつらこの国を我が物顔に航行しおるのお・・・。舐めおって、早う一泡吹かせてやりたいものじゃ。」

久坂は行きかう外国船を、高い日和山から見下ろしてギリと唇を噛締めた。

「玄瑞、慌てるな慌てるな。武備整えてからあれらに長州志士の氣勢を見せ付けてやりやあい。」

焦らんとあれらは毎日毎日飽きもせず行き交うてくれおるわ。」

かか、と高杉は扇子をかざして同じく見下ろしている。

この関門海峡は小倉との境にあって都市間を航行する商船が多い。

彼等は度々此処へ出てくるが、最近になって特に外国船に出くわす様になり苦い思いを抱え込んで

耐えて来た。久坂が提案した攘夷戦は夷敵めと苛立つ過激な志士にとって待ってましたと言わんばかりの

情報であった。

「よし！やるぞ！晋作善は急げじゃ、早々に支度を整えてやつらに日本武士の誇りを見せ付けてくれようぞ」

「おうよ！あのお調子者の夷敵らを長州の大砲で追い立ててやろう！」

久坂がぱつと立ち上がって拳を高らかに掲げ宣誓すると、高杉も楽しそうに彼を見上げた。

二人は顔を見合わせ、軽く頷き合うと連れ立って山を下った。

文久三年四月になって久坂は藩庁へ伺うと、江戸や京での一報を入れずかさず藩主へこう提案した。

「御殿にお願いの儀がございます。」

「・・・ふむ。何か、言うてみい」

藩主敬親は肩肘を机に付いた姿勢でのんびりした口調で久坂の言葉に返した。

「は、帰藩したばかりではありますが御殿には是非に馬関での攘夷先行を許可頂きたく存じます」

「攘夷先行とな？」

「はい。攘夷攘夷と口先だけで唱えたのでは誰も心から付いては来ません。ここは我が長藩が尊攘志士達の先駆けとなって攘夷戦に踏み切るべきかと・・・。」

「ふむ・・・。攘夷の先駆けか・・・そなたの申すももっとも也。よからう。やってみるがよい」

「はは！有難う存じます」

攘夷先行の許可を貰った久坂は、藩庁を後にすると喜び勇んで馬関で待つ高杉らの下へ急いだ。

「晋作、殿より許可が下った！やろう！」

「おう！目にモノを見せてくれん！」

久坂は自ら結成した光明寺党を率いて外国船との攘夷戦に挑むのであった。

維新の礎（11）

馬関に碇を下ろしたのは米国商船だった。

久坂は自ら集めた光明寺党なる武装団を率いて海峡へ寄せ、今か今かと時を待つ。

若く荒々しい光明寺党の面々はいつやるのかと久坂達纏め役に問い詰める。

幾日かにらむだけの日々が続いた頃・・・久坂は遂に決断する。

「あやつらは明日には碇を揚げて去っていくだろう。その前に打ち倒してしまおうじゃないか！」

「おお！」

「やってやろうじゃないか！」

久坂の怒声に血気盛んな光明寺党の若武者達はいきり立った。

久坂は尊攘を訴える者達の先駆けとしてこの一戦に全てをかけるつもりでいた。

彼自身も体中の血が沸々と滾るのを感じ、明日を今か今かと待ち焦がれた。

「おお、はりきつとるな。」

「晋作か……。僕も彼らの意気に飲まれてすっかりその気になつとるよ。」

「攘夷はお主にとって悲願じゃけえの……。逸る気持ちは判るがまあ落ち着いていけよ？」

「ああ、言われんでもわかつとる。」

双壁は互いに励ましあってそれぞれの床に就いた。

明日はいよいよ攘夷の先駆けとなる。

兄・玄機が果たせなかった攘夷・尊王の夢へ今自分は踏み出そうとしている。

この攘夷戦線は日ノ本にとって一つの大きな分岐点となる……

尊皇攘夷を掲げる志士にとっては尚更……

維新への道筋を確固たるものにする為にもどうしても避けられぬものとなるのだった……

一翌朝・・・

「ふわぁ、よう寝た」

「玄瑞く起きとるか？」

高杉は久坂と同じ天幕でぐっすり眠り、欠伸をしながら目覚めた。ふと隣にいる筈の友に声をかけた高杉はあれ？と首をかしげる。そこには既に久坂の姿はなく、綺麗に畳まれ整えられた寝具だけが視界にうつった。

「なんじゃ・・・早いのお・・・もう行ってしもうたんか？全く、起こしてくれたって・・・」

もそもそと文句垂れながら寝所を畳むと、高杉は着流しから整えた陣羽織に着替え久坂が居るであろう先陣に向かうのだった。

「もう直ぐここを外国船が通る筈じゃ！急げ！逃しちゃいけない！」

久坂の大きく澄んだ声が耳に入る。

どうやら一団の指揮を執っているらしい。

その声を聞いて高杉はにたと笑むと、声の方へ更に足を進めていくのだった。

維新の礎（12）

いよいよ馬関決戦の火蓋が切られた。

航海を続ける一隻の船を長州大砲射程距離ギリギリまで引き込んで沿岸に備え付けられた大砲数台が一斉に火を放つ。

今でこそ小さな大砲だが、当時はそれが天地に轟く爆音を唸らせる恐るべき兵器であり人々も勝機を予見するところであった。

久坂達も当然これならばあの敵船、静めることも可であろうと図り期待をかけていたので数発打ち込んで最初の弾が命中した際には飛び上がるほどに喜んだ。

「やった！敵艦に命中したぞ！！」

「ああ！おい！どんどん当てろ、沈めてしまえ」

久坂と高杉は祭りではしゃぐ子供の様に顔を見合わせて喜んだ。

彼らだけではない、一党はともかくこの一挙に加担した来島又兵衛ら長州武士達もこの一幕には震え上がり、彼らの気炎は直ぐには納まらなかったのである。

「久坂、見ろ。あの船逃げ去っていきよるぞ？」

「むう・・・急げ！もう一撃できっと沈められる。逃がしちゃいけない！」

せっかく攻撃を加えあと一押し of 敵船をここで逃してなるものか。彼は火砲を管理する砲兵に向かって再び命をくだすのであった。

「久坂、高杉。もっと兵を上げて関門へ数台の火砲を移動させい。」

「え？」

「奴等は関門を潜って門司へ逃げようとするだろう。それをさせぬ為にも。」

「追いやって追いやって最後の関で叩くのですか？」

「然り」

二人の背後から意見を出してきたのは侍大将来島又兵衛。

彼は軍勢を率い縦横無尽に操る軍才の持ち主でありこういう機知に富んだ人物である。

久坂や高杉もそれをよく承知しているからこそ、敢えて反論なぞせず彼の意見に素直に耳を傾けられた。

こうして新たな指令を受けた一隊はすぐさま関門橋まで急行するのだった。

維新の礎（13）（前書き）

※更新予定お知らせ（下記）※

維新の礎（13）

「「追え！打ち払え！」」

各方面より怒声が響く。

久坂自ら率いる一隊は海岸に沿って並べた大砲を一齐に咆哮させ船を沈めんと

する。長い時間が経過し、一頻攻撃を浴びせ弾替えに係る時にはすでに船は傾き

瀬戸内に係り赤く反射した日は船体をなぞって曲がり戦いの終焉を感じさせていた。

「やったか・・・！」

「うおおおおお！！！」

「わしらが沈めたぞ！」

隊士は老若入り混じって声をあげ歓喜している。
初めての攘夷戦はこれで一先ず成功といえよう。

久坂は近寄ってきた高杉らにふっと笑み安堵の溜息を漏らすと沈み
行く船にもう一度
視線を向け暫くは動かなかった。

「久坂、やったな！」

幕舎に戻って開口一番高杉はバシバシと背中を叩いて彼を励ました。
久坂の表情に若干の疲れと不安が見て取れたからである。

「晋作・・・僕はまだ緊張がとれんよ」

「ほうか・・・」

「本当に今日攘夷が行われたんじゃのお・・・自分でやっておい
て可笑しな話じゃが・・・
まだまだ実感が沸かん」

久坂は朝から気を張り詰め戦に皆を引き締めていた。その緊張の糸がまだ解けぬとあってか
少し硬い表情のまま力なくつぶやいた。

「ま、なんにせよこれからがまた大変じゃろうな。」

「うん・・・報復があるとも限らん。備えは怠ってはいけんし・・・僕もまた京へ上がり情勢を見てこんにゃいけん。」

久坂は高杉や遅れて入ってきた伊藤ら同門生らと軽くささやかな祝杯をあげると
早々に床についた。

彼にとって初の戦いであり、久しぶりの安眠となった・・・。

維新の礎（13）（後書き）

ちと、不調の為土日（20、21）はお休みさせていただきます。

維新の礎（14）

久坂は馬関での攘夷戦を終えると再び休む時間を惜しんで京へと向かった。

彼のここ数年の活動は慌しく、時代の変化という急激な激流の真っ只中であって
日は飛ぶように過ぎ去っていった。

「久坂君、久しぶりじゃ・・・」

後ろからかかった声に久坂がはっとして振り返ると、貫禄ある風貌の宮部鼎蔵が
笑みを浮かべて近寄って来た。

「宮部先生・・・、こちらこそご無沙汰しております。お変わりなく・・・」

久坂がまだ学問に励んでいる頃、九州旅行をした折に宮部を訪ねていった事が

あったが、あの頃から随分と年月が経過していた。

宮部はすっかり10代の幼さ抜けて一人前の志士として成長した久坂玄瑞の姿を眩しげに見つめた。

「久坂君の噂はわしにもよう届いっとよ？他藩とも対等に渡り合
い、政治工作も
実に見事なもんじゃ。・・・馬関の攘夷戦・・・あれは空念仏の攘
夷論者達のみ
ならず、正に敵味方を刮目させたよか方策たい！」

宮部は先の馬関攘夷戦を大いに評し、彼の成長振りを先輩として誉めちぎった。

「宮部先生・・・そういえば今宵は先生方とまた会合していただ
けるとか・・・」

「うん、こちらも久坂君達長州勤皇派とじっくり話がしたいと思うと
つとけんな・・・」

肥後勤皇党の若い志士とも是非議論して貰いたいとけん宜しゅう頼
む・・・」

宮部はそういつてまた軽く言葉を交わすと河原町へと歩き去った。

久坂は新たな志士たちとの会合に胸を弾ませ藩邸への岐路に着いた。

「久坂さん、そんなにはしゃいでどうしたんじゃ？」

のんびりと煙管を吹かしながら伊藤俊輔が珍しげに久坂を見ている。

「はしゃいじゃ居らん。ただ、これから肥後さんとの会合じゃし緊張してな。」

「ふーん。久坂さんでも緊張するんすね・・・」

のんびりしたその格好のまま伊藤は煙を出しながらだらりと話を進めた。

「おお！久坂君よう着たとたい！」

先ほど一時別れた宮部鼎蔵が彼の姿を見つけ、嬉しそうに手を振った。

久坂がそれに会釈をし室内に一步踏み入れると、中では既に肥後人と思しき面々が
座しており思い思い同志との対話にかかっている。

「宮部先生、お待たせして申し訳ありません。どうお話しようかとあれこれ考えあぐねて
おりましたらこんなにも遅くなりまして」

照れた苦笑いを浮かべ久坂は相応の若者らしく振舞うと、宮部はははと大いに笑い
満足気に頷いてよかよか！と彼の背を軽く叩いた。

「よしよし、今宵は我が肥後勤皇党の面々に久坂君より攘夷戦の事も含めてようお話を
してやって欲しい。酒を飲みながら有意に語らおうじゃないか」

「有難うございます。」

宮部は集ってきた十数名の志士らを寄せ長州攘夷戦の話をさせようとパンパンと手を打って

彼らの意識をそちらへ向けると、久坂に話を促した。

「皆、今宵は長州の久坂殿をお招きし此度の馬関攘夷戦の事伺おうと思う。」

「おお・・・そりは是非に」

「如何に長藩が戦うたとか?!」

肥後人たちは非常に関心を示し、久坂の言葉を待ち構えた。

久坂は、一つ一つ言葉を選びながら語っていた。

攘夷戦となるまでの軍備、戦略・・・

光明寺党他長州兵達の戦いにおける意気。

どのような戦いを演じたのか、敵艦（実際は商船であった）の動き。戦という場で彼らが実感した全てを彼は熱弁し続けた。

宮部以下肥後勤皇の志士達はじっと久坂の響く美声に耳を傾けていた。

。その中に一人、じっと睨む様に彼を見据えるものがいた・
・
・
・
・
・

維新の礎（16）

久坂は視線を受けて、ふと当たりを見渡した。

まずは自身が座している長州藩士らの席、そして宮部鼎蔵ら肥後藩士らを・・・

（気のせいかな？）

久坂が気にせず言葉が続けようとしたが、やはりどうにも視線を感じる。

ちらともう一度宮部を見た時、後ろ側に控えめに座している若い藩士の姿を垣間見た。

「あ・・・」

久坂は思わず演説を止め、彼が冷ややかな視線の主だと気づき思わず間の抜けた声を上げてしまったのである。

「久坂君どうした？」

宮部は突然言葉をとめた久坂を不思議そうな表情で見やる。

「あ、ああ・・・すみません宮部先生。あの、あちらの方は？」

あちらの・・・と言われ宮部は少し体を動かし、久坂の指す方を見た。

久坂の指すほうには丁度あの青年が居る。合点がいった様に宮部は成る程と久坂と青年の顔を交互に見比べた。

「ふむ、成る程。あれは河上と同門でな、加屋榮太と申すもの。いや、それにしても何か感心でもお有りかね？」

「いえ、先ほどから鋭い視線を以って居られた故・・・どなたかと思ひまして」

久坂の返答に続いて宮部が何かを言おうとした時、後ろに控えじつとしていた青年―加屋が口を

開いた。

「久坂殿、先ほどからの演説お見事でございました。つい先を先と論を求める余りに……」

兎も角ご無礼はお詫びいたす。宜しければ続きをお聞かせ下さいませぬか？」

おそらく久坂よりも年長と思しき加屋榮太の言葉は武張った印象からは想像つかぬ穏やかなもので、実に謙虚だった。

久坂は思わず自身も姿勢を低くして、彼の流れに自然沿う形となる。

「恐れ入ります。こちらこそ先程は無礼を致しました」

それら一連のやり取りを見ていた宮部は先を担う若者達の結束の糸が紡がれていくであらう様を見て、一人満足そうに微笑むのであった。

[illegible]

— — — — —

彼らが尊皇攘夷の志を以って結束を図らんとする時、同じく京の中
枢では着々とそれを阻止する
者達の手管が延ばされつつあった・・・。

維新を遅らせたあの事件まであと僅かの時間となっている。

坂や宮部ら尊攘を掲げ生涯を通じ全うせんと目論む純粋な思想家に
とって、維新は夢の入り口であり

また、万民の理想とする国家の始まりである。

彼らの生涯を賭けた戦いがここから始まるのであった・・・。

維新の礎（17）（前書き）

※サイト本編より先へ進みます。
暫く更新が乱れますが、ご了承くださいませ。

維新の礎（17）

藩政を牛耳った長井を追いつけた後は、品川焼討事件、馬関攘夷戦と久坂玄瑞を中心とした村塾

の志士達は連戦連勝の勝ち戦を味わい、弁舌にも一層深みが増していった。

外国人嫌いは兄譲り、火の玉小僧よと言われた久坂玄瑞も、20歳を過ぎ10代の頃と比べると

幾分大人の冷静さが垣間見える様になっている。

宮部鼎蔵は、若い盛りの志士達を、この成長を見守る親の気持ちでゆつくりと見渡すと再び久坂に視線を向けた。

「久坂君、君たち長州の活躍は誠に我等尊攘の士にとってこれ以上ない位の大きな成果だ。

これで、幕政派の連中に空念仏の攘夷論など誹謗もなくなろうて」

「評していただき恐悦至極に存じます。して、今後成すべきは天皇の賀茂、石清水八幡行幸出御座いましょう。

思うに、これに大樹を随行させるのは如何かと考えますが」

久坂は恭しく礼を述べると、続き様に次なる案件を提示した。

その瞳は燃えるように熱かった。

宮部は例え馬関攘夷戦の報復で大敗となろうが、実践する力を見せ付けたという成果は大きいと見て

評価していた。だからこそ、今成長した彼と面会しその論を肥後の

若い者達に聞かせる事を喜び見守っているのだ。

「將軍を同行させるのは良い案だな。これで如何に幕府が朝廷に従う構図となる・・・」

「ああ、天下に勤皇の世が真と示される大事な意味合いを持つ」

「將軍に従者の如き役割を持たせるのは面白からうて」

肥後の知己である轟武兵衛、河上彦斎等が久坂の案件に次々同意を示す。

「・・・その行幸自体が絶えてない事だが・・・どうしたものかな・・・」

流石にここで、宮部だけはやはり長老の位置にあって冷静なものだった。

「先生、攘夷祈願は全ての先へつなげる為の布石にすぎませぬ。我等の最終目的は日本統一であります故・・・ご心配の事は解ります、しかしこれを始めねば先が絶たれて仕舞いかねません」

久坂は熱意の眼差しを宮部に向けた。

彼は既に覚悟をしている目をしている・・・

宮部はそれを見て先ほども固かった表情を微かに緩ませ、静かに頷いた。

「そうじゃな。我等は元より命捨つる覚悟でここへ参つたのだ。日本御為に先々の日本人の為に命を張って訴え動かねばならぬ・・・いや、久坂君すまんのだ。行幸をまずは第一目標にじっくり遂行していかねばな。」

「宮部先生、さすれば我々肥後勤皇の志士は如何に動きましようや」

じつと座って話に耳を傾けていた肥後の加屋。

彼は、チラッと久坂を見てから、宮部に視線を移すと攘夷戦の話から先を促す。

「では、今後我等肥後勤皇党のすべき事は長州と共に勤皇派として結託し、主上の行幸を取り付ける。
攘夷の旗頭として是非ともその御祈願を古都たる大和にて行いたいものだ。」

宮部は淡々と大和行幸の詔を得るべしの論を唱える。
加屋はただ、宮部を見つめ深く頷いていた。

当然その願いは長州と久坂玄瑞共に願う事であり、天子を動かすという大事業こそ、志士達にとって天下を動かした大きな証と成るのである。

天子を得たものこそが、次世代を担う――

そんな権力争いさながらの謀略による戦いが風雅の都・京都で静かに成されていた・・・

今日の都は奈良から遷都されて長い。

1000年の都なんて言う位の歴史が流れている。

これまでも、野心家や多くの人々が憧れ敬ういしにえの都であったが、この江戸末期の京都は暑く

燃え上がらんばかりに、日本の回転を働きかける志士達でゴった返していた。

当然、幕府側の取り締まりや、組みする者もあってか、穏やかで風情ある町並みは一転し、ジリジリと

殺気すら聳く・・・そんな戦場染みた空気が流れていたのである。

「そうじゃ！天子様さえ攘夷祈願をしてくだされば、我等勤皇の志士が台頭できる！」

「我々は日本の為に奔走するんじゃ！天子様とお分かりくださる」

志士達は熱くなって、次々と熱意を言葉に変える。
宮部も久坂も・・・歴史に名を遺した人々は皆、こうした人々の入
り混じり論ずる姿に吉田松陰達先人の
志をみつめていた。

『草莽屈起』

この言葉がやがて、久坂やこの場に集まるもののみに止まらず、萩
郷里にある盟友によって、より実践的な
組織とし実現する事になる。

久坂玄瑞達の戦いは真っ白だった景色に次第に彩りを与えられ、錦
絵の如く燃え盛るのである・・・

維新の礎（18）

チチチ・・・とスズメの音がする。

鈴なりの愛らしい声は誰が聞いても、優しい目覚めを与えられる。

「あたた・・・昨日はちと飲みすぎたかの」

久坂はゆっくり額に手を添えてのそのそと上体を起こした。

ふうっとため息が出てくる。

いくら、声高々と議論し同志達と酒に論に興じた充実の時間であったにせよ、少々酒を

煽り過ぎてしまったか。

医者のお出自である自分に恥ずべき事であり、彼は一人ごちた。

（ふう・・・本当に、次から自制せんな。久しぶりに宮部先生達と盛り上がったからとて・・・）

久坂は、ふと熱弁を振るう自分に向けられた視線の記憶を手繰っていた。

確か、宮部に紹介された人物がいた。

河上彦斎と同門の友だと言っていた気がする。

いかにも、とっつき難い肥後もっこす氣質を漂わせた・・・しかし随分謙虚な男だった。

謙虚というか、誰に対しても丁重でこちらが身を縮めてしまう程の印象。

「―本当に飲みすぎも大概にせいじゃ！！道理であの男の名前すら忘れちよる！！」

苛立ち交じりにバシンと盛大に手近な本を畳に叩きつける。

完璧な八つ当たりをする所が彼の若さであろうか。

無機質なそれは一向に響かず、余計苛立ちを募らせると思い、彼は手を止めると床から這い上がって着物を手に取った。

襦袢の上から灰色の着物を纏い、しっかりと帯を結び、濃い同系色の袴の紐に手をかけた所で久坂は動きを止めた。

（そういえば、あの肥後者も同じ色合いだったな。真似じゃ思われ
ては・・・）

と考えたが、きっと相手は年長。

そんな仕様もない子ども染みた考えは到底なからう。
そんな雰囲気であった。

「何とも情けないな・・・親の手取られて嫉妬する子どもみたいじゃ・・・」

昨日は、自分を認めてくれた吉田松陰の盟友・宮部鼎蔵との再会であり、松陰に会うかの様な懐かしさすら覚えていたというのに・・・。

横にあった加屋榮太をわが子の様に紹介された瞬間、妙な意識をしていたのだ。

何ともお粗末な感情だった。

しかし、久坂玄瑞も今や志士達の指導者という立場にある。

そんな幼い感情はすぐに吹き飛ばし、肥後の人々とのこれからの共闘手段をどう執って行くのか。

すぐに、志士としての思考に切り替え、策を浮かべるのであった。

朝餉を摂って、久坂は自室に戻るや机に重ねられた封書を手に取った。

乱雑に重ねられたそれらは、他藩からの意見が綴られた機密とも言えるものから、芸妓からの付文なぞ様々であった。

その中に、妻への手紙を見つけ、ふと目をとめる。

―尚々、杉皆々様へよろしく御申しなさるべく候・・・
まずまず、御無事に御暮しなされ候よし・・・

悦び参らせ候。拙者も此処より、御慎みにて引籠もり居り候へ共、気分には少しも相かはり候事無之に付き、

御案もじなさるべく候・・・（中略）

筆末ながら、杉皆様へよろしく御伝えなさるべく候。御用心申すも愚かに存知候。

めでたくかしくー・・・

見覚えがある。

自分はいつも妻に宛ててだけは、こうした平常の言葉を綴る事ができた。

久坂には多くの人と接する機会もあって、当然文のやりとりも日常的な事となっていたが、それでも

久坂文・・・妻にだけは普通に落ち着いた筆を取れたのだ。

（結局あの人には敵わぬものだ・・・）

京女・・・取分け遊女・芸妓達は萩の妻と対極にあって、華の都で洗練された美しさと艶やかさを際立たせ

志士達を絶えず魅了するのである。

久坂も若さ故、例に漏れず僅かながら女達の容貌仕草には魅入る事もしばしば・・・。

芸妓の中にも馴染みになりつつある、女性がありー

時折、こうした妻の筆跡に触れ、己の返書を見るとチクリと胸に痛みを覚える事も已む無きことであった。

志を女色に埋もれさせるその理性をお文の存在が留めている様で、久坂は思わず苦笑いする。

（本当に・・・流石というべきか。杉家の血筋とは何とも・・・知らずの内にあの人を頼っている・・・）

久坂は幾年前の別れ際、涙松に一人控え目に立ち尽くす彼女の・・・お文の姿を脳裏に浮かべた。

まだ幼かった妻の記憶。

彼女は今どんな女子に育っているだろうか。

ふと縁側に歩み出て、久坂は空を見上げ遠く妻の姿を思い描いた。

きつとお文は大人の女になって、清らかなままに己を待っていてくれるだろう。

そこまで、思いを馳せて、久坂は我にかえった。

先ほどから他人の事、女の事ばかり。

全く持ってこれからすべき重要な懸案とは無縁の世界。

今日の自分はどうかしていると一人ごちて、久坂は改めて書類の山に目を通すのであった。

維新の礎（18）（後書き）

＊蛤NET移転先のご案内＊

>http://hamagurinet.web.fc2.co
m/

こちらへの更新より1話早く仕上がっております。

読みやすいフレームタイプも御座いますので

上記URL掲載の従来型小説ともども宜しくお願
致します。

維新の礎（19）

いつの間にか、時は過ぎ去り元号が変わってから3年が経過していた。

文久3年（1863年）・・・

長州藩という雄藩の存在は、他藩勤皇派にとって頼りとなる存在であつた。

彼等は進んで、尊攘思想を掲げる者たちを身分問わず受け入れ金子の援助などしていたから、

藩邸やその周囲は志士達でごった返していた。

・・・最も全てが思想の為、勤皇が為命顧みぬ志士であつたと言ひ切れぬ所もあつたが。

従つて、その他藩対応にかける熱意と共に、接待しながら共闘を求めつなかりを深めるという

方針は、多額の財を掛け豪華を極めたから、京の茶屋揚屋、料亭などは彼等長州藩の人間を

「長州様」と呼び、鼻肩目に呼んでいた事もある。

まさに、佐幕攘夷、開国派といった対する思想主義を持つ人々からすれば恐ろしい敵とも

言えようか。

殊に、幕府より大事を預かる会津藩などは、この長州の過激な活動を苦々しく見守つていても

どうする事も敵わず、対策を考えあぐねていた。

今このご時勢、長州藩とその思想に同じくする諸藩志士が京の都を牛耳り朝廷内部の掌握力も

事実上操作する力を有し絶頂期にあった。

久坂玄瑞もまた、志士達の指導者として、如何なくその才を発揮していた。

・・・が、ここで思わぬ転機を迎える事になる。

今日、尊攘思想を掲げ京を中心に独走する長州藩に大きな事変が起ころ。

長州の朝廷政権独走を危ぶんだ薩摩は、同じくどうしたものか手を拱いていた会津に、長藩系

志士の京追放の一策を持ちかけるのである。薩摩と長州は共に犬猿の仲であり、かつて薩摩

志士には長州によって京政界から落とされたという恥辱の念が残っていた。

「会津に諮って長州藩の警護役を解く策を講じようではないか」

「新兵衛の仇もあろうが。あの一件で我等は御門警護を解かれ都を追われた」

「今こそ、その恨み晴らすべし」

薩摩も長州も肥後にせよ、朝廷の御門を警護する役を担い、遠く藩より参集し都に滞在しており

尊攘や佐幕と関係ない藩の責務として暫しの滞在をしていた。

それが、あの黒船来航より思想熱が急激に上がり安政の大獄を境に一気に恨み骨髓とあの事件のあだ討ち

染みた思想熱は更に急上昇。その流れはこうした藩に対する警護役という参集に於いても思想色を見せ

それぞれ勤皇党なる組織を生み、それに連なる人物が多く京へ入ってきていた。

当初より、薩摩と長州は「芋」「猿」と同じ思想を掲げる藩としていがみ合っていた。

当時の日本では藩は即ち一国の意識で区切られていたから、他国人という蔑視は已む無いものであった。

そんな犬猿の仲の薩長を更に悪化させる事件が勃発する。

何者かにより、姉小路公知暗殺が成され、その際田中新兵衛（人斬新兵衛として恐れられており、土佐勤皇党

党首・武市瑞山とは義兄弟の契りまでした人物）の刀が現場に残されていたのである。

その殺人犯として新兵衛は当然疑われ、尋問の最中に自ら愛刀を掴み腹に突き立て自刃したのだった。

結局真相はわからぬままであったが、彼の属する薩摩藩にまでその嫌疑は及び、遂には冤罪とも知れぬままに

皆揃って警護役を解任され、泣く泣く引き下がるという屈辱に塗れたのである。

薩摩藩内でこうした長州藩に対し、田中新兵衛の仕業とも何とも解らぬ不可解な事件とその罪を問われた事実が

事件後モヤモヤとしこりを残し、何時の日かと憎しみが重なっていたのだった。

だからこそ、この長州藩の独走態勢は耐え難く防ぎたいという気持ち
がここで爆発したのである。

そこへ丁度舞い込んできたのが長州志士達の「大和行幸」である。

大和行幸と言うのは、帝を日本の原点である奈良大和へ連れ出し攘
夷祈願させるものであり、これが成れば

日本に尊攘思想が確固たるものとして、長州藩の地位も朝廷の権限
も一層強固なものへと代わる大きな意味を
持っていた。

薩摩は会津に打診し、その動きをなんとかしてでも止めると、日々奔
走するのであった。

「我等を理解くださるお方に働きかけ、会津と共闘し長州の企てを
阻止せないかん」

「おう。これを潰し、貴奴等の薄汚い魂胆を暴いてやれば、おい等
と同じ様に恥辱を味あわせてやれる」

「何が何でも長州を朝敵にしてやろう」

そんな密議が成されたのは深夜・・・
日付も変わる頃だ。

・
・
・

古い時計は西洋の文字盤を日本向けに改造されたものだが、正確に時間を示している。

それがある藩士はちらっと見て、目を細めた。

今丁度日が変わって8月14日となった所である・・・

維新の礎（19）（後書き）

維新の礎・・・ここで終了です。

ここから、久坂玄瑞史、幕末史として重大な事件が続きます。恐らくご存知の方多いと思いますが、どうぞ最後までお付き合いくださいませ。

終焉の炎（1）

数日後の8月17日・・・

薩摩と会津が密かに密議を凝らし、朝廷掌握を進める一方、久坂にとって一つ変化が起こる。

これまでの功績を鑑みても彼は藩内で大きな役割を担い、日本の中で長州藩の存在をこれほど

大きくし朝廷の覚えも地位も確固たるものとしたそれを評さぬ事はあるまい。

この日、彼は藩庁へ向けて改名届けを提出し玄瑞という通称を「義^{よし}助^{すけ}」と改め

武士身分に昇格している。

かつての彼は医者坊主であった為、本来ならば頭を丸めるのが習いである。

兄・玄機が憤死してから、いや・・・それ以前から武士という存在は彼の中で特別のものであり憧れて止まぬものだった。

兄から継いだ久坂家と兄の刀。

彼は大きな役割を担う長州藩内の指導者的存在でありながら、政務役などには就けぬ身であるが

それでも、此の度武士の名を頂戴した事だけでも彼にとってこれ程無い幸福で、武士として死ねる事だけで満足であった。

話は戻るが、久坂は大小を差し、まだ短めな髪を纏め上げ結うと少し先日を思い出していた。

8月13日、多少の曲折はあれど大和行幸は何とか取り付ける事ができた。

その翌々日学習院での打ち合わせ、首謀者ともいえる真木和泉が「背水の陣の手立て」と称し

た、ある策を持ちかけていた。

これが実は久坂にとって、頭の痛いものである。

真木の「背水の陣」とはこういうものだった。

―天子が京都を出たら二度と帰らじ・・・

大坂遷都を目論み事を進める。その為に京の都はその機能無くすべく

炎上させ焦土と化す。

伊勢宮を本陣とし、関東入りを果たし討幕に向かう。―

真木は久留米の神官である。

宗教的な信仰概念はともかく、京都という長い歴史で築かれた都を焦土に変えるなど

一般的な思考では正気の沙汰ではなからう。

流石に、過激な尊攘志士を束ねる久坂もこれは途方も無い事だろうとたえた。

「真木さん、とにかくその一件は桂さんに相談していただかねば・
・」

そういつて、一先ず真木の説得を桂に預けるしかなかった。

真木も微かに苦笑いして「久坂らしからぬ慌てぶりよ」と軽く言い漏らして退室して行った。

久坂にとって、まだまだ心配種はある。

吉村寅太郎、土佐脱藩の郷士である。

彼は先に大和へ向かい、兵を整えて行幸を待つと言って、軍資金を調達しているから僅かに

出せぬものと訪ねてきて以来である。

彼が今どうしているのか、多忙な久坂に気にする余裕もなかったが、いざ真木の件で考え悩み

始めると、次々こうした悩みの種は出てくるもので、吉村に渡した30両で彼が何を仕出かそうと

するものか、心配になった。結局吉村とはこの30両を渡した日が永別の時となったのだが・・・。

次々と訪れる人々。

過激なものも居れば、慎重なものも居る。

久坂は当初長州藩という雄藩の重要な指導者として、皆を引っ張り纏めてきた。

その立場が徐々に変わろうとしている。

彼も、もう20歳半ばに掛かる年である。

気付けば、彼より先に進み倒れて行くもの、または新たな指導者の一人として真新しい思考を広めるもの

様々な人が老若関わらず増え、己の存在は徐々にそれらの大きな波に飲まれ埋もれていく気さえするのだった。

「時代が確かに変わって来ているのだろうか・・・」

そういった彼の頬を夏の暖かな風が撫でる。

ふと、のんびりした気持ちにさせられてポツリとつぶやいた。
かつて吉田松陰が自分たちを見つめ見守っていたであろう、その心境が今自分に当てはまる。

・・・先生、僕は先生の志の一部なりと果たせておりますか・・・

先生の草莽屈起に近い形が確かに誕生しようとしとりますよ・・・

今も魂となって見守ると言って消えた松陰に語りかける様に思いを馳せる。

久坂は、近くに迫る影にまだ気付かずにあった。

8月18日前日の出来事である。

終焉の炎（2）

文久3年、8月18日―

長州藩邸にあって横になり、久しぶりの休息をとっていた久坂の耳に聞いて久しい大砲の轟音が
鳴り響く。

「何ごとじゃ!？」

ガバと布団を跳ね除けて身を起こすと、同時に襖がガラリと開いた。
その向こうに、寺島等同門の士が青白い顔で佇んでいる。

「久坂さん! 起きとられますか!」

「寺島! 今のは夢ではあるまいな、あれは・・・」

久坂もドクドクと心音酷く、あの轟音がまだ脳内に響き木霊している様で、その表情は硬かった。

襦袢から、慌てて傍に掛けてあった着物に袖を通す間も寺島はじつと座って考え込んでいる。

やがて、身支度が済み短刀を腰に差すと、久坂はもう一度訪ねた。
俄に信じがたい事だけに、否定の言葉を聞きたかったが・・・。

「久坂さん、あれは確かに大砲の音です。あれ一発以降何もないが、間違いない現実起こった事じゃ」

馬関での出来事が強く記憶に影響しての夢事と信じたかった久坂の期待とは裏腹に、寺島は信じがたいといった表情で現実を口にする。

耳に届いた咆哮はあの一度だけ、それっきり不気味な程に静寂の闇につつまれ今は猫の鳴き声一つない。

久坂はゾクリと身を震わせた。

（何ぞ、良からぬ事でもあったか――・・・）

その心中察してか、寺島は再び口を開く。

「久坂さん、まだ起きるにや早かろう。もう暫く様子を見て、兎も角最悪の事態に備えここで情報が
入るまで善後策を懸案して待とうではないですか」

「・・・・・・あ、ああ。夜が明けて日が差せば何らか動きがあるうな。その頃に桂さんを訪ねて
みよう」

二人はそうして、時が経つのを待った。

いつもなら、まだゆったり眠っている時間だったが、今の彼等は夜明けがこれほど待ち遠しく覚え、

陽が昇るのを今か今かと待ちわびていた。

どれだけ待ったろう。

随分長い様に感じられる。

藩邸内はいつもならば、穏やかに人々の動きが始まるのだが、今日は――

「戦が始まるのか！」

「何があった！」

「あの轟音を聞いたか」

「御門の方で何ぞあったらしい」

どこかと廊下を歩きすれ違う毎に同じ会話が繰り返されている。流石にこの日の藩邸内は情報が錯綜し、藩士達はやや混乱した様子

でバタバタ邸内を走り回っていた。

中には、甲冑を取り出し身につける者までいる。まるっきりに、戦に向かう武士の井出たちである。

久坂と寺島は、藩士達と二、三会話を交わし、その間をすり抜けながら桂の自室を目指した。

「久坂さん、戦って・・・」

「解らん。が、出動命令が出とるらしいからな、これはただ事じゃない」

桂の部屋へたどり着くと、彼は返事を待たずに襖を勢いよく開いた。

「桂さん！」

「久坂君か、困った事になったぞ」

部屋には周布政之助も居た。

二人は何時に無く、沈痛な面持ちで対座している。

何があった・・・と久坂が口を開く前に目を伏せていた周布が言葉を発する。

「落ち着いて良く聞きなさい。我等は薩会に都を追われるだろう・・・」

周布がそれから伝えた言葉は久坂にとって余りに衝撃的だった。

―早朝、長州藩士らが警護を預かる堺町御門へ出向くと、そこに居るはずのない会津、薩摩の

藩兵が陣取って門を固めて彼等の行く手を遮ったという。

銃口を向け、無理に通ろうとするならば発砲するという事である。

その信じがたい出来事に、藩兵は益田親施家老等に一報を出したそうで、その報を聞いた家老達は

100余名の藩兵を率い、堺町御門に向かった由。

今現在も薩会両藩と長州藩は御門前でにらみ合っているとの事だった。

全て聞いたところで、桂は大きくため息を吐いた。

「昨夜の内に、薩会が中川の宮を動かし、宮から主上に行幸の取下げを申請・・・我等の目論見は全て水泡に帰したという事になる・・・」

「全て・・・」

「ああ、九門は会津が押さえ、三条様以下七卿もまた禁足を命じられたそうじゃ」

周布もまた、苦い悔しげな表情で吐き捨てる様に言い放った。
久坂は目の前が真っ白になった。

これまで築き上げて来た事が一夜にして瓦解した気がした。

ふと、藩邸外が騒がしくなった。

東久世卿が馬を飛ばして川原町長州藩邸に来たのだ。

それとほぼ同じくして、三条、錦小路、四条卿らがやってきた。

聞けば、一様に罷免された挙句謹慎処分に相成ったらしく、その声は恥辱の苦痛に満ちていた。

「斯くなる上は、鷹司様の元へ上がり、事の次第を伺って参りましよう。」

久坂は努めて冷静な口調で提案すると6人の卿は同意し物々しい護衛を擁した一団が藩邸より
鷹司卿邸へと向かったのである。

終焉の炎（3）

鷹司邸でも関白は何も知らぬとの由。

何も聞かされておらず、参内もままならぬ状況であると、苛立ち紛れに話していたが

御所からの報せが届くや、否や直ぐ様参内せんと、退出してしまつた。

邸に残された久坂等は、呆然とその後姿を見送っていた。

卿がバタバタと出て行くと入れ替わって、彼の執事が邸内に戻り久坂達の前に現れたので

ある。彼の手には一通の書が握られている。

「あ・・・鳥山殿」

久坂は何事かあったな・・・とその手元に視線を巡らせた。

鳥山は息を弾ませ、暫く黙って立ち尽くしていた。

久坂も、6卿も、ただ手の中にある書簡と呼吸を整える彼を見つめ言葉を待っている。

やがて、落ち着いたのか手の中の書簡を開くと言いつ放った。

―堺町御門警護の儀、思し召しを以って、只今より免ぜられ候。

尚、追って沙汰ありなされ候まで、屋敷に引き退くべく・・・

その沙汰を読み終えるや、鳥山は逃げるように退出していった。また、それと入れ替わって柳原中納言も勅使として訪れる。

「大和行幸のことは、今その時にあらずとて暫し延引とする。長州藩諸藩尊攘の士においては
多人数集合なぞ粗暴の挙動無きよう・・・」

「何ゆえの沙汰にございます」

久坂は青褪め動けぬ6卿の後ろから進み出、問うたが中納言に一瞥され答えを貰う前にまたもや逃げられてしまった。

そこへ、今度は三条卿と土方久元という武士が親兵を集め駆けつけてきた。

三条卿は謹慎の身なれど、居ても立っても居られず、馬を走らせてきた様だ。

「久坂さん、これはどうしたことか」

「会津薩摩が中川の宮を通じ、主上を説き伏せた様じゃ・・・我等は御門警護を解かれた」

「主上を・・・？攘夷の筈ではなかったのですか？！」

「その筈なんじゃが……」

ふと、彼に疑問が湧き上がった。

天子様は攘夷論を推してくださっていた筈で、ご自身が攘夷主義を唱えていたのではなかったか？

なのに、何ゆえ今中川の宮が説得したとて、攘夷親政の儀を取り下げられた……

「あ……」

久坂は思わず考え顎に添えていた手を離した。

主上の「攘夷主義」は我等と同じであったか否か。

自分達尊攘派は主戦的な攘夷論を唱えて来た。

当然攘夷とは外国勢力との戦争をするという事だと信じていたが・

・

一報で、主上は一向にその「戦え」との勅は下されたことが無い。

ただ、我等尊攘の志士や公卿が囁く異国批判にのみ賛同し、直接的に外国を撃つ事は詮議した事すらない。

要するに、単純な異国嫌い……。

だからこそ、戦勝が届く間は自分達に褒勅を下されても、敗走が伝えられるや此の度の様に無謀なりと行幸すら

いとも簡単に蹴つてのける。

それどころか、過激志士の活動は日本の安泰を損ねる危険な動きである。とさえ見ている風にも感じられた。

そして尊王と攘夷の影に隠された討幕論も然り――

・・・何より、主上は公武合体を許した方だった。

和宮と大樹との婚儀を当初反対したものの、元々親幕の心も持っていた主上は許し降嫁を実現させてしまっている。

長州や諸藩尊攘派の推した攘夷親政の影に「討幕」の意を孕んでいると気付いた会津と薩摩は公武合体派公卿である

中川宮を担ぎ此の度の政変に至ったのだ。

中川宮が主上に討幕の意図を伝え、長州こそ危険な思想であると説くのは然程難しい事ではない。

もともと親幕思考にあった主上だから直ぐにでもその説得に乗せられるだろう。

久坂は歯痒さに唇を強く噛み締めた。

そんな中で、ふと師・吉田松陰が口にした言葉が脳裏に浮かぶ。

（残念ながら長らく栄華の中にあつた公卿様では何も変わらぬ。これから世界の強国相手に立ち向かって行くには、

幕府も、朝廷も、我が藩すらも必要ないのだ。日の本にある草莽達が立ち上がる他ない。）

久坂はハツとした。

今、正にそれを実感する時である。

主上は全てを解さず、恐れながら己の思想を依るべきものに非ず。

朝廷にしがみついても、結局何も変化がない、無駄に時間を割くばかりだ。

師の言葉はあの時の自分には難しく、日本にある権力の全てを否定する言葉に理解する事など到底出来ぬものだった。

しかし、今この局面でそれがどれ程確かなものであるか、久坂は感じ取っていた。

今この鷹司邸に集った七卿と藩士達の息巻いた言葉を聞いている彼の心はは如何しようもない虚しさで溢れていた。

その心のままに、ぽつりとやって来た桂に進言する。

彼は心底疲れきっていた。

「勅使の要請通り京都撤退をいたしましょう。」

その言葉に清末藩主、岩国候をはじめ、穩健派の幹部達は賛同し撤退を命じ始めた。

この後、再度勅使が訪れ来嶋又兵衛、真木和泉等強硬派の者達もしぶぶながら、ついに撤退の支度を始めるのであった。

公武合体の流れが急速に都を包み、尊攘派はその殆どが息を潜め街は昨日とは一変した雰囲気纏っている。

久坂達長州藩士や長州系公卿達は鷹司邸を退去した後、暫く妙法院に止まり幾多評議を重ねては時を待った。

しかし、早急な挽回の目途も立たず、遂に8月18日晩に長州へ完

全に撤退する事が決せられたのである。

その晩は雨が降り、夏の暑さも忘れる酷く冷たい雨水が滴っていた。

終焉の炎（４）

妙法院本堂は狭い造りだったので、藩兵達は殆どが境内の屋根の下で肩を濡らしながらじっと暗い

夜空を見上げ耐え忍んでいた。

京の藩邸を出て、ここで更に京都撤退。

皆身心ともに疲れ果てた風であったが、それでも眠りにつけるものは殆どと言っていいほど居なかった。

彼等にとって今日一日がとてつもなく長く重い日になっていた。

雨に打たれる彼等に、益田家老が帰国の日程経緯を簡潔に伝えるが、もはや兵士等に声を上げるものは

一人としていなかった。すっかり意気消沈という所である。

久坂は会議が終わると、藩兵の中に入り込み経緯を伝える重苦しく震える家老の声に聞き入りながら

一つ一つ言葉を組み立てる。

声が止むと、辺りは静寂に包まれ雨の音だけが無常に響き渡った。

彼は深く目を閉じ、その静寂の中に、哀愁帯びた美声を暗い夜空に響かせたのである。

―世は荳菰と乱れつつ

茜さす日もいと暗く蟬の小河に霧立ちて、隔ての雲となりにつけり

あら痛ましや^{たま}霊きはる、内裏に朝夕殿居せし

実美朝臣 季知卿 壬生 澤 四條 東久世 其の外錦小路殿

今うき草の定めなく、旅にしあれば駒さへも、進みかねては嘶ひ
つつ

降りしく雨の絶え間なく、涙に袖の濡れ果てて

これより海山あさぢが原、露霜わきて葦が散る

浪華の浦にたく塩の、からき浮世は物かとはと

行かんとすれば東山、峰の秋風身にしみて、朝な夕なに聞きなれし

妙法院の鐘の音も、なんと今宵は哀れなる

いつしか暗き雲霧を、払いつくして百敷の、都の月をめて給ふらん

文久三年八月十八日、おもふことありてこの舞曲をうたひつつ都
をいで立侍る―

久坂義助が詠う即興の今様である。

皆、ぼんやりと聞き入っていた。

もとより、彼の美声は今日の芸妓達に持てはやされ、時折彼が即興
の詩吟を詠へば、

「長州の久坂はんが通る」と女達が我先にとその姿を人目見んと寄
り集まってきたものだった。

その中には、深く情交のあった辰という妓も居た。

かの芸妓とは、文久元年頃か・・・上洛活動を本腰入れて始めた頃、懇意にしていた揚屋でその

美しい成りと裏腹に快活な彼女を見初め相方に据えたのが始まりで、以後何かにつけて宴席に彼女を揚げていた。

辰にはこの事変の以前に最後の儚い宴を済ませている。

郷里で待つ妻に申し訳ないと思いつながらも、想い馳せる辰にどうしても会わずに居られぬ己が居た。

三本木に寄ったのはすっかり日の落ちた刻。

只管に彼女を求めて走った記憶はまだ新しく、温もりも手に残っている。

武士の自分を見せるのも、逢瀬もこれが最後であろうと、悟ったからこそ今は何もかも振り切っても会いたいと願ったのだ。

彼女の室についた頃、丁度違う座敷に揚がっていた様で、そこは漆黒の闇が広がっていた。

丁稚はいたから、消して真っ暗闇ではなかったけれど、辰路の居ない室内は闇の様に映っていた。

「あの人はお勤めですか？」

久坂は静かに問いかけた。

まだ、僅かに呼気は荒く余程切羽詰った感がある。

内心彼は、自身の情けない程の姿を想像して苦笑いした。これ程に彼女を求めている自分が信じられぬ程だったのだ。

「久坂様、直ぐ使いを出しましょう、お待ちになりますか？」

久坂がそれに頷くと、丁稚は直ぐ様走り去っていった。

後姿を見送ると、彼は大きくため息を吐いて、傍の壁にもたれ掛り待つのであった。

やがて、バタバタと着物の摺れる音がするや、走り寄ってくる辰路の姿が視界に飛び込んできた。

艶やかな着物にシヤラシヤと飾られた櫛。

白粉に赤い紅が映え、目を奪われる美しさをそれら全てが引き立てている。

漆器の髪が僅かに乱れて落ちている所は、己の為に急ぎ駆けつけてくれたからであらう。

そう思うと、久坂はどうしようもない愛おしさに襲われた。

「久坂様・・・！」

辰は彼の姿を見て息を飲んだ。

まだ短いものの、結われた黒髪。そして、何より目を引いたのは堂々たる武士の装束である。

羽織袴に大小を差した威風堂々たる若侍の凛々しい姿に思わずほう・

・・・とため息がでる。

辰は暫し、その姿を見つめ魅入っていた。

「お辰・・・すまないね。急がせてしまった様じゃが、あちらは大丈夫じゃったか？」

恐らく、座敷を抜けて出てきてくれたのだろう。

心配する久坂に、辰は軽く首を振って「いいえ」と小さく応えた。

「久坂様、うち・・・こないな立派なお武家様、ほんに初めてお会いしましたえ、とうとう武士にならばったんどすなあ・・・」

うつすら涙を浮かべて、妓は久坂の姿を拝み見た。

その姿を一層愛おしく思い、彼は彼女の小さな腕を掴むや自身の胸に引き寄せ掻き抱いた。

「これまでの働きも認められて、やっと武士にして貰えたんじや。これからもう、後に退けぬ戦いに
出ねば成らんから、きつと君に逢うのも最後になるやも知らん。」

「・・・うちは久坂様言う志士様に添うた時よりいつもそれは覚悟
しとります」

ギュッと辰は久坂の着物を握り強く抱き返した。

ほんの僅かの時間だが、二人は時間が止まった様にただ抱き合っていた。

やがて、久坂は刀を座敷に置くと、彼女をその場に抱き寄せたまま
身体を横たわらせた。

辰は視界に移る久坂の憂いの表情を見るや、これが本当に最後の

だと悟った。

彼女は最後の儚き宴にその身を全て委ね目を閉じた……。男の熱い身体を受け入れ喘ぐ中で、彼女は只一つだけその生命を体内に継承させたのである。

この時はどちらにも、解らぬ事であり、久坂自身それを知らぬままに世を去るのである。

・ ・ ・ ・

政変によって都を追われる、その時に話を戻そう。

先ほどの辰路と別れ、京都でしてきた全ての活動が閉ざされんとするその無常。

久坂はまだ若く、その表情は虚しさと切なさで、憂いを帯びていた。

（いずれにせよ、もう彼の人にも会えまいな）

チクリと痛む気持ちを抑え、彼は只管に声を張り詠い続けるのであった。

こうして明くる朝、七卿と藩兵達は大坂・兵庫へ引き上げ再び其処から長州を目指し長い道のりを進んだのである。

8月18日の政変、七卿落ち・・・

明治維新を遅らせたとされる、様々な出来事がここから始まるのである。

終焉の炎（４）（後書き）

更新久しぶりです。

やはりサイトかこちら・・・どちらかを優先的に完結させるなりしないといけないかもしれないですね。

サイトの更新を間隔を考えて行なっていると、こちらがどうにも更新遅い！という羽目に。

ちと考えなおしが必要かもしれませんね。

終焉の炎（5）

8月の政変、そして七卿落ち（実際には暗殺によって一人亡くなり六卿が大宰府に落ちている）と長州藩

志士達にとって、目まぐるしく暗転した数日であった。

それぞれに退路を別ち、只管に山陽道を西へ・・・郷里の道を戻るのだ。

それぞれがそれぞれの思いを抱いて、来る時の誇らしい思いも打ち消され、今は悲憤耐えぬ人々の

涙の川の如く隊列はゾロゾロと続いていた。

さて、皆一様に帰藩したと思いきや、残留組も数名居座っている様子。

京都の河原町藩邸には桂小五郎等が固く門を閉ざし、外出も無く無人の如くひっそりと滞在している。

つい先日までは、長州様よと賑わいあって、来訪者も多く日の出の勢いであったが、今日は一挙に

形勢逆転。シン・・・と静まって空き家同然の佇まいである。

この静かな藩邸に、久坂は二十一日再び舞い戻る。

彼もまた、外出をせず外部の様子を中から息を凝らしてじっと覗いていた。

長州は完全に退いていない――

虎視眈々と再度朝廷を牛耳る機会を覗って潜んでいる――

薩摩や会津などは、そう睨んで簡単に退く連中ではないと警戒していたから、すかさず長州藩士らが

あの政変後退去する様を見ていても、怪しんで藩邸に密偵を送るなど様子を覗っていたのだった。

漸く、密偵を撒けたと安堵し、久坂は外へ出た。

長州藩そのものが、京都への侵入を禁止された今、外出も命がけで彼は絶えず周囲に視線だけ送りながら

何とか打開策の糸口を見出さんと必死で市中を練り歩いた。

今は頼りとしていた公卿も左遷され、朝廷に長州藩の味方らしい人物はいない。

有栖川の宮もまた、親長州親王として名高い方であったが、今は謹慎されお出ましになるのは難しい。

学習院も出入りを禁じられ鷹司卿も接見見込みがないとあれば、いよいよ志士達は活躍の場を失い

その結末も薄れていくばかり。

そんな中、唯一彼等が縋れる場所がある。

京都西木屋町の榊屋喜右衛門邸である。

あそこだけが、会合を出来る場所となっていた。

この榊屋喜右衛門というのは仮名であり、本名は古高俊太郎という勤皇志士で、某宮家の家士である。

ここには、あの政変以降長州藩に依っていた脱藩志士や勤皇を掲げる藩士らが秘密裏に集まり、今尚会合

の場として唯一使用していたので、古高は常に周囲民家に漏れ聞こえ密告などなき様、辺りに細心の注意を払っていた。

久坂はそこを訪ね、門を叩いた。

「これは・・・さあ、どうぞ急いで中へ」

古高は戸を開けると久坂を急ぎ導きいれ、辺りを鷹の目で窺い直ぐ様静かに戸を閉めた。

久坂は当時、既に名が知れた名士となっている。

今は、追われる長州藩の中で、手配者の扱いとなり、その行動も隠密でなければ危険とされている。

彼はそれでも、堂々と歩くから周囲も中々気が気でないのだ。

「堺町の一件以降、新撰組の市中取締りが強化され浪士等も息を潜めて耐えておるのです。久坂さん程の

大物が何かあれば勤皇派にとって大きな痛手。どうぞ用心召され」

古高は声を落とし、低く久坂を諭した。

それから、加えて敵の尾行にも重々気をつけるようにと重ね重ね言われると、久坂は苦笑いを浮かべ大人しく

承知と言う他なかった。

それだけ、京都の空気は勤皇から公武合体・・・佐幕へとガラッと変貌していたのだ。

藩邸で桂らと討議を重ね、数日が経過した頃、久坂に帰藩命令が来る。

なにやら一騒動になっているらしい。

『奉勅始末書』

先の長州藩の攘夷行動一切は朝廷による勅命を奉じたものである――

その釈明を嘆願書という格好で朝廷に提出しようという試みである。

挽回策はもはやこれ以外にならうというのが、重臣連の見解であった。

重臣の井原主計がそれを携え上京する手はずまでしっかり整っている。

久坂に対する帰藩命令はそれに付いて京都藩邸に駐在するという段取りに沿っての事であった。

この時の長州に「俗論党」は消え、政務役として久坂の他、高杉晋作や長嶺内蔵太など急進派が占めているといった状況に様変わりした。

やがて、嘆願書を持って上京する頃には十一月となり京都は涼しい季節となっていた。

彼等長州勢は、嘆願書を携え大坂、伏見を通り都に到着するや入京の手続きを取らんと急いだ。

しかし、返事は一向に来ない。

（薩会が邪魔立てでもしとるのか・・・）

苛立つ気持ちを抑えながら、久坂は預かった嘆願書を大事に、何度も応えるまで入京申請を届けるのだった。

そうして、時が流れ文久四年という新たな年を迎えるのである。

この日、彼は25歳となった。

そこには、これまでと違う命を賭して日本が為奔走する一人の精悍な若武者となった久坂義助の姿がある。

ここから彼の齢も数える必要無くなり、後は只その姿を追うばかりである。

終焉の炎（6）

―文久四年から、僅か二ヶ月で元号が変わる。

―元治元年とこの二月から呼ぶ事になる。

先月再度提出した入京申請は却下された。

朝廷から返答が届いたと思えば入京申請取下げと来ている。

これは、彼等長州藩士等を落胆させ、同時に朝廷を担ぐ意味を退廃させる結果となった。

已む無く久坂は息巻く藩士らを宥めると、井原主計と共に預かってきた『奉勅嘆願書』を

提出し、一旦大坂藩邸に退いた。

（恐らく、この調子では薩会ら佐幕派に牛耳られた朝廷は見もすまいて。破り捨てられるが

関の山じゃな・・・）

解っていても、内心がっくりと肩を落とさずにいられない。

大坂に止まる間、久坂のこれまでの活躍が改められ、石高を加増されている。

政務役に就いた者が僅か二十五石ではちとおかしкаろうという議論が沸いた為である。

これにより、加増され彼は四十石の大組士となったのである。

「気にするでないぞ。そなたならば直ぐ石高なぞ上げられよう。」

井原主計は久坂に慰めの言葉をかけた。

彼は僅かに微笑し頭を下げるだけであった。

久坂の脳裏には憤死した兄の面影だけが映っていた。

武士として戦い死ぬる事だけが、今彼の心を僅かながら満たしていたのだった。

そんな時に、盟友高杉晋作が藩邸に入り込んできた。
情勢伺いを命じられてきたのかと久坂が思っていると、彼はとんでもない事を言っている。

「いんや？僕は来嶋の爺共に身分惜しんで臆しおったか若造が言われたからな、それはないと

訴える意味で除籍覚悟の逃避なぞしてみたのじゃ。ま、脱藩という事になるかいの」

ケロっとした表情は、こういう堅苦しい武士の粹を少し外れた彼ら

しい。

上士の家系にありながら、武士の粹組みと一線ズレた友を呆れながらも慣れたという顔で見っていた。

「んでな、ついでに京の情勢なぞ聞いとうか思ったんじゃがな・・・」

相変わらず、どこまでも奔放な男である。

全くとんでもない事を仕出かした癖に飄々と構えている。本当に彼らしいものだ。

この性分をうらやましいと思う気持ちも多少ある。

今、ここで足止めを食らい、モヤモヤしている自分がバカらしいとさえ思わせられる。

高杉という男は、本当に不思議な存在である。

「で、京の情勢より藩は一体どうなつとる？」

「ん？ 来嶋の爺が進発だと騒がしいからな、僕が已む無く政務役として宥めにいった・・・」

「そしたら、小僧扱いで軽くあしらわれ、今に至る・・・と」

ヤレヤレという表情で久坂は聞いている。

またあの爺様が・・・といった所だ。

すかさず、傍で聞いていた井原主計が口を開いた。

「ゴネておるのは来嶋さんだけか？」

「いんや。井原さん違いますよ。真木和泉も一緒になって爺同士盛り上がってら」

真木和泉・・・

その名前を聞いた瞬間、井原は大きく溜息を吐いた。

あの二人は最強の爺様達だ。

そして、指導者としてここ数年真木に至っては長州藩是にすら関与してきた存在。

それに、侍大将の来嶋翁までついている。

これは非常にまずい。

藩是が強硬論になれば・・・

そこまで、考えを巡らせて井原はサツと血の気が引いた。

「・・・よもや、軍勢を上落させるつもりではあるまいな・・・」

絶望とも取れる、消え入りそうな声をやっとな吐き出す彼は顔面既に蒼白である。

久坂はまさか・・・といった面持ちで固まった。

（来嶋さんならやりかねない）

「でしょうねえ。彼等は相当来ているからなあ」

高杉は井原主計の蒼白ぶりを見ても、暢気な声を出している。

「で！晋作、出撃してどうするつもりじゃ、爺様方は！」

胸倉掴まん勢いで、久坂は高杉に詰め寄った。

「君側の奸賊を除く事……つまり薩会じゃな。」

「武力で追い出す腹か……」

井原はボソリと呟く。

久坂はその傍で、深く溜息を吐いて、来嶋・真木両人が息巻く気持ちも解らずともないと

一人思っていた。

自分とて、何度と無く朝廷に押し入って、嘆願書を叩きつけてきたい衝動に駆られたものだ。

現場に居ず、まだかまだかと焦らされて何も手立て無い、動けない藩内の皆はやキモキしているだろう、おそらく、朝廷の傍にある自分達よりも。

爺様達過激派の策は策とも呼べず、無謀極まりないことこの上ないのだが……

それでも、どこかしら……

それ以外にもはや長州藩が立ち上がる手立ては無いのかも知れんと思う自分が居る事も知っていた。

しかし、今それをするには時期尚早ではないか？という疑念もある。下手をすれば、長州は『朝敵』となりかねない。

これは避けるべき事態。

慎重論に今一度引き戻し再度検討すべし……
久坂の頭の中で、そう結論付けた。

「晋作、君はいち早く帰藩し彼等を抑える事に尽力してくれ。今はまだその時ではないと……」

この後、晋作は京藩邸を経由して長州に戻るも、脱藩の罪で武士身分用の野山獄に入れられてしまう。

彼ら双壁が会って、その声を言葉を交わしたのはこれが最後となったのである。

終焉の炎（6）（後書き）

暫く振ります。

長らく更新停止になり申しわけありませんでした。

完結に向け、HPサイドと折り合いつけながらの更新・・・と思っていたら随分ほったらかしの体たらく。あとわずかで完結予定ですので、どうぞ最後までお付き合いくださいませ。（なかなか最後が決まらずまたもや執筆が滞りがちなこの頃；）

終焉の炎（7）

元治元年三月十一日・・・

久坂は帰藩命令により大坂を去る。

その後、山口政庁へ入るや藩主に面会し、京都での入京拒否や現状の報告を済ませると

一つ、藩内の状況について訪ねた。

「恐れながら御殿にお訪ね申します。人づてに聞いた話ではありますが、なにやら御家家中にて

進発論が盛んに叫ばれておるとの事。真に御座いましょうや」

じつと、藩主父子を見つめる彼の目は真剣そのもの。

これを問い、主君の意思がどこにあるのか、再び京都へ向かう事になっっていた彼にとってこの問い

だけは、しておくべきと思うていた。

藩主・毛利敬親は暫く黙って対座する若い政務役を見ていたが、やがて重い口を開いた。

「家臣等の中に、確かに京へ向け兵を送り込めとの声が上がっているのは事実じゃ」

「やはり・・・」

「先の都落ち以降、我藩是と尊攘の思想は一気に押さえ込まれてし

もうた・・・そればかりか

朝廷に対する悪しき企てを進める首謀者たる汚名まで着せられ長州系公卿方も禁足となり我藩は京都撤退余儀

なくされた。それに我慢出来ん様になった者達が今日に日に増え、もはや止めるのは難しかろうとの見解も

重臣からは漏れ出しておる。」

藩主は重々しい口調で、進発を止める難しい現状を語った。

久坂はその苦衷を察し、目を伏せた。

静かな、けれど重く苦しい程の空気が暫し流れた。

どれ程経過したものか、久坂は目を開き、再び伏せた顔を主に向けると迷いの無い真っ直ぐな眼差しを以って言い放った。

「諸氏の気持ちは察します。私とてあの屈辱・・・憤りなしとは言
い切れませぬ。だが、我藩の御為にも、敢えて今耐えるべき
でありましょうや。・・・まだ進発の時ではありませんぬ」

彼の澄みよく通る声は実に凜として、堂々たるものである。

国を憂い、藩の為にと様々に動き回り、命がけの奔走を繰り広げてきた久坂がここで更に大きく成長した様に見えた。

敬親はその姿を眩氣に目を細め、見つめた。

（こやつは・・・あの頃の寅次郎の様じゃ・・・）

敬親にはかつて、自身も学を学んだ吉田松陰寅次郎の面影が浮かんだ。

今日の前に居る久坂義助はあの寅次郎の愛弟子であり、妹の夫・・・親族であり志を託した男だった。

この主君を前にして、臆さず真っ向から反対を示し諭さんとするその師さながらの姿は、寅次郎を思い出させる。知らず、敬親は久坂に生前の寅次郎の姿を重ねていた。

「・・・成る程・・・そなたが其処まで言うならば、今はまだ潜むべき時であろうな。良く下に藩命と伝えておくがよい」

まだ、ぼんやり面影重ねて不思議と言葉を信じ従う。ふとおかしくて溜まらぬのを堪え、久坂が退出する後姿を見送ったのであった。

京都は徐々に冬から春へと季節が動こうとしている。久坂は再び京の藩邸へ戻ると、桂より大坂へ戻ると伝えられる。

「久坂君、私は京に居っても顔を知るものがあり過ぎてろくな働きも出来ぬ。この際、大坂に戻りそこで情勢を見守り情報収集にも当たろうと思うておる」

「成る程・・・それは確かに。僕はまだまだ桂さん程名が知れて無

いからもう少しここに残りますよ」

「何じゃ、久坂君は鈍い男じゃの。長州の久坂を知らぬものこそ、居るまいよ。せいぜい油断せずにな」

桂はそう言って、数日の内には大坂へ発った。

久坂は、『長州の久坂を知らぬものこそ居るまい』という桂の言葉に苦笑いして、忠告通り控え目に活動を進めていた。

桂自身、大御番頭取となった局長近藤勇をはじめとする新撰組によって、たびたび在京中危険を掻い潜っている。

流石に、数回と重なると藩邸に居ったにせよ、身の危険を避ける事は容易になく、一時撤退を余儀なくされるのも致し方なしと取れる。

幕府の重要な地位を預かるようになった新撰組は一層それまで以上に取締りを強化し、その刃に斃された無念の志士は数知れぬ程であった。

春風がそよぐ四月中旬の頃、久坂はこれまでの慎重論を覆す意見書を藩に提出する。

越前、土佐、薩摩にと、公武合体派の大名らが、こぞって京都へ集結し、薩摩島津家に至ってはその軍勢一万余を京都に進行させるという勤皇派にとって、危機的状況が迫っていた。

久坂はこうした背景により長州藩の回帰は難しかろうと悟ったのである。

自重を唱えて藩主を説得し、こうして京都へ出てきた自分が・・・今や進発論を推し進軍せよと迫る立場に変わる。

そうこう藩是が揺らめく中、諸侯らは長州藩の処罰や攘夷親政にと

う対応を出すべきか論じ、結局見出せぬままに京都を後にしていた。

そんな中、将軍はまだ二条城に待機した状態で、京都市中は幕府・
・佐幕色にすっかり染まりきっていた。

久坂の提出した進発論は以下の様になっている。

世子を上洛させ、将軍に直談判し回帰を図る。

その際、軍勢を率いて来て貰い、威嚇しながらの論戦を強行に進める事。

これはかなりの賭けだった。

最悪は戦にとて成りかねない。

将軍が応じない場合の可能性が高く、一時引いた諸藩大名や既に軍勢を増強せんとする薩摩がまず兵を動かしてくるだろう。

ジワリと冷たい汗を滲ませながら、久坂は祈る気持ちで書をしたためたのだった。

久坂が進発論を推す発言を提出する事は桂にとって俄に信じがたい事であった。

切羽詰った京都の空気でイカレたかと思った所も確か。

桂は一度大坂で冷静に議論をと彼を誘ったが、終ぞ久坂が動くことは無かった。

終焉の炎（8）

慎重派の意見から、進発論へと訂正した書簡。

それが長州藩政堂へ届けられたのは五月の事であった。

過激に進発論を唱える一団の中でも、来嶋又兵衛に投げられた言葉は自身の成した火種が一因となっており、已む無きところもある。とても跳ね返せる力はない。

『久坂よ、己は今更になって幕府の威に臆しておるのか』

高杉晋作に向けてもこの台詞は投げかけられ、半ば躍起になったのが高杉は脱藩を試み、その罪で

野山獄につながれている。政治の中枢にあった周布政之助は、彼等にとってある種理解を持った人物

であったが、此の度の議論には流石に慎重論を唱えていた彼もその強硬な姿勢に対抗する術なく、

野山獄の高杉を訪ね下馬せぬまま獄舎に踊りこむという振る舞いを見せ、謹慎に処せられてしまった。

（周布殿・・・敵わじと悟って逃げたか）

久坂は内心舌打ちをした。

これで、あの爺様方を抑える人間はいないに等しい。

高杉も獄舎、桂は遠方で愚痴を洩らすだけ。周布は自ら退いた。

これではどうあっても藩是を覆すは不可能であろうか……。

暖かい日差しが久坂の頭上から降り注ぐ。平和な時であれば、のんびりと穏やかな散歩日和だが、今は

そんな余裕も無い。焦りが脳裏を支配し、あらゆる言葉と姿が浮かぶのだ。

彼は、草を踏みしめゆつくりと歩を進めながら、来嶋又兵衛の言葉を反芻した。

（これ以上何を言うとも、長州藩の立場は変わらぬ。訴えるという動作は書面でだけ語れるものではなかる。

敢えて動く……あれこれ考えてばかり居っても同じ時は流れて居るのだ。なりふり構わずでも先へ進まねば薩会等に遅れを取るだけじゃろうが）

ふと、立ち止まって彼はじつと己が足元を見つめた。

緑の草花が生い茂り、足に絡まっている。

風雨に晒され様と、踏まれ様とひたすらに生き続ける緑の草花。

それこそ、変な言い方をすれば「なりふり構わず先を見据え進む」に等しいのではなからうか。

久坂は一呼吸置いて、足元にある緑の細い草を手にとって見た。

草は小さく、風に攫われどこへでも流れていく。

ただ、流れ流されるままに、行く先を信じてそのまま身を委ねる小さな緑に久坂はしっかりと何かを感じ取っていた。

彼はその足で、散歩道を政堂へ向けると、藩主へ面会を求めるのであった。

「恐れながら、我等にも進発を覚悟すべき時が参りました。」

久坂の言葉に藩主は驚いた。

ほんの数日前までは慎重論に近い論を述べていた久坂が、ここで意見を翻したからである。

「猶予せよと言わなんだか、何ゆえ・・・」

「もはや、これ以上待つては我等が唱えてきた論そのものが、崩壊し兼ねません。この局面で戦いを避ける姿勢は

長州は臆したりと、二度と再起出来ぬ汚名を残したまま歴史に埋もれ、また師・吉田松陰の言葉も憂いも何もかも失ってしまいます。幕府の暴威をここで黙ってやり過ごす事はできません故、進発を敢えて覚悟と致した次第・・・」

久坂は淡々と伝えた。

その目に迷いは感じられない。

藩主は深くため息を吐いた。

「左様か・・・暫し結論を待ってくれぬか。」

藩主は視線を下に向け苦しげな表情のまま、ぽつりとつぶやいた。以前より桂小五郎から慎重論をと手紙が幾度となく届いている。

藩の長たるものとして、藩主敬親父子は家臣のこの意見対立に頭を

痛め日々苦悩していたのである。

しかも、ここへ来て久坂という藩内でも力を持った指導者的存在がこれまでの主張を一転させ、進発論へ傾倒しつつ

あるから、彼等は一層重苦しいため息を吐いて頭を抱えてしまった。

・・・過激な藩士を抱える主家として已む無き悩みである。

元治元、六月に入ると夜中まで蒸し暑く、じっとりした湿気が身体にまとわりついて気持ちの悪いものである。

京の都は尊攘と佐幕のそれぞれを抱える志士らの熱い熱気に照らされ、ねっとりとした空気に包まれていた。

同月五日晩・・・

祇園祭を控える京都の夜に静寂を打ち破る怒号が響き渡った。

河原町、京都の繁華街であるこの場所に1件の旅籠がある。

・・・池田屋―・・・

ここで、大きな物音と怒声、悲鳴があがった。

戸板は乱暴に外され、障子も襖も鋭く切裂かれ真っ赤な手形とヌルっとした粘液が飛び散っている。

ドタドタと階段を移動する音、ゴロリと崩れる音・・・

「御用改めである！」

この怒号を皮切りに始まる生き地獄は、一夜に終わった。床も天井も壁一面が鮮血に染まり、臓腑が蛙の様に壁や手すりにしがみ付いている。

この日、旅籠には長州、肥後、土佐など諸藩勤皇の志士が密かに集まり会合を開いていた。

薩摩、会津より天皇奪還の決起会合である。

京都に火を放ち・・・と過激な作戦を立てるのは長州藩松下村塾の志士・吉田利麿、肥後勤皇党の宮部鼎蔵など

大物と言われる志士達の指導者達である。

彼等の会合を聞きつけた京都、会津御預・近藤勇率いる新撰組が東西二分となって搜索し、遂に池田屋へ乱入。

惜しくも勤皇の志士達を指導すべき吉田宮部をはじめとする先駆者達は激戦の末、討死あるいは自刃し果てた。

何とか旅籠より外へ逃げたもの達も、応援に駆けつけた新撰組や会津桑名といった諸藩兵によって捕縛される

大惨事となった。

世に言う池田屋事変である。

この事変によって、明治維新が一年は遅れたと言われている。

久坂玄瑞らはこの頃、山口政堂に居た・・・。

この池田屋の騒動が彼等の運命をある方向へと導くのである。

終焉の炎（8）（後書き）

煮詰まっの執筆作業。

少しづつ丁寧に仕上げたい気持ちがありますが、未熟な文字配列・
・御容赦くだされ；

終焉の炎（9）

照りつける日差しが、海面に反射して眩い初夏の暑さ。

久坂は、この時上洛船に揺られ、郷里を発った所であった。

懐かしい景色が次々後ろへ流れ行く様は、どこか哀愁漂うもので、若い彼はしんみり

した気持ちになっていた。

船上で、滅多得られぬ暇を持て余して、彼は郷里を描き歌を口ずさむ。

梓弓はるは来にけり武士のもののふ

引かへさじと出づる旅かな

瀬戸内の海より見える高い山の彼方には、生まれ故郷の萩がある。

かつて、政堂が山口に移るまで、ずっと長州藩の中枢であり、そして自分達が松陰と

出会って、学んだ古き大事な学び舎。

そして、恩師より与えられた大事な人がいる。

何度か機会を設けて会いに・・・と思ったが結局何かしら、お呼びが掛かってそちらに手を

取られ、彼女と夫婦らしい生活を過ごす事も叶わぬまま・・・こう

して自分は戻れぬ旅へ
出発している。

（・・・せめて一度位会ってやりたかった）

辰路との事もあって、どうにも後ろめたさが付きまとうが、それでもここにきて彼は改めて

妻を深く想いわびる気持ちが湧いて止まない。

せめて、別れ一つと思って、ついに今日を迎えた事が彼に多少憂いを遺していた。

最後にと、遠い萩にいる妻への手紙を認める。

「暑さの節にに相成り候へ共、先ず先ず御変わりなく、暮らされ候よし、いかにも安心致し候。

・・・困りおり参らせ候・・・留守へ・・・よしすけ」

いつも通りの筆遣い。

彼が妻にこれまでに送った手紙は大体が「武士の妻」に向けた、少々堅苦しい注意書き差ながらの

文面であるが、それも今日限りで終わりだと思つと、多少なり彼女を氣遣つてやんわり記そうと

想いを巡らすのだが、やはりいつもの堅い文面になってしまう。

）（・・・これでは、全く詫びの言葉一つ見つからんじやないか・・・

一通り、書き終えてみると相変わらずの書き文句に思わず苦笑いする。

これ程緊迫した環境下で、いつもの自分で居させてくれる存在が妻・お文だけであると、久坂は深く感じ取っていた。

そう思うと、会いたい気持ちも膨らもうが、如何せんここは船上。ましてや、最期の船出である。

惜別の情に囚われる訳には行かない場所だと、僅かに膨らんできた妻への思慕の情を必死に振り払い

彼は再び手紙を畳むと、向かう先をじっと見つめた。

6月の25日には大坂へ船は到着。

明後日には福原越後、来嶋又兵衛ら一隊は一路伏見を目指し、そこから嵯峨天竜寺へ入った。

もう一隊、久坂義助、真木和泉らは淀川を遡って山崎を目指し、天王山・宝寺へ。

彼等は京へ入るや、京都留守役の乃美織江を通じ、所司代へ長州勢入京を取り付けさせた。

久坂もまた、朝廷へ向かって藩主父子と都落ちした公卿らの禁足を解き賜えと嘆願書を提出したのである。

あの政変後、京都には浪士等がまだ命がけの潜伏を続け、長州上洛を待ち望んでいた。

彼等は、長州軍が到着すると知るや、嵯峨天竜寺へ向かい総勢百余名の志士達がこれを待ちうけていた。これに呼応する形で、来嶋又兵衛は天竜寺入りしたのである。

当然、この不穏な動きに反応するものが居た。

会津藩主であり、京都守護職に就いていた松平容保である。

彼は、御所九門をぎっちり固め、各部警護を厳重にさせた。

そして、ここで更に長州からの嘆願書の取り扱いに関する協議もなされた。

入京許可をしてはと温情的な意見がある中、やはり薩会と共に将軍後見職であった一橋慶喜（後・最後の

将軍となる徳川慶喜）等によって、長州軍撤兵の強攻策が強く主張され押し通ってしまった。

こうして、朝廷より長州側への撤兵命令が下されるや、留守居役の乃美をはじめに伏見の福原越後へと伝わったのである。

福原ら長州軍はこれに対し、一層憤怒募り一步も引かじと尚も入京を迫るなど譲らぬ姿勢を見せ付け、撤兵命令に断固拒否し続けたのだった。

7月・・・

こう着状態が続く中、いよいよ長州勢後続部隊が到着。

それぞれに天竜寺や山崎へと持ち場へ入り、軍勢を以って各拠点を陣取った。

知らせを受けた幕府と朝廷、これに対し迎撃せんと諸藩兵力を静かに京の都へと召集し御所の警備を一層

強化し始めたのである。

初頭には薩摩の西郷吉之助が兵を率いて入京。

土佐、久留米両藩に会津と討長を唱える諸藩と共に建議し、長州への温情を持つ公卿らを牽制しつつも

着々と軍勢を整え、その数は長州藩の勢力を遥かに上回る数万の大軍と成っていた。

終焉の炎（10）

終焉の炎

梅雨明けて湿度を伴った空気がべっとりと肌に纏わり付く。

京の夏はことその他暑く、日頃ならば汗を拭い涼みたい所だが。

この夜はどうもそんな風情も懐かしく感じられる。

真っ赤な篝火を焚いて、山頂に立つ幕舎背景にじっと流れ出る汗を拭う事無く

立ち尽くす影がある。

男山八幡――

影は微動だにせず、ただじっと両の目を下に、京の町を見下ろして
いるだけである。

「久坂さん、もうそろそろ入りませんか？」

「ああ、すまん」

7月17日午後より長州勢幹部が召集され、最後の会議が開かれる
ことと成っている。

町を見下ろして、じっとしている久坂は、これまでの急進的な指導

者から、酷く冷たい
空気を纏って見えた。

おそらく、ここに及んで彼には「戦争」という内紛に対する否定的な思考が浮かび、その思いが
広く心に浸透しつつあったのであろうか。

彼はこの最期の最期まで「訴える」という手段を諦めなかった事か
らうかがえる。

会議は当然、世子到着を待つのか、それとも待たずして進発するの
か・・・

議論はその二つに絞られていた。

「若君に責を負わせるは臣として許さざる事。若到着前に進撃し朝
奸除き奉るのだ」

来嶋又兵衛は長州藩の侍大将である。

彼の忠君は古武士のそれであるが、決して古き武士道のみを押し通
すばかりではない。

来嶋という人は、文武共に才あって、殊に兵馬を操る事長けた将で
あった。

急襲という格好になるが、敵を陽動するかの如く、攻め寄せるとい
う策を打ち出し、目を輝かせて

訴え出たのである。

「世子様の到着を待つてよくよく評議すべきではありませぬか。只
でさえ入京の勅許も頂けぬ状態。

ここで、攻め寄せては世子様を窮地に追い込み兼ねぬ危険も御座い

ませぬか」

久坂は来嶋の言に続いて、大きく息を吸い込んで響く声を上げた。来嶋はキッと睨みつけるや、両の目から血の涙を流さんばかりに咽ぶと、

「諸君らは臆したか、朝議で撤兵と決せられた以上、我等に不利は百も承知じゃ。撤兵すれば長州は

救われるか。もはや朝敵と取られた我等にあるべく道は進軍措いて他なし。勅命によって討伐されるも

今は我等が志だ。俺はたとい一人であろうと、戦ってみせる」

久坂はこの言葉と至誠に圧倒されるばかりであった。

真木和泉ら賛同者達は、言い終え退席した来嶋に従って一人、また一人と出て行った。

彼等が動けば、当然久坂達とて傍観している訳にはいかない。

長州軍という集まりである以上、必ずや戦火は避けられぬものだ。ならば、やる他ないという結論しか出てこぬのである。

「来嶋の爺さんに押し切られてしもうたな。」

入江九一がぼつりとつぶやいた。

もう後戻りは出来ない。どうせこのまま、待っていても戦闘は避けられぬものである。

ならば――・・・

「・・・しかし、来嶋さんもええ事言うじゃ無いか。朝敵も厭わずか。」

寺島はもう諦め半分、来嶋の志に一理あると揺らぐ気持ちも半分で天を仰ぎながら大きく身体を伸ばした。清清しいといった心境だろうか。言葉に迷いは感じられなかった。

「そうじゃな。ま、やれるだけの事をやるか」

久坂は寺島が仰いだ空を同じ様に見つめた。彼には今胸のつかえは何も感じられない、ただ先にある戦・・・それを飛び越えて先の日本の風景を模索するのみである。

（花は桜木、人は・・・）

己は今、武士身分で死のうとしている。生きて帰るよりも、自分が武士として生を全うする事が彼の全てであつたろうか。

久坂は桜の潔い散り際を己に当てはめて、その時を待っていた。

―平和な日本に桜を咲かせる―

いつの時代にも、こうして何かを犠牲として、いやせざるを得ない背景に飲み込まれてか、そういう人々の命あって他な命は生かされている。現代も過去も未来も変わらぬ流れであり、それ故命の尊さと儚さを訴えられる所であるが・・・。今久坂玄瑞という人と、それを取り巻く先ある

若者達は、そうした「道」に向かおうとする人々であった。

目に映るのは自分達を踏み越えて進む日本の姿。

そうして、自分達をいつか語ってくれる後世の人々がある。

今だけで計れぬ尊いものを人々が住まう国であると思ひ進んできた彼等は誠に若く、惜しむべき命であった。

当然生き延びて、建て繋げて行く人々の労苦も然り、無視出来ぬが・
・。

兎も角彼等は、それぞれの戦場へと懼れと僅かな先への期待を以って突き進むのである。

7月18日、寝静まる京の山頂での一幕である――・

終焉の炎（11）

元治元年7月19日

その戦いは日付が変わるとほぼ同時刻に始まった。

長州側は伏見より北上する福原隊が先鋒となって幕軍に攻め寄せる。彼等は皆必死の形相で食いついて来るが、近代的な兵力を要する薩摩と精悍な会津の迎撃に遭い次第に隊列は乱れ、傷つき斃れていく。

「恐らく貴奴らが長州軍の中心部隊であろうな。この程度とは片腹痛し」

「いんや、こん位では何らか後詰など用意しておくかも知らん。用心に越したことはない」

様々に意見が飛び交うなか、やはり幕軍として主力部隊に相違ないとの見解が主流となった様だ。

長州勢を退けたと言わんばかりに緩んだ空気が一瞬流れた様である。

―蛤御門―

・・・カカツ

・・・カカツ

(・・・何じゃ。何か音が近寄ってくるが・・・)

一人の兵士が何か歪な音を聞き取った。

それが何かは解らぬが、地を踏む様な音が微かに響く。

チラと仲間を振り向くが、気にする様子もない。

長州伏見勢を追い返した事にすっかり高揚した兵士達の声でこの微かな音はかき消されているのか。

自分だけが戦場という緊迫した環境下で脆く女々しい恐れを抱いて敏感になっているだけなのか。

「なあ、何か聞こえないか？」

兵士は隣の仲間に静かに尋ねた。

しかし、仲間の兵士から返された答えは期待に添うものではなかった。

「お前、初陣ってんで臆病になっているんじゃないか？俺にや何も聞こえんぞ。」

兎に角、取り合ってもくれない事に不満を覚えながらも、改めて音を探してみると――・・・

・・・カカツ

・・・カカカツ

ザクザク・・・

音がどんどんはつきり聞こえてくるではないか。

しかも、一つ二つのどころではない。

沢山入り乱れながら迫ってくる音が聞こえるのだ・・・

(・・・新手か・・・)

ブルっと兵士は身震いした。

武者震いなんてものではない。まだ見えぬ敵が確かにすぐそこまで迫ってきている・・・かも知れぬ恐れ。

兵士は咄嗟に蛤御門の外に向けて槍を構えたが、なんとも頼りなく足を震わせていた。

ドンッ

突如大きな音が鳴った。

皆余り急な事に、ユラユラと振り子の様に身体が揺れている。ぽかんと間の抜けた表情で口元が緩んでいる。

戦場で急襲や騙しあいの様な駆け引きは当然の法であるが、しかし主力がやられた筈の長州勢がここまで

喉元へ接近していようとは、想像以上の事であつた様だ。

敵兵が一瞬うろたえた隙を逃さず、御門に攻撃を加える者たちは我先にと斬り込んでくる。

その時、野太い怒声が轟いた。

「撃て！御門を押し開け！」

ドカンと黒金の筒が火を放つ。

不気味な漆黒の砲台が木製とはいえ、頑強な御所の門に容赦なく打ち当てられると、周囲にいた兵士らを巻き込んで

発火、暴発する。吹き飛ばされる血潮に肉片・・・木屑が生々しく舞い、漸く幕軍の兵士達は我に返って武器を構えたのである。

先ほどから音を聞き、警戒していた兵士は怒声を放つ方へ引き寄せられるように突き進んだ。

声は高い位置から聞こえて来た。

大きな馬蹄と烏帽子に陣羽織が目飛び込んでくる。

嵯峨の軍勢を率いる侍大将、来嶋又兵衛である。

彼は長く修練を積み自らが育ててきた力士隊、遊撃隊を引き連れて門が開くや鋭く刃の切先の如き陣営を組んで薩摩会津の

軍勢に斬りかかった。その隊士らの勢い凄まじく、勇猛果敢な来嶋

部隊によつて幕府側の旗色が悪いかと思われた。

・・・が、その時である。

パンパンッと耳を劈く様な銃声が響き渡ったと同時に、馬上にあった老将の身体が酷く揺れた。

どっと巨体が地に倒れる姿を敵味方双方、時の流れが止まったかのようにじつと静止し見守っていたのである。

「やった！」

「このまま砲撃を続け、敵を一人として逃すな」

我に返ったのは薩会か。

その声にハッとして斃れこんだ来嶋又兵衛に駆け寄る長州兵。

戦場の空気、勝敗の流れはこの一瞬で変わってしまった。

力士隊は来嶋の巨漢を担ぎ上げ、蛤御門と建礼門の間に位置する松ノ木の下まで逃れた。

「・・・・・・・・降ろせ。もう、ここでよい」

苦しげに血に塗れた身体で息も絶え絶えに来嶋が命じると、力士隊士らは静かに彼の巨体をその根元に落ち着かせた。

まだ、戦いは続いており発砲する音と怒声、阿鼻叫喚の生き地獄ととれる戦場の冷ややかな空気が漂っている。

隊士らは、彼を護り取り囲むように座して最期の命を待った。

「わしは此処で死ぬ。これよりお前達は国司殿に従い若君の下へ合流果たし、長州へ撤退せよ。」

そういい終えると、親しい者へ介錯を委ね来嶋又兵衛は腹を十字に裂き果てた。

嵯峨部隊が壊滅の憂き目にあった頃、久坂率いる一隊は堺町御門に攻め寄せる所であった。

終焉の炎（完結）

来嶋又兵衛率いる嵯峨部隊が襲撃を開始した頃、久坂玄瑞を将とする山崎の一隊は七条に向かっていた。

「急げ！嵯峨の陣に遅れを取ってはならん！急げ！」

久坂の率いる部隊には松門で共に学んだ、寺島忠三郎や入江九一などあって彼を始終

支え助けている。七条付近へ到達し、堺町御門辺りで、山崎の一隊は守備に当たっている越前兵と交戦。

久坂達の士気はまだ高く、負けじと接線交えじわじわと相手を追い詰め、遂には敗走させてしまった。

ふと、その時である。

北西の方角より、バラバラと近寄ってくる影が見える。

暗闇から駆け寄ってくる影は隊列乱れ幽霊のようで、久坂は怪物かと思わず身を固くした。

「久坂さん、敵兵でしょうか」

寺島が鏢からカチリと音を鳴らし鈍く光る刃を僅かに見せ警戒している。

久坂は眇めの瞳を細めて食い入るように闇に目を凝らした。

「義助・・・！ありゃ我が軍の兵じゃぞ」

同じ様にじっと歩を進めながら見つめていた入江が目を驚きを露にする。

敗残兵らしきぼろぼろの姿の武者達が、蛤御門の方向から彼等は走りよって来る。

何があったのか・・・

「何があった！来嶋翁はどうしたんじゃ！」

入江が怒声を上げ、隊士達を問い詰める。

彼等は腹巻に鉢金に鮮血を浴び、中には斬り込まれた傷口からおびたらしい血を流して、必死の形相で走りくるものもいる。無事な姿でいるものは極僅かであった。

「来嶋又兵衛殿を失い、蛤御門へ攻め寄せた嵯峨の部隊は壊滅じゃ」

国司信濃はそういつて、来嶋戦死の報を彼等にもたらすのであった。その声が止むを待たずに、敗走する部隊を追って薩摩の軍勢が大砲を打ち込んでくる。

薩摩勢の加勢に勢いを取り戻した越前兵もまた、こちらへ刃を光ら

せ向かってくる。

こうなると、形勢逆転。長州勢の旗色が悪くなった。

「くそ！奴等追って来おった」

「越前共も立ち直っていやがる」

久坂の隊は、薩摩や越前の猛攻を受け、已む無く進路を変更。

直ぐ先には鷹司邸があり、彼等は屋敷の中へ進入し屋敷の主を求めた。

久坂は、鷹司輔熙に己の嘆願の意を託す他ないと屋敷を歩きまわった。ついに、その主を認めるや

床に額づき、額をこすりつける様に、朝廷への敵意あつての行爲でない事、藩主らの冤罪を説く

為、涙ながらに裾に縋りつき哀願するのであつた。

丁度、朝廷より参内を受けていた鷹司卿に対し、久坂は何度も参内の供を懇願したが、遂に聞き入れられる

事はなく、彼の必死の願いも虚しく轟く怒声と銃声にかき消されてしまったのである。

ドドドッ！ドカ！バリバリ！

耳を劈く轟音とともに、彦根兵が邸内乱入してくる。

銃声が響き、互いの刃が入り乱れ、穏やかで雅を楽しんできた庭は一夜にして激戦区となった。

久坂は寺島らと共に、白兵戦に加わり邸内を斬り走った。

と、その時である。

久坂は更に歩を進めんと、刃を構え歩み出たその時。

ズキリと足に鈍い痛みを感じ、それから直ぐドツと膝から地へ倒れ込んでしまった。

（何が・・・？）

自分でも分らぬ程、痛みに鈍くなっていたのか。

余りの混戦で、我を忘れ斬りかかって居た為か。

久坂は視線を下に下ろすと、銃弾を受け負傷した己の足が視界にうつる。

「くそ！」

再び立ち上がろうとするも、力が入らない。

それどころか、足を打ちぬかれ身体すら抜け殻の様に軽く、傾き転がってしまう。

こんな事で・・・

久坂は必死に立ち上がろうとするが、何度やっても身体は思うように動いてくれなかった。

「久坂さん、座敷へ参りましょう」

寺島がいつの間にか傍へ寄って、身体を起こし支えていた。

久坂は已む無く自身の力で起き上がる事を諦め、黙って彼の言葉に従った。

その時には彦根兵は撃退され、幕兵らは長州兵の攻防に邸を取り囲み砲撃のみに徹する他なかったのである。

それだけ、彼等長州兵は退路絶たれ、必死の戦であった。

「兵は・・・兵はどれだけ無事であるか」

「数十・・・数百・・・程は。真木先生も御無事であります」

寺島は久坂の言葉の意味を何となく感じ取っていた。

無事なものだけでも、撤退させるつもりなのだろうと。

そして、己の始末をつけるつもりだと。

彼の終焉を悟った寺島は、血涙が噴出さんばかりである。

「入江・・・寺島。僕はここで死ぬから、無事な者達を真木先生と共に率い撤退させてくれんか」

おびただしい血を流し、久坂は初めて明確に「死」をつぶやいた。

これまで、共に歩み戦い抜いてきた同志の最期の願いである。

武士らしく潔く死んでいく。

後の日本は、自分と正反対であるが、あの男に任せていける。

安心して託していけると、久坂は己で成就できぬ無念さをすべて同胞に託す事で納得させた様だ。

「僕もちと負傷じゃ。背をやられとる・・・足手まといになるじやろ」

寺島が久坂に続いて少し苦しげに言葉を洩らした。

彼は尊敬する同門の先輩、久坂義助に殉じ共に終わろうとしていた。

そうこうする間も銃撃は激しさを増し、遂には屋敷のあちらこちらで火煙が立ちこめ始めた。

幕兵らはもとより、このまま焼殺そうというつもりらしい。

そうになると、残る残らないをごねている場合ではない。

「・・・・入江！君だけでも行ってくれ」

「しかし・・・・」

「頼む！ここから無事抜け出して、世子様や生き残った味方に撤退を・・・・な！頼む」

「入江さん！」

久坂は縋るような目で入江を説得した。

寺島も同じ様に、哀願の眼差しを向ける。

この時まで、一つの志のため、学び支えあってきた同志が最期の願いを自分に託そうとしている。

これを聞き届けなくて何が武士か。

入江は、一つ息を吐いて、二人を安心させるように大きく頷いた。

「解った！必ず……僕が必ず伝えお前らの言葉を……志を守り通してやる。」

入江は力強い笑みを投げかけると、潜戸へ走りよっていった。去っていく仲間の姿をみると、どちらともなしに顔を向ける。

「寺島、これで終わったな」

「はい。後は入江さん……生き残った同志に全てを委ねて、僕等は……」

「ああ、今度は天から見守っておればよいな」

そういつて、彼等は互いに刀を鞘から抜き取った。

久坂の刃は兄より継承した大事なものだった。

長く鋭い刃をもって堂々たる姿の兄、久坂玄機。

彼は兄を誇って、その兄弟の宿願であった「武士」への道を只管願ってきた。

それが近年やっと叶い、そして己は武士としての最期を今迎えようとしている。

現代に生きる我々からは少し遠のいた古来の日本人的な美学で、彼の思考は受け止め難い所もあるやも

知れぬが、それでも古きよき日本の一つの形としてしっかり己を律した考え方には共感し護りたい所である。久坂もまた、そうした武士道精神の構えを心に据え、日々武士でありたいと願い過ごしてきたのであるから、この日は彼にとって一つ誇れる日であつたのかもしれない。

「久坂さん。やりますか」

刀の鋭い切先をじっとみつめていた久坂を寺島が促す。久坂より四、五歳は若い寺島だが、彼もまた迷いなく晴れた清しい表情を称えていた。

「ああ」

「では・・・」

両者は座したまま向き合った。

そして、ゆっくりと突きの姿勢をとる。

相互に斬り合い果てるつもりである。

燃え盛る屋敷の熱さも今は気にならなかった。それどころか、心の内は心地よく満ちている。

つい、そんな可笑しな心境に噴出しそうになって堪えた。

（・・・高杉、皆・・・後は任せたぞ）

ふと脳裏に浮かぶ仲間の顔。
高杉などは呆れた様な表情で苦笑いしているが、任せろといった
様にも見れる。
そして、次に妻や恩師が浮かんだ時には、彼等の刃は互いを貫き通
していた。

鮮血が迸り、やがて赤い炎と一つになっていく。
赤い命を燃やす焔は、黒い色へと変わり、彼等を闇へと誘っていっ
たのである。

久坂玄瑞 享年二十五歳

この時代、日本は大きな変革期であり多くの人々が革命に立ち上
り、お国の為と戦い散った。
己の為に刃を振るわず、義の為に立ち向かう姿勢こそ、日本人の誇
りであった。

久坂という若者もまた、武士の気概を以って国の為、同胞の為に活
路を模索し懸命に弁を振るい
時には刃を振るった人である。

一人の若武者の生命の記録が、同胞達に伝い遺され、そしてその志
を継承しやがて日本は彼等
が望んだものとは完全一致といい難い面もあるが、確かに政治体制
の変革を向かえ、歴史に

残るあの明治維新となるのである。

終焉の炎（完結）（後書き）

長らくお付き合いくださり、有難う御座いました。

のんびり地味に執筆続けて参りましたが、本サイト共に無事完結できましたこと、御礼申し上げます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6595c/>

久坂玄瑞伝

2010年10月8日22時20分発行